口頭伝承

はじめに

大前・半出来の地名の由来、干川の姓の起り、音無し川・思い川にまつわる話、どれも伝説の主人公は源頼朝である。各地を遍歴したといわれる弘法大師の話は、門貝の逆さ杉などに伝わっている。馬小屋・馬洗い井戸・白い馬その他、馬の話も目立つ。

昔は、猿舞入・鳥呑爺・カシヤなどが採集された今井には、もっと豊富に伝承されているような気がしてならない。

調査期間中、うぐいすとほととぎすの声を、毎日耳にした。ほととぎすや、十一の話など、今度ほど身近かに聞いたことはなかった。

「鳩と豆」は、すでに「日本昔話集」(日本児童文庫)の中に、「鳩の立ち聴き」という題で、ほぼ同じ話が、上野吾妻郡として収められている。なお「醒睡笑」巻之六にも同様の話が出ているし、また「独楽新語」(和田万吉編江戸笑話選)に「豆畠」という題で、殿様が用人と、品川沖へ漕出し、下邸へ豆を蒔こうという話が出ているが、どれも同巧異曲である。

「這っても黒豆」ということわざがある。何がなんでも自説をまげない自信家をいうが、「故事ことわざ辞典」の参考に挙げてある「榎の実は成らば成れ椋の木」というのと、この村の「くるみとぬるで」とは、同じような人物で、この自信家を、ここではいんごうと呼んでいる。

命名について、その緒を、けさがけして生れたものに、けさと名づけるところは、県内各地に多いが、芦生田には、袈裟行・今朝造・ケサノ・けさ江など、現存の人だけでも、一三人いるのに驚いた。

ふきのとうを、なぜジャオージというのかは、昭和三六年の六合村調査以来、私の宿題である。ここでも、ジャオージまたはジャホージといっている。このジャオージとガンボージ(たんぽぽ・こうぞりなど)と結びつきそうな気がしているが、まだ仮説にとどまっている。

豆たたきのベエ(バイ)は、従来の調査で私は見過ごしていたものだが、「秋山郷」(新潟県教育委員会)を見ると、蠕恋のベエとそっくりの写真が、ソバウチベエという名で載っている。

また「日本の民俗」熊本にも、豆打ち棒の名で、ベエと同じ写真が出ている。(上野勇)

一、伝説

大前 昔、源頼朝が巻狩に来た時に、馬が足を痛めたのを洗って治した。そこを「馬洗い井戸」といい、湯が川端に湧いて温い。通称マヤラドといい、干俣川ねぶっかわせに、明治四十年ごろ、湯宿があった。

大前には、源頼朝のウマヤがあったので、オウマヤが大前になったという。(大前)

干俣と川 昔、源頼朝がこの地に遊んだ時、今の干川家の祖先が川の水を干し山魚をとって献上した。この功績により、頼朝から、「以後、干川の姓を名乗ってよい。」といわれたという。

以前、川がふたまたになって流れていたのを片方を干して、一本の流れにした。それ以後「干俣」という地名となった。

昔、星野俣五郎という郷士がいた。たいへん村のために尽くした人だっ

ドンドンの滝（田代）（撮影都丸十九一）

たので、その功績を後世まで残すために、星野の「星」を「干」の字にしまた「俣」の字を採って「干俣」という地名をこしらえた。

昔、「干俣」はたびたび大水が出たために人家はもっと山ぎわの小高い所にあった。そこで村内を流れる川を万座川に落すようにしたら、大水も少なくなったので、人々は現在の所に住みつくようになったという。（干俣）

湯くぼ　昔は湯くぼに、草津のお湯があった。そしてたまたま草津へ、草の葉に包んで、投げてくれた。それで草津にお湯が出るようになり、湯くぼが涸れた。薬師さんが投げた。（芦生田）

馬小屋　門貝のカブッシュ沢の山に馬小屋がある。浅く天井の低い岩穴で、馬盗人が馬を盗んできては入れておいた所で、すこし前まで、マセッボウのあとがあったという。いまは、ものすごい数のコウモリの巣になっている（門貝）

ドンドンの滝　ドンドンの滝にはドンドンばばあがすんでいて、油屋をひきこんだとか、油桶をひきこんだとか伝えている。（田代）

今井の小字名　今井の小字は、半出来、今井、仙ノ入、石津の4つに分れている。

半出来（はんでき）の起源について、源頼朝が三原に巻狩りに来た時に、獲物をとり、皮をむいたものをハデ木に掛けた所なので、それがハンデキになったと言う。又、頼朝が晴着を着たので、ハレギからハンデキになったとも言う。頼朝の坐ったという御座石があったが、今は欠けてしまった。

今井は**本村**（ほんむら）と通称され、一番古いとされている。館があり、真田の一族がいたという。以前はホリッコ（濠跡）があったという。

今井の忠四郎という所にテラ屋敷という場所がある。長野原町にある常林寺が天明3年の浅間押の時に流失して、二十数年ここに移転していたので、この名がある。

仙ノ入には数戸しかなかったが、戦後各地からの人が入って大きくなった開拓村である。

石津は石津千軒と言われ、盛えていたが、白根山の爆発以後衰退してしまった。なお郷路（ごろ）という場所があり、爆発の時の石が沢山ある。なお、石津には「五輪さん」と呼ばれる五輪塔がある。上田から沼田へ抜ける道しるべとして建てられたものと言う。（今井）

石津千軒　アシゲタ千軒　石津は昔からの家が十軒ありあとは戦後入植した人たちであるが昔は千軒ほどの戸数だったという話がある。又、現在の仙の入部落は以前はアシゲタといわれここにも多数の人が住んでいた。タレコウ、ヌタバなどの地名がある。火山信仰のタル講からきた地名ではないかともいわれている。耕地面積は両方とも三百町歩からある。（今井）

五輪平　昔白根山の中腹に寺があったが長野県須坂の方に移ってしまった。現在は寺やしき跡とか、ゴハメキといいヒエを坊主が五合毎年

まいたという場所がある。又、五輪の塔がありこれに手をふれると雨が降るといわれている。これは、鎌倉時代のさむらいの墓だともいわれている。営林署の人が下刈りに行きそんな話はないといい、さわったら雨が降ったので今でも本当のことと信じている。（今井）

熊野神社裏山の風穴　熊野神社の裏山に岩穴があり、風穴といっている。この穴に熊野神社の神符を鶏につけてはなしたところ越後の権現様に出て鳴いたという。（門貝）

お諏訪様　甲賀の三郎は、浦島太郎と同じことで、地下の国に行って来て、諏訪湖に出たとかいう。（芦生田）

音無し川　諏訪神社の境内から流れ出す水は夏冷たくて、冬暖かいきれいな水で、ヤマメがうんと取れた。建久三年卯月に源頼朝が三原に巻狩に来た時に、諏訪神社で蹴毬（けまり）の会をした。泊った時に、川の水がうるさいので、うるさいとがなったら音が止んだので、音無川という。（干俣）

思い川　頼朝が、浅間の狩に来た時、馬の馬場を作って練習したので、

熊野神社裏山の風穴（門貝）
（撮影中村和三郎）

今でも馬場（バンバ）組という名が残っている。また干俣に滞在し、頼朝がいい水を汲んで来いといったら、ここの思い川の水を汲んでいった。頼朝が、鎌倉で病気をし、重態の時、思い川の水を汲んで来いと、部下に命じた。部下が汲んでいったが、井戸をまちがえていった。頼朝が飲んで、違う、

思　い　川（三原）（撮影上野　勇）

思　い　川（三原）（撮影上野　勇）

熊野神社の大杉（門貝字鳴屋）
―弘法のさかさ杉―
（撮影中村和三郎）

どういうところだっていうと、それは違う、また使いがいって、思い川の水を汲んでいったら、ああこの水だといって、満足された。弘法大師が、切りつけた梵字があって、井戸神様として祭ってある。今は、水道を使うようになったが、昔は、十軒、その水で生活していた。冬は温かく、夏はつめたく、近所では、冷蔵庫の代りにしている。（三原）

弘法のさかさ杉　弘法のさかさ杉は熊野神社の境内にあり、弘法大師がさしたつえが成長したと伝え、枝張りがかわっており、弘法のさかさ杉と呼ばれている。樹齢約五〇〇年、根元廻り約九メートル。（門貝）

弘法様　弘法様が百姓屋に行ったらイモを焼いていたので、イモをくれと言ったら、そこの百姓は「イモはねえ、石だ」と答えた。そうしたらその百姓の畑のイモがみんな石になった。

次の部落でセンベイ屋によってセンベイをくれと言ったら半分くれた。それで次の歌をよんだ。

十五夜に片われ月はなけれども、雲にかくれてここに半分。（門貝）

円通院　巨大な一本のアクダワラの木で建てたが、三条から特大の大のこぎりを借りてきて、その木を切ったもいう。（千俣）

上が城の平（袋倉）（撮影丑木幸男）

天狗倒し　城の平で晩方になると木を伐る音と、木が倒れるミリミリという音がした。日が入ると天狗が木を伐るという。おっかなくてしようがないので、みんなそこに住んでいる人は、下の部落におりてしまった。

神社合併で、袋倉の神社も鎌原に集めてしまったので、始まった。出雲から勧請して神社を建てたら、やんだ。（袋倉）

石津の馬頭観音　馬頭観音の仏像を造るため村中の人が白根山のツガの木を見つけて歩き決めた日が二百年ほど前の九月九日であった。次に九月十九日にその木を切りに行ったけれども、もっと山の上に行ったらよい木があるのではないかと歩き回っている中に吹雪となりやむなく最初に見つけた木を切って来た。九月二十七日に村中で出てその木を引きおろして来て、その晩餅をついてお祝をした。

何十日か、かかって仏像を造り上げたが、仕上げた晩にその人は急死してしまった。

像は手が六本で一本の木で造られている。虫歯が痛むとき願を掛けるとよく治った。願果しには、竹の輪を、腰が痛むときには腰巻きを上げた。

観音講として村中の信仰の対象となっていた。昔は馬を盛んに使用した関係もあった。

現在でも、毎年二月十九日と彼岸の中日のたびに念仏を行なっている。村中の仏像を本村に集めたときこの像は集めずに置いたため三年ほど前に全部仏像を焼失してしまったが、焼失をまぬかれた。（今井）

二十三夜様　二十三夜待が昔は盛んだった。願いごとがかなうということであった。その晩は希望者が集り、仕事をしながら月の昇りを待った。仕事としては、なわないが普通で月の昇りまでに二十尋のものを五つぐらい仕上げた。

特にごりやくがあるやり方は、川原の中で、石の上で二十三夜待をすることだといわれており、ある人たちは、このことを信じて二十三夜待を河原で行なっていたところ大水となり危険となったので、一人残して逃げた。一人は水量が増した川の中で石の上に立っていると三夜さんが見えた。それから家に帰って見たらまだ出なかったことがわかった。この危険を三夜様が守ったのだと伝えられている。又、ある峠の下で日暮になり困っていると、赤ン坊を背負った女が一緒に行きましょうとさそわれて登った。峠の頂上で一休みしようと言うので休んで見ると女は一ツ目であることがわかり、驚きで身動きも出来ずにいる中に、月が昇り、女を照すやいなや、山鳴りがしてズシン、ズシンという音がして逃げて行ってしまった。これは二十三夜様を信仰していたお蔭だということで伝えられている。（今井）

あげひばり　寺から一キロ位のぼると善光寺道（関所の裏道）があり、そこに一つの石碑がある。

「あげひばり　みあげてここにやすろうて
　右は仏の道としるべし」と刻んである。

これには次のような話がある。

人品いやしからざる美人―実は真田の妾―が秘密書類を大阪からもってきた。書類を腹にしまい、はらみ女にばけてきた。道がわからないので、たまたま五兵衛さんにきいた。五兵衛さんはこの歌を歌って教えてやった。しかし善光寺橋という一本橋があり、女には渡れる筈はない。そう思って五兵衛さんは翌朝いってみたら、案の定橋から落ちて死んでいた。そこで埋葬して碑を建てたという。（大笹）

揚雲雀の碑（大笹）（撮影都丸十九一）

同　右

白い鶏　さかもと親王が、京都で世継ぎの問題で、誰が次の位に着くかという時、つばめの糞が目に入って、盲になったので、信州へ山流しになった。家来が連れて来て、山の中へ置いていった。つばめの糞が悪かったので、それから白い鶏を、飼わなくなった。（三原）

片目の小さい理由　大笹の人は片目が小さい。鎮守のお諏訪様が、芋がらですべってころんで、胡麻がらで目をついて、目を患ったので。今でも大笹では、この両種の作物をつくらない。（大笹）

浅間さんがいもがらでのめって、ゴマで目をついたので、浅間山の見える所では里いもとゴマを作ってはいけない。

浅間山麓の人は目がびっこだと言う。（袋倉）

白い馬　小諸城のお姫様に、馬がほれて、家来どもが、草をやったのでは、食べない。お姫様がやると、喜んで食べる。馬場を幾回か廻れば、一緒にしてやるというと、馬は一所懸命に廻り始めた。本当に約束通り、廻りそうになったので、時間は来ないのに、合図のかねを鳴らした。馬は、ばたっとひっくり返った。この馬の祟りで、三原では、白い馬を飼わない。（三原）

門貝字鳴尾の鳥は、二羽よりふえない。

門貝字鳴尾では、家の数が十軒よりふえない。（門貝）

浅間山遠望（三原）（撮影上野勇）

山の背比べ　浅間山と富士山と背比べをした。浅間の神が鬼どもを集めて土盛りをして、浅間にあげると、里芋の葉っぱで、すべって転んで、胡麻の草で目をつぶした。こぼした土盛りが、小浅間になった。鬼の集った、鬼の土俵場（相撲場）が、今もある。この村では、里芋と胡麻を作らない。この辺では、油を取る材料に胡麻の代りに、いくさを作る。（三原）

二、昔話

ほととぎす　ほととぎすはたくさん子どもがいた。ある日お客が来た。魚のきれ目を御馳走に出した。子どもの兄弟たちは障子の穴からのぞいていて、オレモクウ、オレモクウとさえずった。お客が帰ったあと、残りの切れ目がなくなった。兄弟たちはオメエクッタンベ、オメエクッタンベと争った。おしまいに末の弟が疑いをかけられて、弟はのどをきりさかれてしまったが、弟の胃袋には切れ目は入っていなかった。そこでほととぎすはオトノドツッキッタ、オトノドツッキッタとないてとぶのである。（大笹）

おとと恋しや、ほとっきったかと一日に八千八回鳴かないと、えさを食べない。その言われは、あるとき兄弟でホド（芋）を焼いて食べていたとき、弟が兄にうまいところを食べさせたのに、兄は弟がうまいところを食べてしまったと思って弟のノドをついてしまった。ノドの中の芋をみてまずいところを食べていたのがわかって、それからはえさを食べる前に「おとと恋しや　ほとつっきったか」と八千八回鳴く。（門貝）

弟が兄さんに、いもを焼いてだか煮てだか知らないが、おれにこんなうまいものを、くれるのだから、てめえじゃ、どんなにうまいもの食ってるか、のど切ったら、皮だけだった。その罪で、のどつっきったって、八千八声鳴く。八千八声も鳴くだから、自分で子どもを育てることができねえで、もずの巣へ行って、卵を生む。そして、もずが育ててくれる。

鳴いているので、餌を食う間がねえ。もずが蛙をはりつけにしておくと、ほととぎすが見つけて、取って食う。（芦生田）

山にほどというもんがある。昔のこんだから、自分はほどのつるを食べて、兄にいい方を食べさせた。兄は弟の方が、もっとうまいものを食っていると思って、のどを切ってみたら、つるばっかりだった。それで、おととこいしや、ほとのどつっきったと鳴く。（三原）

ジュウイチ（慈悲心鳥）　慈悲心鳥の母親が野原に子どもをつれていったら、子どもたちは喜んで遊んでいるうちに、十一番目の子が迷子になってしまった。それから親はそれを求めてジュウイチ、ジュウイチと鳴くのである。（大笹）

ひえの春作りする時、親たちが、畑へいってる留守に、子どもがいなくなった。親が十一、十一と、いまだにめっけてる。あの鳥が鳴けば、ひえ作っていい。（芦生田）

うずらとひばり　凶作の年にうずらがひばりに食料を借りた。いつになってもひばりは返せずにいる。そこでひばりは天上に上りながら、ヒエ（稗）トル、メートル、テントサンニマネル（告げる）と鳴くのである。一方うずらはツクッテヤルー、ツクッテヤルーと鳴くということである。（大笹）

へびとめめず　むかし蛇に目がなく、いい声で鳴いていた。みみずには目があった。ある時みみずが蛇のところへ行って、目と声をとりかえっこした。そこで蛇には目があり、みみずはいい声でなくのである。みみずの声は、こおろぎより小さい、草むらや田のくろでいい声である。これはもずも食わない太いみみずである。（大笹）

蛙と雨　蛙だっけ、雨が降ると、余計鳴かーさね。おっかさんが死んで、いけるところがなくて、川ばたへいけておいたんだってね。すると雨が降ると、おっかさんが流れちゃ困る、おっかさんが流れちゃ困るって、雨が降ると鳴くだって。（芦生田）

萱の根　萱の根が赤いのは、ヤマンバが、人をひきずったので、赤くなった。（門貝）

猿聟入　昔、おじいさんが畑で粟を作っていた。一休みしていると、猿が来て、一人じゃ大変だろうからというので手伝ってくれた。サクを切ったりして、たちまち粟を作ってしまった。

おじいさんが大変喜んで、娘が三人いるから、お前に嫁にやろうと言うと、猿も一所懸命になって手伝った。

家に帰ってから娘に言えば怒られるから、困ってふとんをしいて一人で寝こんでしまった。

娘が心配してオカユでも何でも食えやと言ったので、こういうわけでお前が猿の所へ嫁へ行ってくれれば、何でも食うからと言うと一番上の娘は怒って、バカジジイ、誰が猿の所へ嫁に行けるかと行ってしまった。

二番目の娘が来て、オカユでも食えやと言うので、こういうわけで猿の所へ嫁に行ってくれやと言うと、怒って行ってしまった。

末の娘が来て、オトウ、オカユでも何でも食わっせえと言うので、こういう訳だけど、他の奴ら行きようがねえ、お前が行ってくれなけりゃ、猿にひでえ目にあうと言うと、いいよ、俺が行くよと末の娘が言った。

嫁に行く日どりを決めておくと、その朝、おじいさんの庭先に猿がキャッキャッ喜んでお伴を連れて迎えに来ていた。

娘は小さな風呂敷包みを持って猿と一緒に行った。猿はキャッキャッ言って、風呂敷包みを持って行った。

途中、川に藤つるで橋がかけてあり、そこに猿がつながって猿ばしごをこしらえ、娘はこわごわと猿の上を渡った。それを越えると奥山で、洞穴があり、猿のすみかで、広くて住み良くなっていた。

しばらくすると、三月の節供になった。

娘が、人間の世界では三月の節供にはおじいの所に、餅をついて持って行くと言うので、猿も餅つきの準備を始めた。石臼でつき終って、何に包んで行こうか、木の皮でいいかと言うと、木の皮で包めば木臭くてお父は食わねえ、臼ごと持って行けば喜ぶというので、石臼のままかつ

いで餅を持ってきた。

途中、川のほとりに来ると桜の花がきれいに咲いているので、お父は花咲きだから、あれを持って行けば喜ぶというと、猿はそれじゃ取ってこようと言って、臼を置いて行こうとすると、石臼を下に置けば餅が土臭くなってお父は食わねえ、石臼をしょったまま行ってくれと言うので、石臼をしょったまま桜の木に登った。近くのを取ろうとすると、もっと先の方のきれいなのをとってくれと言うので、先へ行って、枝の細い所のを取ろうとして、石臼の重さの為に、枝が折れて猿も一緒に川へ落ちてしまった。

猿川に流るる身をば惜しまねど
　栗で定めた娘が恋し

と言って死んでしまった。（今井・石津・一場みつ氏）

鳥呑爺　昔、おじいさんが畑で鋤をうなっていただと。一休みしていると、鋤の柄にチチンがとまった。モチを持ってたんで、チチンにモチをやっただと。そしたらモチにくっついて動けなくなった。鋤の柄にバタバタしているのを、エンガな奴だと言ってつかまえてひんのんだだと。そしたら、へそからチチンの足が出ただと。それを引っ張ると、

チチンピヨドリ　ゴヨーの盃
チョット持ってござれ　チチロチーン

と鳴いただと。

家へ帰ってばあさんに言うと、「江戸には殿様ちゅうもんがいるそうだから、行って見たがいい」と言われて、お昼しょって江戸へいっかもかかって出かけて行っただと。

殿様の屋敷の近くで

「ヘッピリじいがまあよった」と言うと

殿様に呼ばれて「その方はへをするか」

「どんなへでもいたします」て言うと、「こっちへ来てへをしてみろ」と言われて、エライ部屋に通されただと。モーセンの上に布団をしいて、その上に寝て

チチンピヨドリ　ゴヨーの盃
チョット持ってござれ　チチロチーン

としただと。殿様が感心して、今一つひれと言うので、又

チチンピヨドリ　ゴヨーの盃
チョット持ってござれ　チチロチーン

としただと。

その方は奇妙なへをひるえらいものだって殿様にほめられて、金やら着物やらたんと貰って帰っただと。小判だのだから重たくて、やっとえんで来て、婆さんと喜んでいただと。

となりの婆さんがどうしただと聞くので、江戸の殿様に行って、へをひってほめられて来ただ。出かける前に、セッチンロにあったあかざを、うでて三杯、あえて三杯、生の三杯、食わせてやったら、いいへが出ただ、と言っただと。

となりの婆さんがじいさんにむりにあかざを食わせて、いっかもかかって江戸へ行って

「へっぴりじーがまーよった」て言うて、「この間の者か、こっちへ呼べ」と殿様に呼ばれて、エライ部屋に通されただと。モーセンの上に布団を敷いて、その上でへをひるべえと思ったら、あかざぐそをたれただと。

殿様に怒られて、なぐられて血を流して帰って来ただと。痛いもんだから静かに帰って来ただと。婆さんはほうびが重たくて静かに帰って来たと思ったら、あかざぐそをたれてどつかれて、血を流してただと。こんな話だあね。（今井・石津・一場みつ氏）

カシャ　ヨタッ寺でトラ猫を飼っていた。住職がいなくなると、猫が住職の衣を着たりして小僧をおどかしていた。

住職がそれを聞いて、トラ猫に今まで可愛がっていたのに、そんなことをするんじゃ、寺においておけない。ヒマをくれると言うと猫が、今

までお世話になった恩返しをしましょう。隣村の大尽の婆さんがもうじき死ぬから、その時俺がカシャになって仏をとるから、乞食坊主の格好をして、棺に仏はいないと言えと言って、出て行った。

しばらくすると大尽の婆さんが死んで、エライ寺の坊主が沢山来ておがんでいた。乞食坊主のなりをして、この棺に仏はいないと言うと、乞食坊主が何を言うかと言って、それでも棺をあけて見るといないので、ビックリして、いないのが分る位だから、仏を出せるだろう、出せ出せと言っている所へ、上の方からトラ猫がドサッと仏を落した。エライ坊主だと言うので、すぐお寺を建てなおしてくれたり、立派な寺にしてもらった。

今でも葬式に坊さんが次のように唱えている。

ナムカラタンノウ、トラヤーヤーヤー

ナムカラタンノウ、トラヤーヤーヤー

トラ猫に頼んでいるのだという。（今井・石津・一場　みつ氏）

カシャにさらわれた話　ふぶきの日に、龍とも竜ともつかないカシャにさらわれた人がいた。その人の先祖が金持の馬喰を殺して金をうばって逃げたそのたたりだとうわさになった。（門貝）

姨捨山　年寄りを、山へおぶっていったが、親だからうっちゃれねえで、むろへ入れといた。おかみから、へーなわ（灰縄）を作れって。年寄りに聞いたら、藁を塩水でしめして、しっかり作ってから燃せっていわれた。いわれたとおりに作って出したら、どうして作ったって。親をぶっちゃれねえから、親に教って作った。それからぶっちゃらねえ。信州に姨捨山があるね。（三原）

鳩と豆　中之条の四万へ行く途中の山田に、折田という川がある。川向うから、しょうべえさん、なにしてるっていったら、黙って、つうっと二里も先の橋を廻って来て、その人のところへ来て、豆蒔きだっていった。鳩が豆食うから。

その人が、嫁貰った。そういういんごうな人だから、困ると思って、おやじさんが、娘を大事にしてくれといったって。そしたら、正月いくのに、おぶっていった。いやだっていうのに、子どもおぶうように、おぶっていった。おやじさん大事にしてる、これほど大事にしようがねえじゃねえかっていった。（三原）

くるみとぬるで　大前に、いんごうな男がいた。ぬるでとくるみが、よく似ているので、これはくるみだ、いやぬるでだと、いいあった。秋になったら、くるみが二つ三つ、なった。くるみがなったじゃないかっていうと、くるみが二つ三つなったって、ぬるではぬるでだといった。（三原）

温泉　温泉てのは、火山が寒かってしまえばできる。白根がそうだし、浅間は、まだ盛んに噴いてるからまだ温泉が出ねえって、話したら、そんなばかなことが、あるもんか。それじゃ塞いでみろといった。（三原）

世直し　明治の初めに、世直しがやって来た。各部落に立寄っておどしてお供をさせ、ぼんでんをかつがせて上って来た。首謀者は二三人であった。三原、西窪を通って袋倉に来た。大笹の関所はむずかしいと考えていたらしい。村人に追われて遂に山崎氏の薪小屋で一人がつかまった。長野原で十手を持った者が来て、村の大下川原に連れて行き、橋の上から川の上に首を出しておいて、右手ではけがれるといい、左手で首を切り落した。もう一人は、半出来のある家に入った。機織りをしていたおばあさんに金を出してぜひかくしてくれと頼んだが聞き入れられず逃げ出してつかまえられたということであった。（袋倉）

おしこみ　明治の初めに山崎氏の家に押し込みが入った。昼間、沸し湯場でこも包みに刀を入れて一日待って夕方首を手拭で結びケットウに無数のトグスリを差しておどしに来た。子どもに危害があっては困るので、機転を働せ、山崎氏のおばあさんが「夕方だから腹がすいたろう」といい火箸でほどに焼いておいた焼もちを差して、すばやく突出したところ驚いて後にさがった。どこから来たかと問いかけると「おれは草津の義一だ」といった。そこで「今日は米を仕入れたので金などないから、

さいふごと持って行け」と投げ出して与えて追い返した。

次の日、小雨の酒屋に米を届け、そこで昨夜の話をすると、居合せた、畳屋の顔が変わり、兄の名前が知られていることに驚き帰ってつかまえて突出したという話しがあった。（袋倉）

嫁騒動　富岡の製糸工場が出来たとき、女工集めに来るという話しが広まり、連れられて行った娘は外人に血を吸われるということで、嫁にならないものは連れて行くということになり、嫁にくれたとか、嫁をもらったという話しが多くなって来て、仲人は、一日に三組も世話をした。その時結ばれた人が多かった。一場健一さんの祖父母の方もその時だと聞いている。（袋倉）

裸　昔は、片肌脱げば五十銭取られた。いまいましいから、両方脱いじゃえっていった。今のものは、けつまで出してる。（芦生田）

汽車　吾妻まで、弁当しょって、汽車見にいった。トロ見たら、汽車だ、汽車だっていって喜んだ。そして汽車のけむの出たのが来たら、丸くなって、飛んでった。今考えたら、おかしな話だ。（芦生田）

電気・電話　電気ってものがあるだっちゅうが、どんなもんだがな。うちん中で、しゃべるのが聞けるようになるって、なんだんべなってったら、それが電話だった。

飛行機　今に人間に、羽が生えて飛んで来るぞっていった。（芦生田）

ナマ団子　信州との交通の多かった頃、毛無峠を越えて年神様を持ってくるじいさんがいた。あるとき、金をとろうとしてじいさんを殺したら、金がハサミや包丁に変ってしまった。

その殺した人の子孫が団子を煮ようとしても決して煮えなかったという。（門貝）

三、怪　異

人だま　人だまは、青いような赤っぺえような色で、上ったり下りたり、いそがないで、ふわふわする。それに比べて、山鳥は早い。尾を引いて光る。

うちの孫が、死ぬ前晩、栗の木から出て、神社の栗の木の方に消えた。（芦生田）

光り玉　光り玉が、外に見えるのを、写真をとる時の反射だなんて思っていたが、写真とったって反射しない。そのうち、光り玉がお勝手の障子に、でーんと音がしてぶっついて消えた。それから眠ったら、夫が死んだという電報が来た。（芦生田）

しらせ　寝ていたら、死んで幾年も経ってっから、わたしの知ってる近所の人が二人、死んでた。昔だから、縞の着物に、ちゃんと大きなあぐらをかいて、その時に兵隊で死んだ子が、うちにいる時の学生帽をかぶって、すぐわしの寝ているままの柱に登って、顔は見られねえが、あれが出ていった時の格好じゃねえかね。昼間だったね。具合が悪くて寝ていたが、今日は、仏が三人、わしがとこへ来たといったが、ひとは、ほんにしなかった。死にぎわによく見るというが、ちょっと具合が悪い時だった。ベリュー島で死にやした。二十七年になる。（三原）

生れかわり　足の下に字を書いておいたら犬に生れかわった。

○

昭和のはじめ、袋倉の人が、芦生田で鉄砲に撃たれた。消防の団長していたもので、出初め式の朝だった。あんまりかわいそうだって、しるしをつけてやったら、撃たれた人の妹の子に、横浜で生れかわった。いけたとこの砂を持っていって、洗うと落ちた。

○

大正十三年、芦生田に消防団ができて、山崎武之助が団長していた。今井に火事があって、その後始末を、年取りの晩だからあとにしようということから口論になって、元日の朝、小頭に鉄砲でぶたれた。小頭は、酒が好きだった。人をぶって来て、暫く会えないがって、駐在所へ行った。（三原）

鎌原でなくなった人が、原町で生まれかわった。紙のおひねりのようにして、お墓の土を貰ったていったら、きれいに落ちた。(芦生田)

狐　子供を育てている狐には赤飯をふかして油揚げをそえてその穴のところまで持っていってやった。狐は穴のところで必ず待っていて迎えたという。帰りには必ず提燈をつけて送って来たともいう。(大笹)

きつね・むじな　きつねは、好きなものを取るだけだが、むじなは、岩から落したりするから危い。

きつねに、戸花(トバナ)の班女、千茅(チガヤ)の義経というのがいた。(三原)

キツネ　いい女になって人をだます。ヨシガ沢にオハンというキツネがいて、魚などをもって通ると石ころになって足にまつわりつくという。(門貝)

ナギ(地名・六里が原の中にある)の義経とトハナ(地名・門貝の中にある)のオハンとが夫婦狐で、三ゲ川(吾妻川)をまたいで行ったり来たりした。人をバカしたりした。(今井)

キツネの名前は戸花のオハンジョ、チガヤのヨシツネ、ユクボのオユミ。(門貝)

キツネ火　戸花にキツネ火がともった。遠くに見えるときは、キツネが足もとにいると言われているので、鎌で足もとをはらったら、カサッと音がして逃げて行った。同時に戸花の火も消えた。(門貝)

キツネの嫁通り　日があたったり、雨が降ったり天気がチャカチャカ変るのを、キツネの嫁通りという。(門貝)

キツネにばかされた話　干俣から魚を買って帰る途中、中平のあたりで石が足にまつわりついてママネ(土手ぎわ)に押しつけられて歩けなくなった。そのときガサガサという音がして魚をとられた。そのあとは石がじゃまをしなくなった。(門貝)

狐にばかにされるのは中位の人だけ。バカかリコウはだまされない。

夜、今井から提灯をつけてやって来た。灯りがチリチリと細くなったので、狐が出たとわかり「いるなら出て来やがれ」と杖にしていた棒をおっぷった。狐の胴中にあたったらしく、道下におっこった。それから出なくなった。

狐は足元にいて、遠くの方に色々のものを出してだます。火を燃したり、踊りをしたりしてだます。石を拾ってほうりなげたりしているうちに、手拭をひっちゃぶかれたり、こづかれたりした。

四・五年前のこと。仙の入の人がオートバイに乗って崖から落ちて死んだ。アブラゲやチクワをバイクにつけていたが、それをかじった跡があった。狐にだまされたのだろう。

今でも狐はいくらでもいる。鶏を飼っているので、それがねらわれる。ウドを採りに行ったら狐の巣が沢山あった。石津鉱山へ行く途中の採草地である。(今井)

ササムジナ　もろこしをかいてしまう。もろこしを上の原に作ると熊にやられ、里につくるとササムジナにやられる。(門貝)

熊(ツキノワ熊)　山奥が開発されて追われて出てくるのか、戦後よけい出るようになった。

キツネやサルは、つい最近までみることがあった。ササムジナや月の輪熊は、今でもさとに出てモロコシなどを荒らすことがある。(門貝)

鹿のロウ　関所の近くに「鹿のロウ」というところがある。両側が断崖絶壁である。山犬が鹿を追って来る。逃げようがないので、この絶壁から鹿が落ちて死んだ。某氏の畑からは、今でも鹿の角や骨が出るという。(大笹)

山犬　昔はたくさんいたという。黒岩さんのお父さんが明治二十年代に捕ったのが最後だったという。昔は牛馬が死ぬとオトウノシタ(藤の下)へ捨てた。すると山犬が来てそれを食った。村人は岩の上からそれを見ていたという。(大笹)

鳴尾のカラス　鳴尾のカラスは二羽以上ふえない。(門貝)

カラスの鳴きわかれ　九月、コガラ山に子を一羽とられるので、せつなくて鳴く。(門貝)

カッパ　鳴尾のキッカケ橋（川のふちの木を倒して橋にした）にカッパなどのお化けが出た。

大笹から万座へ郵便を持って行った時、キッカケ橋の辺りで向うに人がいるので早く追いつこうと思って急ぐが、仲々おっつかない。いつの間にかいなくなってしまった。何かバカにされたのだろう。

白根からイヨウ（硫黄）付け馬が来て、キッカケ橋にさしかかった。馬方が、馬がかしげていないのに「オラが馬がかしげる」と言って、馬の所へ行って荷物に手をかけて直そうとした。どうしたはずみか手を放してしまい、そのまま川に落ちて死んでしまった。

干俣の家へ死体を運んで、墓地に埋けたら死体がキッカケ橋まで行っている。川からあげて又、干俣へ埋けると、又、キッカケ橋に行っている。3回、持って来たという。

ケッを抜かれていたので、カッパの仕業だろう。カッパにケッを抜かれると、川に入れても浮いてしまう。（今井）

アズキゴシゴシ　ドンドン沢からアズキゴシゴシという妖怪が出るといわれた。（大前）

四、命　名

人　名

けさ　へその緒を、頸にけさがけにして生れたものは、けさってつけないといけない。

男　熊川袈裟行　昭一八・四・一五生
　　大塚今朝造　大一五・一・二
　　山崎今朝幸　昭四二・九・二六
　　丸山袈裟雄　昭四・三・二八
　　山本今朝雄　昭三二・七・八
　　萩原今朝由　大四・九・二〇

女　相馬けさ江　昭一七・九・二〇
　　唐沢ケサノ　大七・八・一七
　　下谷けさ代　昭二六・二・六
　　下谷けさじ　明三九・五・二〇
　　井上けさみ　大三・五・二
　　桜井けさい
　　桜井けさじ　（芦生田）

首にケサをつけて生まれた子供にケサという字をつける。

女名に、はるじ、けさじ、あさじ、はつじ、うめじなど「じ」のつく名前が多い。（門貝）

女の名前　大沢けさじ　滝沢はるじ　滝沢とみを　滝沢モトヒ　滝沢みのる　黒岩アサジ　黒岩タカジ　黒岩かめじ　黒岩ちよじ　黒岩はつじ　黒岩うめじ　滝沢きよじ　滝沢なす　黒岩おせき　黒岩桜丸。（門貝）

なかじ　始め六人生んだら、あと六人生むからといって、なかじとつけたが、そんなには生まなかった。

くり・もも　昔の人は考えが悪いから、そこらにあるものをつける。（三原）

末子の名　とめじとつけたが、まだできたので、すみへい・とみとつけ、最後にうしわかとつけて、とまった。（芦生田）

丈夫の名　熊一とか、寅雄とか、つけると丈夫に育つ。

子どもが死んでしょうがねえから、鍋の下からとりあげて、なべとつけた。（三原）

石ぞう　女と男と幾たりかなくなったので、石ぞうとつけたら、丈夫に育った。（芦生田）

短命の名　夏代とつけたら、夏の夜は短いぞ、寿命が短いといわれた。（芦生田）

体が弱いとか、夜泣きが治らないというようなとき、名前をかえるこ

とがある。例えば、実五郎→三四郎、寅雄→七五三雄、竹一郎→伸雄など。このようなとき普段は俗名で呼び合う。（田代）

同姓同名の区別　黒岩福次　山の上の福次、ノンベ福次

黒岩マサジ　大マサ、小マサ

滝沢ツネオ　鳴尾のツネオ、戸花のツネオ（門貝）

あだな　ほらを吹くので、天狗松。二万や三万なら、おれが出すと、まともなことをいわないので、モーソー徳さん。（三原）

地名

城平（じょうびら）、柿の木平、西の平、東、しもかたなどがあるが、城平は十二様の木の切る音が夜になると聞えていたが出雲大社を祭ってから聞えなくなった。（袋倉）

藤塚　テシロウ塚　タノカミシ（田之神祠？）、上前原、西村、シバラ、忠四郎、松橋、アマツミ、ゴージガサワ（郷尻沢）。（今井）

デエジャックボ、オセドのクボ、コヤシキ、ドウノメエ（西窪）

坂の名　ホトケ坂、梵字を彫った碑が建っている。ハチマンザカ、カキンザカ（三原）

門貝の沢　カブッチョ沢、エダ沢、カジカ沢、ナシ沢、（門貝）

ヤンブシガマ　鉱山の下の万座川の渓流にある。（門貝）

西窪城　城跡に一の池、二の池、三の池が残っている。三の池は四十三年の大水で流れてしまった。（西窪）

五、諺

道もちょちんもない……何にが何んだかわからないこと。又は全然道がわからないこと。

今井に嫁にやるな……今井は働きずきで苦労が多いので嫁にくれるなということ。（今井）

嫁婿は、小便いっちょうでも、しもがいい。

川上へはなかなか貰えない。嫁婿には、なかなか来手がないので、村同志で結婚することが多かった。（三原）

おおあり（尾張）名古屋のコンコンチキーあたりまえ、当然のこと、などの意味で使う。（西窪）

人をいのらば穴二つ。

こごみ女にそり男。（門貝）

オダテモッコには乗り手がない。それでも誰かが乗りたがる

正月は三月の食いだおれ（三月だおれともいう）（西窪）

アクダラの木登り　つらいことの譬え、アクダラはとげが多い。

からっ茶飲むのは、ばらしょって、木登りするよりつらい。（三原）

親の意見とナスビの花は、千に一つのムダもない。

ナスは花が咲いただけ実がなり、むだ花がない。

歯　コゴミッパはじょうぶだという。米俵をくわえあげられるという。ネズミッパとはこまの小さい歯をさし、形の大きい歯はウマノハだという。（門貝）

夜かをはさむと、親の死に目に会えない。

立臼の上で遊ぶと、背が大きくならない。（干俣）

八十八の祝いをすると死ぬ

フスベ　涙線の下にある人は、不幸になる。

耳の小さい人は短命である。

マミゲ　マミゲの長い人は長生きをする。

つちふまずのはっきりしている人は、足が強い。（門貝）

段々畑　君の方は、畑があり過ぎて、立てかけておくそうじゃないかといわれた。

大雨　細びき下げたような、大降りがつづいた。（三原）

六　謎

なんぞがとけない時は、モンジとか、モンジアゲタという。（芦生田）
なぞ　とけない時は、モンジアケタという。
なんぞなんぞ、ななんぞ、なっきりぼーちょーなぎなた。（三原）
なんぞなんぞなーに、なっきりぼーちょーまないた。
木の上で座布団敷いているもの、なんぞ　柿
池に反り橋団子ちんこ、なんぞ　鉄瓶
朝起きて細い道通るもの、なんぞ　戸
うちのぐるわを、太鼓叩いて廻る（歩く）ものなんぞ　アモチンダレ
―雨だれ―
木の上で口あいてるもの、なんぞ　あけび
いがどんのかろしとにおじょろ三人、なんぞ　栗
木の上で鼻たらしてるもの、なんぞ　もも・やにもも
ベカベッカデ、アカモコナカマッカ、なんぞ　鍛冶屋のふいご
うち中のひびきらし、なんぞ　壁
いる時戸をつめといて、いない時あけるもの、なんぞ　マセーボー
削れば削るほど大きくなるもの、なんぞ　節穴
上で算術下でぶらんこ、なんぞ　時計
時計とかけて、なんととく　日本の兵隊さんととく　そのこころは
勝った勝ったと進んでいく（打てば打つほど進んでいく）
二十三夜まちとかけて、なんととく　妊婦ととく　そのこころは　月のあがるのを待つ（芦生田）
角の箱に、ぽたん一つ、なんぞ　炉（三原）
なんぞ　したなし　蓋なし　中いっぱい実のはいるもの何
モモヒキ
からになることもある（門貝）

七、方　言

植物名

チンコログサ　翁草
イタチグサ　げんのしょうこ
ゲーロッパ　大ばこ　（田代）
チンコロバナ　おきなぐさ、ガンボージともいう。
ガンボージ　食べてうまい。チャンボコみたいに、花は出ない。チャンボコみちょうの葉っぱだけど、その葉っぱに毛がある。（三原）
タンボボに似た草で、しんが立って長くなる。葉うらに毛がいっぱいあって布によく貼りつくので、人の背中に貼り付けて遊んだ。若い葉は食べられる。毛は白く飛ぶ。赤黒い実になる。（大前）
たんぽぽの白くほおけたものをいう。ほおけないのをチャンボコ、葉っぱをクジナという。
黄色い花が咲き、枝がある。乳が出て食べられる。（芦生田）
クジナ、タンボボのことをいう。これは食べられる。タンボボの実がもじゃもじゃになることをガンボージというようだ。（干俣）
タンボボ　ガンボウジ　クジナ（門貝）
ガンボジ　女の子の頭の毛がもじゃもじゃの時に、「ガンボジのようだ」という。（大前）
ジャホージ　ジャンコージともいう。ふきのとう。ジャホージコンゲン、ミズコンゲンととなえる。（三原）
ふきのとう（芦生田）
フキノトウのこと。春先に雪が消えると出てくる。食べられる。（大前）
ホーキノホージ　フキノトウのことで、フキッタマともいう。ジャホージというのは三原あたりのことば。（干俣）
ジャボウジ　ふきのとう　（門貝）

フロー　ササゲ
リュウボエ　サルスベリ
フローデ　ササゲの支柱（門貝）
イヌコロ　ネコヤナギ
ユビハメ　つりふね草
ウシノキンタマ　アツモリ草
トットコトー　クサノオオ　茎が中空になっているので、ラッパのように吹いて遊ぶ。（西窪）
オゼンバナ　ヤクビョウバナ、セキリバナと言った。
サルノコシカケは、栗の木のサナレに出るキノコで、サナレは枯れた立木のこと。
シャクナゲ　アズマシャクナゲとハクサンシャクナゲと二種類ある。
アズマシャクナゲは葉うらが赤いが、ハクサンシャクナゲは葉うらが白い。別名をトコワカという。（門貝）

動物名

トンボ　ショウフリトンボ、フジマキトンボ、アカトンボ、メクラトンボ、ハネグロトンボ、ボンサンドンブなどがいる。
フジマキトンボは大きくて尻に黄色いすじがあり、川を上り下りしている。水に尻をつけながら行ったり来たりする。八月中ば過ぎに出る。数が少ないのでフジマキトンボをとるとオテングといって鼻が高かった。
メクラトンボといってもメクラではなく、目が大きくて目ばかりのトンボのこと。
ボンサンドンブというのは盆の頃とぶのでこの名がある。
トンボの幼虫をヤゴという。
チョチョウ　チョウのこと。ツバクロ、オニ、モンシロ、コ、などの種類がいる。
ツバクロやオニチョウチョウは大型で数は少ない。モンシロウは数が多い。
ホタル　イシボタルというのが大きくて明るくちゃかちゃか光る。（西窪）
ションベエゲーロ
ウマゲーロ　ひきがえる（袋倉）
蚊はブーンとはなかない。キーンである。またはビーンである。（大笹）
童詞　チョチ、チョチ、チョチ。ワク、ワク、ワク。タンポ、タンポ、タンポ。アタマ、テン、テン。トトノメ、トトノメ。
エドミロ　小さい子の頭を両手でおさえてあげながらいう。（三原）

人体各部の名称

アクト　ツチフマズ　アシノコウ　ソトクルミ　ウチクルミ　ムコウツネ　タワラッパキ　スネンボウズ　モモベタ　ボンノクド　ノドダンゴ（ノドブエ）　ノドチンボ　ネズミッパ　コゴミッパ（門貝）
足の部分の名称　アクト　かかと。クルミ　くるぶし。タワッパギ　ふくらはぎ。スネンボウー　ひざ。モモッペタ　股。（門貝）
メナシ　あかぎれ
オトゲ　あご　（門貝）

その他

アラケル……馬があばれること。
ソンマオトシバ……死んだ馬を葬るところ。
テーゲー……大体
ゾレ……山のくずれたところ。
ヤックラ……小石の山、畑の中の石を集めたところ。
ヒラ畑（ばたけ）……傾斜した畑のこと。
ヒガキタ……酒が古くなりにごりがでたことをいう。
ヒヤケル……木の実が未熟のままで落ちること。
ブッタシ……不足の場合つけ加えること。

ソラッコト……うそのこと。真実でなくその場で適当に言うこと。
スエル……材木を切る時期により黒い色がつくこと。杉など赤味色のところに黒い色が見えること。
グズル……文句を言うこと。
エベ……歩るけということ。
ヒアミ……田の中に作ったあぜのことで冷水が直接稲にあたらないために設けたあぜ。表現としては「小アゼ」「ナカアゼ」というがこの場合は田と田の区切りをいう。
ヌルミ……堰より冷水がはいると稲に害があり育ちが悪いので温めるために田の端に設けたアゼを作り、アゼとアゼの細長い水路状のところをヌルミという。
マムショケ……鼻結びぞうりのこと。
ゴトク……笠の輪のこと。（袋倉）
ノボーッチ……黒い土で雨が降ると粘土質になる土をいう。
オシガリ……むりに金を借りることで、泥棒と同じことを言う。
チョウベシ……さん俵のこと。
デホーラク……出まかせをいう。根きょのない話のこと。
シャイナシ……つまらないこと。下品なことをいう。（今井）
ワニル……子どもが人みしりすること。
アローズ……夕立ちなどで水がどーーと流れることをいう。
山ヌケ……後の山におされて流されること。ヌケットもいう。（門貝）
ヒラ……傾斜地
タイラ……高い場所に多い。平らな所
オネ……稜線、余り高くない、近ぐのジヤマに使う。
ミネ……浅間山などの高山に使う。
クボ……凹地（今井）
マンカラ・百一……うそつき。
コクル……人の悪口ばかりいう人
ブラ・ドウズリヤロウ……怠けもの。
三ブラ……大笹の三人の怠け者。
シャクイ……ちょいちょいうそをいう人。
ハチリン……足りない人
セッコガイイ……よく働く人。
ノメシ……怠け者　（大笹・田代）
ヤクナシ……仕事がよく出来ない人のこと。「ナシ」に「テボケナシ」は物を大切にしない人のこと。「メクジナシ」思い切りの悪い人のこと。「ロクデナシ」腹黒の人のことなどがあり、主に嫁を評価するときに使われた。（今井）
ドウシン……おもらい、こじき（門貝）
ゴンダク……散らかっている様子をいう。（三原）
チョッカン……真直ぐ（西窪）
キサマ・キデン……最も親しい者同志ではよく使う。
ナーロ……ありナーロ、やりなさいという意味に使う。
コナッチョウ……おまえなんか。
コンタ……こなた。あなた。（二人称）
モウゾウ……すぐ。（干俣）
石ナンゴ……おはじき
シナダマ……お手玉（大笹・田代）
コバソダテ……稚蚕飼育のこと
ゴオロウ……白根山墳火のため石がたくさんあるところ。石がゴロゴロしているところをいう。
ソラッコト……世間話のこと。うそげなことが多い。
タルイ……馬鹿の人。動きがのろい人のこと。
オシバ……土を押し出した場所。
オタネ……麻の実のこと。
オガラ……麻を取ったあとの木のこと。

オバタテ……麻畑のこと。
スジ……もみ種のこと。
スジマキ……苗代に種もみをまくこと。
ネエバ……苗を束ねるわらのこと。
ムシツベ……夏になり米を虫が結び合せたもの。（今井）
ヤシマレル……叱られる
ネサ……そば、隣、「ある人のネサにいた。」
アチャ……それでは（大笹）
ゾザエアゲル……甘えあげる
語尾にムシをつける（門貝）
ゴジモチ……ひし形をした餅で家の祝いのとき投げる。
ホウケル……わらびやぜんまいなどが春先大きくなること。
モッタイネェ……品物をむだにすることを戒めるとき言うことば。（今井）
ベエ・バイ　写真のように二股になっている。さくら・くり・ならなどの木を使う。大豆・小豆を叩いて、はぜらかす。今は機械でやる。（芦生田）

ベ　エ（芦生田）（撮影上野　勇）

信州ことば　大笹・田代は信州ことばで、ひと（他人）のことを、ワレ、行くことを、ユカズ、ユカザー、食うことを、クワズという。年寄りは、お前らというのを、ワンラーという。これは、武田が元で、敵に知られないようにという隠しことばだ。（三原）

八、鳥の声・悪たれなど

鳥の鳴き声

キジバトは「テテッポッポ、豆食いてえ」と鳴く。
フクロは「ホーホロスクホー」と鳴く。
ホトトギスは、一日に百八回鳴くまでは物を食わない。「ホットノドキッタ」と鳴く。ジヒシンチョウともいう。（門貝）
うそ　シーン、ソーンと、人の死ぬような時に鳴く。（三原）
うそが谷で、めすおす、かけあいで鳴くと死ぬ。（芦生田）
きじ鳩の鳴声　テテッポポ　マメクイテ
フクロウの鳴き声　ホーホロスク（門貝）
烏鳴き　うちのものには判らないが、人のあとをついて来て鳴く。烏が鳴くと死ぬ。（芦生田）
夜ガラスが鳴くと、変ったことがおこる。
サワギガラスが鳴くと台風が来る。（門貝）
モズ、ヒバリ、昔は沢山いた。モズは二種類あって、大きいのはキチ、キチ、キチとなき、小さいのは人間ではいえないような声でないた。（田代）

悪口

「鎌原地ごく、小代（コヨ）小宿（コヤド）死んでも行くまい袋倉」といわれていた。浅間の押出しで土地が悪く、不便であるこ

とを意味していた。現在は国鉄駅袋倉も出来て便利になった。近くは国道も通る予定で一番便利なところになるのでこんな歌も忘れられた。

「鎌原ゴウジ、糞ゴウジ」子どもたちの間でよく言われた悪口で、便所の中にいる虫をさしている。鎌原の人たちを、その虫にたとえていた。

「芦生田、田んぼに足がはえて、よそに飛んで行った」芦生田にはたくさん田があるが田に足が出来て他の土地に移ってしまったことという意味である。つまり芦生田には田が多いがその土地の人は田を耕作していないで他の部落から行って所有しているところである。（袋倉）

「袋倉よいとこ来てみりゃ地ごく、朝日あたらず、ぼろを着る」袋倉はよい場所だというけれど来てみれば、地ごくのようなところだ、朝日はあらず、日の出が遅く、よい衣類も着られず毎日、毎日一生懸命働かないと生活して行けないという意味である。嬬恋村の一番大尽（金持）は袋倉にいる。

「人は家の庭に曲った木を植えるが、わしは山に真すぐの木を植える」と袋倉の人は言った。袋倉には山林所有者がいること。

「畑に入るとき、ぞうりを端にぬぎ、夕方はなわで腰につける」袋倉の人のことを言った。夕方暗くなるのでぞうりが見つからなくなる心配のないように腰に下げたことで、袋倉の人が勤勉によく働いたことを表わしている。（今井）

門貝にすぎたるものが三つある。

熊野神社に春がどろ
与吉といえども
とんだ悪いもの

春、与吉は人名。どろはくずという意味。（門貝）

干俣ほっちょくやぶの中　ほってもかいてもやぶだらけ

大笹板敷　大前土方　田代田のない米の中（干俣）

よこ道通れば気づいて通れ、ずない子どもが石投げる。（今井。石津）

芸　能

はじめに

嬬恋村の芸能については、地芸はすでに消滅し小道具すらみることができず、古老から聴取するのみであった。しかし、かつては盛んに行われていたことがうかがえた。いずれも信州からの影響が多い。

獅子舞は現存するものが多く、大前、鎌原、袋倉、大笹等いずれも一匹だちの獅子であるが、各祭りで行われている。系統的にも類似しており、いずれも信州からの移入のものであろう。囃子もにぎやかで神楽獅子といった方が的確であろう。草深い地域のこととて、祭りに村人に心を寄せている心理もあるが、大笹などの獅子に「はな」を住民が、えんりょなく出すところに、「草深い地域」ということ以上に、芸能の伝承されていく現代の方向性があると考えられる。「はな」をもらってその資金で運営していることにより、現実を生きぬいている芸能は、県内にも多々みられる。ある一面からみると「はな」をとるというのはと思われるむきもあるが、これによってその地域の芸能が、消滅しないことは、「芸能伝承」の現代的な新しい生き方か知れない。

嬬恋の獅子舞は、屋台を用いるところ（大前、大笹）などあり、県下にみられない傾向である。ある面祭囃子の一領域をもっているのではないかと思われる。嬬恋村の獅子舞は、舞も雄壮であり、また、笛が実に美しい。神楽からの影響にちがいない。

特に鎌原地区に残る獅子舞は、地区の青年が伝承しており望ましいあり方だと思われる、獅子舞の美しい乱舞も、まわりでみているにはすばらしいが、頭をつけて舞っている者は、汗とほこりにまみれ過こくな重労働である。ここではどこの獅子舞も青年が受けつぐことが、シキタリのようになっている。ややもすると、古老にまかせきりの所もみうけられ、絶滅するのではないかと思われる心配のむきもあった。地域の青年の参加を心から願うものである。

十年程前に、当地域の単独調査のときは、もっと歌い手も多かった。今回は民謡の歌手の少ないのにおどろいた。もっとも対象が女性の方が多く、男の方との触れ合いが少なかったからかも知れない。

木挽唄や馬子唄は採集できたが、嬬恋の民謡らしいものは、今回はとることが出きなかった。

反面わらべ唄は意外に多くあった。六月末に、田代小、東小と二日間にわたり生徒対象にわらべ唄調査し、更に今回成人を対象に調査してみたが、嬬恋地区の五十才以上の方々の子どものときのわらべ唄と、現代っ子のわらべ唄の変せんを比較するうえに、一つの手がかりとなった。

また、田代地区と、東小地区の子どもたちのわらべ唄の比較にもなった。同一のわらべ唄でも全く同じに歌っているようにみえてどこか変っていることがわかる。

① 歌詞の一部がちがう。
② リズム、旋律がちがう。
③ 遊び方がちがう。
④ その他地域独特のうたと遊びがある。
⑤ 子どもたちの性格が地域によってちがう。

楽符は同一の附帯目的をもったわらべ唄の旋律を、スコアーにして、

比較音楽学的にみていくと、更に深く理論づけができると思う。

芸能にしても、民謡などにしても、古いものが価値があると考えがちな観念が、ややもすると私どもの中にあり、民謡や芸能などの現代性などはあまり意識しないで通過することは、おかしなことで、こうした意味から、古老が子どもの頃歌ったわらべ唄と、現代っ子のわらべ唄の両面の調査が今回できたことは、大きな収かくであった。またわらべ唄は、子どもの生活の中で脈々と創造されていることがわかる。

子どもの遊び等も、歌のつかないものが四季を通じて行われている。特にここに出ている遊びは、成人を対象に行ったもので、ごく古い嬬恋の遊びは、成人を対象に行ったもので、ごく古い嬬恋の遊びといっていいだろう。ここにも現代っ子の遊びと比較対象をしてみたかった。ここにあげた遊びは、老人からの調査の遊びである。

嬬恋には、神楽がないのにおどろく。古くは、神楽を行ったということを、お年寄からきいたが、道具や面をみることはできなかったのが、誠に残念であったのと、芸能班で調査員一人で、嬬恋地区を全部回ったのは、時間的にみて、調査内容が浅薄だしその結果、よいものがまとまらなかったような気がする。

調査に協力をしてくださった老人の方々に、すまないと思う気持ちでいっぱいである。（酒井正保）

一、獅子舞

大笹の神楽獅子（一匹獅子）

明治の初年「ジュウレン寺」より、佐藤定次外三人で習って来て広めた。一匹獅子で頭の中に二人はいり、後もち（ほろ）が一人、計三人がかりになる。踊りはゆったりとして優雅な踊りである。

現在は、秋祭り九月に行っているが、古くは旧七月二十七日であった。養蚕やら農家の仕事の忙しさのため、大正のはじめ頃から九月となった。

この獅子舞は、大笹青年団の中に「丸一団」というのがあって、その組が獅子を行った。丸一団は昔から権威があって、青年団の中でも別派の位置をもっていた。例えば、丸一団に入っている者は、祭ののぼりばたをたてるときなども、それを手伝わなくてもよかった。そのときは、獅子頭のみがきや、「へいそく」切りの仕事をした。

獅子の練習　蚕屋を借りたり、空屋などで行った。借用する家は決っておらず、毎年ちがった家であった、その練習する所を「道場」と呼んだ。

練習がはじまることを「道場はじめ」。

練習途中を「中いり」。

練習が終ると「道場ばらい」「道場じまい」と言う。

昔は祭の一四日前から練習に入った、現在は、十五日前から行なわれる。

練習はきびしく、毎夜夜中まで練習した、ほとんど先ばいが教えてくれた。新しくその年に入団した者は、道場はじめに酒わかし、清掃などで、先ばいたちが駄菓子などたべていても、指をくわえてみている程度であった。

丸一団に入団するのは、小学校卒業すると入れた。これを「新入り」と呼んだ。夜の練習ばかりか、山に「かりぼし」に行って、昼休みに、空になっためんばをたたいて、太鼓がわりにして、練習した。めんばを一日でたたきこわす者がいた。舞の者は手ぬぐいで、獅子のあやつり方を練習した。山の中で輪になって草の上で練習するのであるから、足場も悪く大変であった。よく覚えた者には、丸一団から表彰のいみで「しろじのゆかた」をくれた。

楽　器

笛　（七穴）　一本

つけ太鼓　一つ

大胴　一つ

笛を芯にして、大胴が右、締太鼓が左に位置した、笛は神楽笛を奏して実に美しい音。

道中を屋台でひくときは、屋台の後へ大胴と締太鼓をつけ一人で二つを打つ。しかし舞のときは、大・小一人づつで奏する。

屋台　獅子舞に屋台はごくめずらしい、祭囃子に似てもいる。屋台といっても、かつての消防ポンプの荷車に屋台をつんだものである、大笹地区の生活感からにじみ出たものだ。屋台には、しめなわをめぐらし、ちょうちんをつるして屋台を仕上げる。

祭には、小学生が長さ二間程のつなをつけて引く。宵祭りには、れんがく燈籠を子どもがもって練り歩く。竹の棒九尺程のものの先に、れんがく燈籠はつける。これを三十こ程用意した。

屋台を神社から引き出し、道中をはやしながら練り歩く、屋台ぼんこ（かさぼこ）が先頭になる、その後にれんがく燈籠が並び続いて屋台となる。

古くは、高等小学生の中にボスがいて、屋台引き、燈籠もちなどの人選をした、おとなは、こうした人選などに口出しは絶対できなかった。

屋台ひきは十人程だった、特にうでの強い者は、かじ棒を二人で受持った。すべて屋台に関することは、男子が行い、女子はたずさわれなかった。

道中では、道中囃子を行う。道中の並び方は、笛、屋台、太鼓となる。

舞手は「屋台ぼこ」のすぐ後で舞う。笛はつかれるので交たいで吹いた。

大正時代までは、神社のご神馬といって、三頭程の馬に、くらをつけ仕度をして廻り歩いた。神官が諏訪大明神のご神体を奉持して区長が先頭で、次にご神体が歩く。ご神体はごへいと鏡。神官は大きなごへいを奉持して歩く。昔は区長の変りに、丸一団の団長がすべてこの獅子舞の采配ふりをした。現在は青年が少ないので区長に実権が移ったという。

獅子は夕方暗くなる頃出て夜中まで行った、現在は、夕方から午後十一時頃で終る。

曲目

① 道中囃子
② しやんぎり
　㋑ まくのうち
　㋺ ごへいそく
　㋩ うた
③ 道中
④ しやんぎり
⑤ 神社演奏（フィナーレ）

獅子舞唄

ヤレナ皆三尺のおのさを持って
悪まはろうめでたいな。
おばあさんも喜ばしやんせ
おじいさんが、はらんだとさ。
べっちよべっちよ米かめ
わしや正直歯がないよ。
牛牛そっちを通れ、こっちは井戸の
はうだよな。
あのがきやへんながきだ
おれみて笑ったよな。
やれなこれで獅子舞唄
お村もはんじよう、ヤレセソラ
いまひとつおまけに、ゆうことが
ゆうべも三ばんぐつすりと。
まくらをなげて　木曾の谷川へ
もみじを散らす　ソーレバドンドコ

最後の唄が歌い終ると、獅子が鈴とごへいをなげて怒り出す。大笹の古老のいうには、歌が下品で大笹の獅子は話しにならん、といっている。しかし、かつて貧しければ貧しい程、心からの笑いを人間が求めていた一現象であろう。

獅子唄のみでなく、村中をはやし歩くなかで、子どもの囃子ことばが、ベッチョ、ベッチョ、ヤッテ、ヤッテといいながら練り歩く、更に青年が迫車をかけるように、がなれ、がなれとはやしたてる。

獅子舞唄や、はやしことばの内容が下品であっても、施法は獅子舞歌流れをもって美しい。また大笹獅子の舞の美しさは他にない。

勇壮な舞から、空中に上昇するかのようなふりもある。前述したように、笛の施法は他の獅子舞になく、優美であり、各太鼓のリズムにぴたり合い、みごとである。

草深い山に伝承されて来ただけに、世間に知られず行なわれて来た獅子舞だが、他にみられないすばらしいものである。

この獅子舞の目的は、悪魔はらいと、村内安全、家内安全、五穀豊穣などである。

道中順路　現在は神社から出て村の上まで行き、一廻り舞う。青年会や若妻会、婦人会などで踊りをかねてやり、それが終ると金井氏宅の庭で行う、交通がはげしいのでこのようなことになる。次に折田町に入って公民館前、角のところ、うら町の真中、下南木から神社が最後になる。

途中多くの「はな」があがる。その金額を、「東西、東西○○氏宅より一金幾百円也」と口上する。終ると「しやんぎり」をお礼の意味で奏する。

このように「はな」のともなう獅子舞が、県下では消滅しないで残っている例が多い。

信仰から離れた現在の芸能が、このようなことが経済（金銭）のうら付けとなっていくことは、考えられないではない。

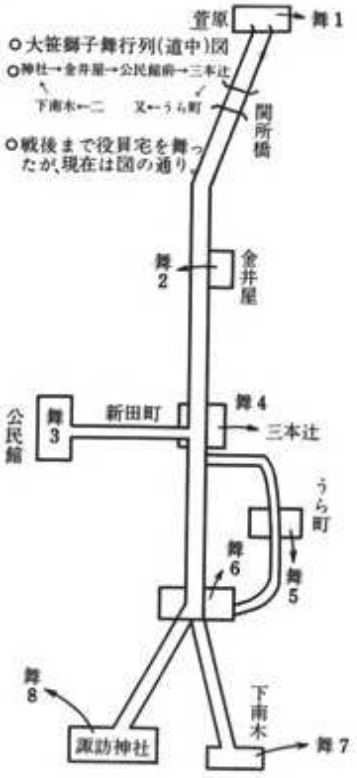
大笹の獅子舞も、後継者の青年が少なく、壮年層と古老の手で受けつがれているのが現状である。

獅子舞は、大笹のほかに、大前と袋倉、鎌原にある。大前は大正年間に長野県より師匠を呼んではじまったもので、一匹だけの獅子である。現在も伝承されている。

袋倉の獅子舞も一匹だけである。獅子頭は数年前まで「み」でつくり毎年作っては舞った。古くは、獅子頭があったときくが、火災で焼失してから、「み」を用いて村人が作って舞ったようである。

昭和四十五年より、新しい獅子頭を買い求め現在は、この獅子頭を用いて行っている。

鎌原の獅子は、青年団の手で固く伝承されている。古い獅子を現代青年の感覚にアレンジして行っているが、実に鎌原地域にあったあみ出し方をしていて優雅である。古来伝承されている獅子を、現代そのまゝ受けつぐ処に沈降現象が生ずる。現代青年の感覚に合ったようなあみ出し方をして（地域の匂いを出して）行っておれば、鎌原の獅子のように若い世代に伝承されて生きていくのであろう。



二、地芝居

1　三原の地芝居

三原の地芝居は、土地の人が幾人かで組んで行った。明治の中頃も盛んだった、役者もよい役者が多かった。特に八幡大郎が得意であった。唐沢久メ五郎が特に上手だった、次いで安斉初太郎、黒岩吉平、唐沢貫次などであり、出し物は、義経千本桜、一の谷、太閤記、寺小屋、忠臣蔵などであった。

舞台は、黒岩さんの家の近くで、傾斜の畑にかけ小屋で行った、間口が十五間もある大小屋だった。楽屋は後にした、まわりには蚕の籠をしばりつけた。木戸銭は大人が五銭、子供が二銭だった、村の人には呼び状を出して「花」をもらうのが多かった。

当時は警察がうるさく、免許を持たなければ、芝居はできなかった、十人のうち三・四人程しかもっていなかった。特に他村へ依頼をうけて出るときは、うるさかった。

このような状態では、他の座の者と組まねば一座にならず、三原の地芝居連中は、大津に小林吉蔵一座があり、この座と組んで渋川、長野原、などに出ていった。三原の地芝居は上手で評判だった。

三原の地芝居が起きた由来は、下田光治氏で、彼は義太夫が得意であった、この義太夫と三味線は、篠田千吉宅に秘蔵の三味線があり、それを下田氏に伝授したのが基であった、下田氏は、義太夫もさることながら、芝居の基礎がよくできていて、三原の芝居の指導者で、三原の芝居を広めた人でもある、後に芝居を習った場所は、篠田さん宅で主に習った。

篠田さんのひいおぢいさんの頃、赤羽根に芝居の舞台が残っていた、かつて盛んに行われていたとのことだ、この舞台は明治の中頃まで、ぼろ小屋となって残っていた。

あと一つの舞台は、中井にもあった。明治のはじめ頃まであった。芝居をやらないときは、その中で村の人が、バクチをやった。

三原の地芝居がいかに盛んであったかがうかがえる。この頃つかった小道具は、ごく最近まであったが、現在は何にも残っていない、明治の中ば過ぎ頃、村の有志が黒岩万太郎さん宅で芝居を行っていたら、警察が来たので、村の役者は全員にげたこともあった。黒岩万太郎氏は、芝居がすきで一人で芝居をかってきて自分の家でした、養蚕の上簇どきでもあり、村の人はだれて見に来なかった。蚕の手伝いの者が見に行っていたとのことだ。

地芝居をやらなくなると、青年の有志が長野県より芝居をかってきて、区長に相談して行った。

長野県北佐久郡野沢から、二日間かいきりで二十円でかってきて行った。

昔から芝居に対する観念が強かったのであろう、この三原地区では、買い芝居が大正年間までつづいた。

2　袋倉の地芝居

昔から上袋倉の大神宮さんの森で芝居をやった。舞台掛けは村中の者が出て作った。この場所は芝が生えていて、芝居の観客場には誠に都合のいい場所だった。袋倉の人が集って芝居をした。明治の初年頃は、丸山富太郎さんが弁慶になってやった。明治の中ば頃、三原の斉太郎おじいが、楽屋に入りそこに置いてあって鉄砲で、太夫のあごを打ってしまった、芝居では忠臣蔵のしを打つ場面で合図に使う予定で置いたものだった、斉太郎おじいは鉄砲がすきな人であった、この事件があってから、村芝居はやらなくなってしまった。それ以後は、柿の木の場所に小屋を建てて行った、買い芝居だった。

小屋を作るにも、学校の床板をはがしてきて舞台につかった。芝居が終ると又板をはぎ、もって行ってくぎで打ちつけておいた。

義太夫の装束（鎌原）
（撮影阪本英一）

買い芝居でも「花」はとらなかった、他の村から来る者が「花」を紙に二・三円づつ、つつんで木戸に出した。

義太夫は、明治末頃は、正月三が日がすむと十五日くらい練習した。師匠には五円くらい払った。練習の場所は大きい家を借りて行なった。草津の小林さんを一年、大笹の土屋ホウ太夫は、めくらで三味線と弾き語りをした。長野原の大津処太夫も頼んでやった。

3　干俣の地芝居

諏訪神社の境内、正面の鳥居の左側の松の所に舞台があった。ここで一月ごろ練習して地芝居をした。そのごこの舞台が焼けたので、神社の後方の道上に舞台をうつした。現在はその場所は畑になっている。「舞台屋敷」と呼んでいる。

芝居は見る席は、「干川の座敷」というのが決っていて、神社に向って左に作ってあった。義太夫もたのんできて練習もした。衣裳は借りて来て使った。（干俣）

地芝居については、田代でのたとえ話に、

「かかあの名前と一口浄瑠璃は知らない者はない。」

といわれるくらい各地で盛んであった。（田代）

民　謡

伊　勢　参　唄

田代には、伊勢参り講ができていた。伊勢参りに立つのは、春気候がよくなってから出発した。村でたった一人だけ行けた。大勢希望者があったが、クジびきで他の者は行けなかった。後に二人行けたり、三人行けたりした。男だけが行った。

お伊勢参りにたつときは、「アマス」（新しいもの）を着て行った。

当時はお伊勢参りは、村でも一大行事であった。

① 出発する晩。
② 行きしなに。
③ お宮参り。
④ 帰りの船のり。
⑤ 帰った晩。

以上五回祝った。これを「五つくら」といった。盛大に祝ったのは、帰ったときのことであった、神社の庭に小屋を作り、小屋の中にはお金をあげた。

伊勢参りに行って帰った者には、神がついてくるので、この小屋に神様を入れ、小屋をもやして、そのけむりで神を返すのだといった。これを「神ばなれ」行事といった。神ばなれが済むと、小屋の中に入れておいたお金を子どもは夢中になってさがした。この金をみつけると運がいいといった。小屋をもやした火と灰を棒でかきまわして、われ先にとさがした。

その晩は、近所親せきの者を集めて大祝宴となった。

このとき歌った唄に

伊勢参唄（その一）

ランプさん
私しゃあなたに
ホヤ、ホヤほれた
なにしてほれた
芯のあるのをみて
ほれた
傘のあるのは知らなくて
金につられて　おるわいな
ナイタネ、ナイタ、ナイタ

伊勢参唄（その二）

お伊勢参りのその日の生れ
なにとつけましょ
伊勢松と。　（田代）

男だけでなく、女も伊勢参りに行った、女は抜け参りだった。十人程で組んで行った。女が抜け参りに出ると、親せきや近所のものが荷物や金をもって、後を追って女にとどけた。一度十人程で行った女たちの一人が途中で死亡した。そのために全員伊勢参りからひき返した。

伊勢参りに行った者の家に、村人が集まり途中の無事を祈るために、おひまちを行った、子どもには、かゆをにて出しふるまった。

木　挽　歌

田代の黒岩スグさんの家で、木挽を信州からやとって、木を挽かせていた。すが平の向うの「仁礼」の木挽だった。四人程だった。

このほか南木山に、松の大林がありそれを挽きに、越後、信州、秩父から木挽がたくさんきて働いていた。林場がありその小屋に二十人から三十人も木挽が住んでいた。

松ばかりか、落葉松、もみ、栗が主であった。

十二尺の板を一日二十枚程ひいた。一枚ひくと、二銭か三銭で松の場合、松のヤニがのこについてひきにくくなり、石油をつけてひいた。板は林場で少しほして、牛や馬で出し長野県に持って行った。

また袋倉では、うさぎ山に大小屋をかけて木挽が働いていた、ここの木挽は県外のものでなく、大笹の木挽き職人が来ていた。

小屋の屋根は、かやぶきで冬は上に土をもり、入口だけ開けておく。小屋の中には、ほだを背負い込んでおき、火をもした。まわりはほとんど土にかくれている程、小屋を深めに作っておき、寒さをふせいだ。

原木も寒さがしみてしまうので、はば七尺、はば九尺程の穴を掘り、下に火を少したき（おがくずなどもやす）しみを防いだ。木がしみると、ノコを受けつけなかった。

寒中でも小屋には、二人程の火の番がいた。木は松ともみが主であった。食事は自分でにてたべていた。たまに塩びきのさけをくう程度で、なっぱ、たくわんなどがおかずだった。しかしめしは一人で一升はくった。

ひいた板は牛につけて、袋倉に出した。牛に三十六枚程つけた。

木　挽　唄（その一）

一、元じめだいこく
おかみさんは　えべす（えびす）
えりくるさんよぐち
ホラ福の神よ
アーずるこん　ずるこん

二、ハア元じめ金かせ
しんかいりようが
やいたよ
それでかさなけりゃ
げんさいさんの
はりだよ

アーずるこん　ずるこん　（田代）

木　挽　唄（その二）

木挽きや　さんかの
山にも住めどよ
ハアーずいこんずいこん
木の実　かやの根
食べは　せぬよ
アーずりこん　ずりこん。（田代）

端　唄

私もこれから
子もりやめて
だんなさんのそばで
針仕事。（田代）

一、はだかでバラも
背負いましょう
お水もくみましょ
手なべもさげましょ。

二、こなばこ　やっこらさっと
歩かじやあるまい
伊勢やと書ていある。（田代）

ハアー
奥山でひとり米つく
あの水ぐるま
だれを待つやら

くるくると
キタサッタラ　ヨイサッサー
ここでもちつちやい
ちいさがた
それでも主さん
長野県。（大笹）

追　分　け　節

嬬恋各地は、かつて馬方で生計をたてていた者が、非常に多かった。田代、鎌原、西窪地区など特に多かった。行く先はほとんど信州だった。一頭の馬に、すみ四俵（一俵七貫）をつけて行き、帰りは信州から米六升五合かってくる。一頭引きの馬子もいるが、二頭から三頭の馬を一人でひく者もいた。田代の宮崎弁重さんは、三頭の馬をひいて、馬子仲間からあがめられた。一日に一頭の馬が五十銭働いた。

二頭以上馬をひく場合は、二頭目と三頭目の馬の首に鈴をつけた。道中馬が逃げても鈴の音でそれを知るためだった。鈴は大きいものであった。

鳥居峠の難所では、つみにで馬の背が痛むので、くらの下に「しと」のよいものを入れて、背の痛みを防いだ。

炭は門貝でかいそれを信州の大日向か、渋沢、真田にもっていった。炭ばかりか、木挽のひいた板もはこんだ。

冬になると日が短いので、朝五時頃に田代をたっても、帰りは真暗だった。寒いネコズキンをかぶり、赤げつとうをかけて行った。寒いときは、馬も馬方も大変なので、ほとんど馬子唄は歌わなかった。

また、西窪ではほとんどの馬子が、大日向に行った。荷は炭と板、よしであった。よしは干しあげ七十センチ程の束にして、四わつけた。馬のくつが切れると、馬子はくつきりがまを腰にさしておき、ひもをきっては新しい馬ぐつととりかえた。

馬のくつは、女は作らなかった。男の老人か馬方が作った。馬の荷の外に馬方のわらじ、馬のくつ、うまのえさ入れ「しぐつ」をつけた。荷以外のこうした荷物がつくので雪の日などは大変であった。

馬の荷を信州について降すとき、馬のえさをやった。「しぐつ」を馬の首につるしてやった。荷を降す以外にえさをくれていると、帰宅がおくれるからなのだ。

馬子の仕度は、冬はももひき、わらじをはき（かけわらじ）はらがけにはんてんを着る。夏はしるしばんてんと、はらがけで軽装であり馬子唄は、春から秋まで道中でうたった。

馬子唄

ハア浅間根ごしの
焼野の小砂利
ホラ　ハイ
あやめさけとは
しおらしい
ホラ、ハイ　ホラと。　（西窪）

小諸出てみる
浅間の山によ
今朝もけむりが
三すじたつ
ホイ、ホイ　（田代）

四、わらべ唄（老人からの採集）

十日夜

十日夜はよいもんだ
朝そばきりにひるだんご
夕めしくっちやあ
腹だいこ。　（各地）

薬鉄砲の芯には、みようがを入れ自分の家のまわりを打って歩いた。特別料理として、もちをついた。「たちうす」の中にそのもちを入れ、かかしをたてて祝った。

ようごの唄

藤の花の咲く頃、川でようごが飛び上ったりした。特に夕方が盛ん、木の枝をもってそのようごを打ち落す、たくさんとりたくて夢中になってとり合った。このとき歌う唄。

ようごもこうよ
かんなもこうよ
かんな川原に
水のみこうよ。

昔はたくさん吾妻川にいたが今は少ない。

まりつき唄（かがりまりつき）

嫁恋のまりつくりは、県内でもめずらしい、芯に「ヤマカマス」の中にあずきを一つぶ入れ、そのまわりに干したぜんまいの綿を巻く。更にそれを布にくるみ、駄菓子屋からかった「かがり糸」で、あさの葉や、おもだか、ききようなどのもようをかがる。五色の糸でかがるので実に美しい。

かがったまりに、三十センチ程の長さの細いひもをつける、ひももくさりあみにした。その先端を持ってつく、まりをつきそこねても、ひもがついているので、逃げられなくてすんだという。

また「ヤマカカス」の中のあづきの音が、かがりまりをつくたびに、からからと鳴って、しかもそれがかん高い音なので、つくのにリズムが合って、つきよかったという。

ふんどやぶんどや

一ちよめとぶんどや
二ちよめとぶんどや
三ちよめとぶんどや
四ちよめとぶんどや
五ちよめとぶんどや
六ちよめとぶんどや
七ちよめとぶんどや
八ちよめとぶんどや
九ちよめとぶんどや
十ちよめとぶんどや
すうすりすうすり
一ちよめとすすり
（十ちよめまで歌う）
まわしまわし
一ちよめとまわし
（十ちようめまで歌う）　（各地）

このまりのつくり方と、この唄は嬬恋各地で行われていたようであり、各部落で採集できた。

まりもあまりはずまないので、座ってついた。

まりつき唄（座りまりつき）

ごむまりがはやりはじめたのは、明治の終り頃であった。ごむまりは、貧しい家の子は持てなかった。ぜんまいの綿で作ったのが多かった。

お正月は　おめでたい
竹や松で門まつり
かざりの下から出た鳥は
羽根が十六、目が三つ
目が三つであったとさ

石やごろの真中で
だれとだれで石なげた
男の子ども石なげた
男の子どもにくいな
女の子どもかわいな
それからなまずに橋かけて
なまずのおじょろにとめられて
せきだせきだで歩んでやる
せきだせきだでいやなれば
右のお足でふんでやる
右のお足がいやなれば
左のお足でふんでやる
これで一貫かしました。（今井）

お手玉うた

お手玉のことを、あや玉といった。袋の中には、あずきを入れた。あずきは大事なものだったので、家の者の目をかすめて入れた。大豆を入れたり、とうもろこしを入れたりした者もいたが、音が悪いので友だちは借りてしなかった。やはりあずきがいい音がした。あや玉を五つもってする者が最高に上手だった。あずきの変りに、さんしょうの実を入れたが、あやの袋が、さんしょうの実の油できたなくなってしまい、油っぽくてうまくできなかった。「きみ」を入れても音が悪くてだめであった。

ひいふのしこさん
何で金ためた
ひいふでためた
一丈、二丈
三丈さくら
四丈ようなぎ

五丈ごうぼう　（今井）

一丈とか丈のつく唄のところで、高くお手玉を空中にあげた。五丈までできると相手に一貫かしたことになる。

とんびの唄

秋から冬にかけて、とんびは群をなして来た。一年中いたとんびがあった。とんだが廻っているときは、へびをみつけているんだなどともいった。

とんびとろろ
赤い羽根落せ。（今井）

からすの唄

今井では葬式のとき墓場のだんごをからすがくうのはよいといっていた。墓場のだんごをからすがくうと、死んだ人のごせえがよいからだといっていた。

からすからす
あれあとみれば
鉄砲ぶちが
ねらう、ねらう　（今井）

子守り唄

子守りは楽のようでつらいもの。
雨風吹いても宿はない。
人の軒端で日を暮らす。
でんでん大鼓に笙の笛。
たたいてみようかドンドンと。
吹いてみせようかピョピョと。　（大笹）

五　子どもの遊び

1　女の子の遊び

まりつき　ぜんまいの綿をほしたのを芯に入れて、色々な糸でかがって作ったマリを使った。ゴムは貴重品でふつうの家の女の子の手には入らなかった。（今井）

まり　昔はゴムマリがなかったので、自分で作った。虫のすで、まゆのようなシキミの中に、石か豆を入れるといい音がした。外を色糸でかがった。（三原）

シナダマツキ　お手玉のこと、五箇くらいの玉を使って、歌をうたいながらやった。（鎌原）

アヤ　お手玉。中にアズキを入れる。（今井）

アジトリ　アヤトリのこと。（今井）

オンバコ　ままごと遊び。（今井）

おヒトツ　小さい石を五箇そろえておいて遊ぶ。最初はオヒトツで、ひとつ投げ上げておいてその間に下においた小石をひとつ拾う。オフタッでふたつづつ並べておいてひとつを上げてふたつ拾い、オミッツのときは三個と一個に並べておく。ひとつ上げてその間に三つをとる。オヨンツのときは、全部をまとめておき、ひとつ上げて残りの四個全部をとる。最後はオステンパラリンといって五個全部をみんな投げて、落ちてくるところを一度に全部つかまなければいけない。一つでも落ちれば最初からやりなおしをした。（鎌原）

小石を五つ使い、小石を一つほうりあげている間に、一つ拾い、次に又一つほうりあげて二つ拾い、次には三つ拾い、四つ拾う。最後まででできるとあがりになる。（今井）

植物を使う遊び

萱の豆　トンビ、トトロ、マイマッテミセロ、と萱の豆を割ってとびあがらせる。（門貝）

チンコログサ（オキナグサ）　花びらの落ちたあとの毛をなめると筆のようになる。またそれを両手でこすると、二つに分れてビンタボのようになる。

ヨメサン、ヨメサン、ビンタボおとり

といって遊ぶ。（門貝）

蕗のとうの童唄　ホーキノホージ　ジャホージ　ハヤークデロ　ミズクレル（田代）

あけび　あけびの花を、掌の上にのせて、じじばば寝てれ、嫁は起きて機織れ、婿は起きて市へいけ（臼ひけ）という（芦生田）

ジジイババア　ネテロ

アニハオキテ市ヘイケ

ヨメハオキテ火ヲモセ（田代）

アケビの花を手のひらにのせて、ジジババ寝てろ　嫁は起きて火燃せ兄は市いげ　オトッサンは起きて薪割れ　といって指でつついて言うことをきかせる。（門貝）

猫足のお膳　子供たちは、オゼンバナの花びら四枚を組み合せて、猫足のお膳を作って、ままごとをした。（門貝）

トケッチョの葉で嫁をつくる。

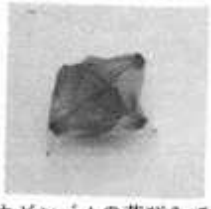
トノゴサン　柿の花でつくる。（門貝）

ぐっつき　栃の実を、数個地面にまいて、ビー玉あそびのようにする。（三原）

トチマンブク　栃の実を磨って、中の身をほり出して、水に溶かす。麦わらにつけて吹くと、しゃぼん玉のようなものができる。松やにを入れると、赤や紫や青の色が出る。（三原）

くるみ笛　くるみのからを磨って、中の身を出し、笛にする。（三原）

オゼンバナ（門貝）
―ツリフネソウ―
（撮影中村和三郎）



オゼンバナの花びらで作った猫足のお膳（門貝）（撮影中村和三郎）

2、男の子の遊び

たこあげ　大正十年頃は、五月の節供に大前、西窪、三原の子供たちがたこあげ場に集まって競争したものだ。たこは作るものも買うものもいた。文字だこと絵だこがあって、竜の文字や清正の絵などあった。骨は竹で紙は美濃紙を使った。十畳、二十畳の大きなたこは「水をくむから気をつけろ」といった。糸を引くのがむづかしかった。たこにはメダコとオダコとある。たこあげの歌は、

たこたこあがれ　天まであがれ

風よくうけて　空まであがれ

五月節供にたこは美濃紙二枚くらいの大きさで、しっぽは六尺から一丈の長さのを三本、十～二十丈の糸で、「タコタコあがれ、天まであがれ、風よくうけて空まであがれ」とうたいながら高くあげた。

西窪には竹がないので、売りに来たものを買うことが多かった。（西窪）

コマまわし　コマは自分たちでつくる。細長いようなコマをつくり、なわをかけて投げるようにしてまわす。時間の長い方がよい。コマは松の木でつくる。（鎌原）

クギウチ（念木）　長いのは二尺、短いのもあって相手のものを倒す。畑でする。（田代）

弓　マユミの木で弓をつくり、カアツォ（麻）でつるをつくる。ヨシかカヤで矢をつくり、カヤのミゴへカヤの根元のほうの太いところを一すくらいさしこんで、重みをつけたり（矢じりにする）した。（鎌原）

バッチン（メンコ）　ブッケともいう。

ケンツ　板の上に筋をつけておき、バッチンをはっておいて、その中から出す争いのこと。

オコシッコ　相手のを裏返しにしてしまえばとれる。ハンテンを使ってその風で出すとうまくゆく。ハンテンナシというのもある。

ブッツン　人のものの下に自分のバッチンの端を入れておいて、爪ではじいて相手のものをかえすととれる。

戸ブッケ　バッチンをもって戸板にぶつけて、相手のものよりも遠くへとぶと相手のものをとれる。とばないときはそのままにしておいて次の人がやる。（鎌原）

ヒッツミックラ　二人以上で組になり、手を重ねながら、手の甲を、イチバン、ニバン、サンバンとつねって重ね、九番がクマンバチで強く、十番はダンゴバチといってもっとも強くつねるので泣きたいぐらい痛かった。（鎌原）

キリッコ（チャンバラ）　篠竹や細い棒きれでやる。子守りをしていながらやって、本気でたたいてしまって泣いて帰られて困ることもおきた。（鎌原）

アシコンコン　地面に○をかいておき、シンゴ（片足とび）をかき、上げた足は片手でつかんでいて体を相手にぶつけて○の中から突き出すと勝つ遊び。勝ち抜きでやり、何人抜きをやった。（鎌原）

手ばたき　二人で向き合って組になり、手を上下に重ねておいて、順番に手を重ねながらたたいてゆく。（鎌原）

ベースボール　明治四十二、三年ころ学校の庭でやった。それ以後しばらくやらなかった。

野球というようになるのはつい最近のことになる。（鎌原）

陣とり　陣地に棒を立てておき、二組に分れて相手の棒をとってくれば勝ち。（鎌原）

3、野や山の遊び

螢狩り　白はぎでつくったほうきを持って上河原の田んぼでとった。とった螢はムギワラで作った螢カゴに入れたり、ネギの葉に入れた。ネギに入れると中で光るのがきれいにみえる。

ほ、ほ、ほたる来い　こちらの水は甘いぞ。あちらの水はからいぞ。ほ、ほ、ほたるこい。

と唄いながらおいかける。

晴れた日のほうがよく出る。（西窪）

螢とり　螢は七月中旬が盛りで、西窪では、上川原、中川原、前川原が螢かり場だとされ、よくとりに行った。五十年くらい前までは、子供たちは麦わらで螢かごを編んだものだ。ネギの袋に入れる子供もいた。庭や台所をはくハギのほうきや竹ぼうきを持って螢をつかまえた。イシボータルは大きかった。いまは螢も少なくなった。螢とりの歌は、

ほーほー　ほーたるこい
こちらの水は　あーまいぞ
あちらの水は　かーらいぞ
ほーほー　ほーたるこい（西窪）

チョウチョウ　蚕の糸あみを持ち出してとった。いけないといわれているのを持ち出すのだからみつかると叱られたりした。（鎌原）

トンボツリ　ムギコとフスマをいっしょにねってモチをつくり、篠竹の先につけて、トンボツリをした。トンボには、ショウフリドンボ、フジマキ、赤トンド、羽根グロドンボ、メクラドンボ、ボンサンドンボなどがいる。フジマキは数が少ない。（西窪）

麦のふすまを口の中に入れてかんでいると、ふすまの中にあるものがもちになる。これで、とんぼをつる。沢のところで待ちぶせしていると、

かならず帰ってくる。とんぼには、フジマキ・ショーフリ・オニトンボ・ボントンボ・クルマトンボ・メクラトンボなどがいる。（三原）

トンボは、小麦を口の中でかんでモチをつくってとった。しっぽを切って草花でもさしてとばせたりした。（鎌原）

トンボツリのときは、六尺棒の先にモチをつけてとる。

モチは小麦のフスマをもんでつくる。（西窪）

魚とり　川ぼしをやることもあった。やまめよりほかの魚はいない。手でつかめるくらいで、釣りなどはなかった。（鎌原）

蜂の巣とり　どじょうを細かく切って、綿をつけてくわえさせて追っかける。あまり遠走りしない。硫黄のくだいたのを、カンカンに入れて、火をつけると、硫黄っけで目を廻す。ママにある蜂の穴に、花火に火をつけて、つっこむ。煙で目を廻すようになったところを掘る。おすと、ちくりとやられるので、すっ裸になって取る。刺されたら、歯くそをつけたり、小便をつける。また刺した蜂の蜜を嘗めればいい。蜂が追ってくると、口笛をヒューヒューと吹く。（三原）

雪の中のあそび　冬は雪も多かったし、寒かった。親たちは、冬は一月いっぱい寝食いだったが、昔の子どもたちは、雪ダルマや、雪トンネルをつくって遊んだ。二月いっぱいは裏通りでスキーができた。（大前）

うさぎ追い　初雪が降るとみんな出てやる。大人がやるもので、子どもたちはワナをかけた。うさぎの通る道はきまっているのでそこにわなをかけておき、追いまわすと必らず帰ってくるのでうまくかかった。わなの場所は秘密で、他人には話さなかった。（鎌原）

4、その他の遊び

ゾウリとり　ぞうりを片方ずつ出して並べておき、「ドウリキンジョ　オタマガショクショク　オタマガショクショク　ワガモガセイキニ　ズイヨシノケイロ　トセイヨ　ジロサンタロサンキメトクレ」といいながら指さしてゆき、とまったところでひとつとるので、しまいまで残ったのがよかった。（鎌原）

諏訪神社の石段に作った子どものわな　（今井）
（撮影阿部　孝）

ウシッピキ　双六と同じような遊びで、上ガリが牛になっていた。（今井）

百人一首　本式に読み札を読んでやった。明治四十五年に一組十五銭だった。（鎌原）

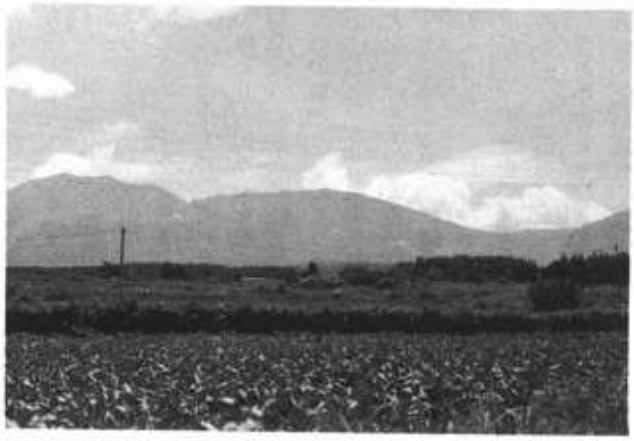
坊主めくり　百人一首もやれないときになった。坊主が出てくるとうたをうたったり、一回休みになったりした。また隣りの者へそっくり渡してやることもあった。最後にいっぱい持っている者が負けた。（鎌原）

トランプ　トランプは大正時代に明治屋さんで見たのが西窪では一番早い。（西窪）

かけごと　四月十九日の馬頭様の日などによくあったもので、六点やテンプというのがあった。六点というのは、紙に六つの絵があり、そこえ各々若干はると、ドウヤがくじを引き、当った絵にはった人はその六倍もらえた。トッコのようなもの。

テンプというのは、クジの札に穴あき銭が一つ着いていて、これをひきあてる方法、ウンプテンプというのもこれから出たという。（大笹）

コックリサン　明治四十年ころ流行した。夜学をして、勉強がすむと毎晩のようにやった。イヌ年の者がいればだめだといい、用意ができると「三州三河国の豊川稲荷大明神、用事があるからすぐ来て下さい」などというようなことを唱えてからやる。誰さんは誰々さんが好きかなど他愛のないことを聞いたりしたものだった。（鎌原）



木挽の働いた南木山

鎌原噴火和讃

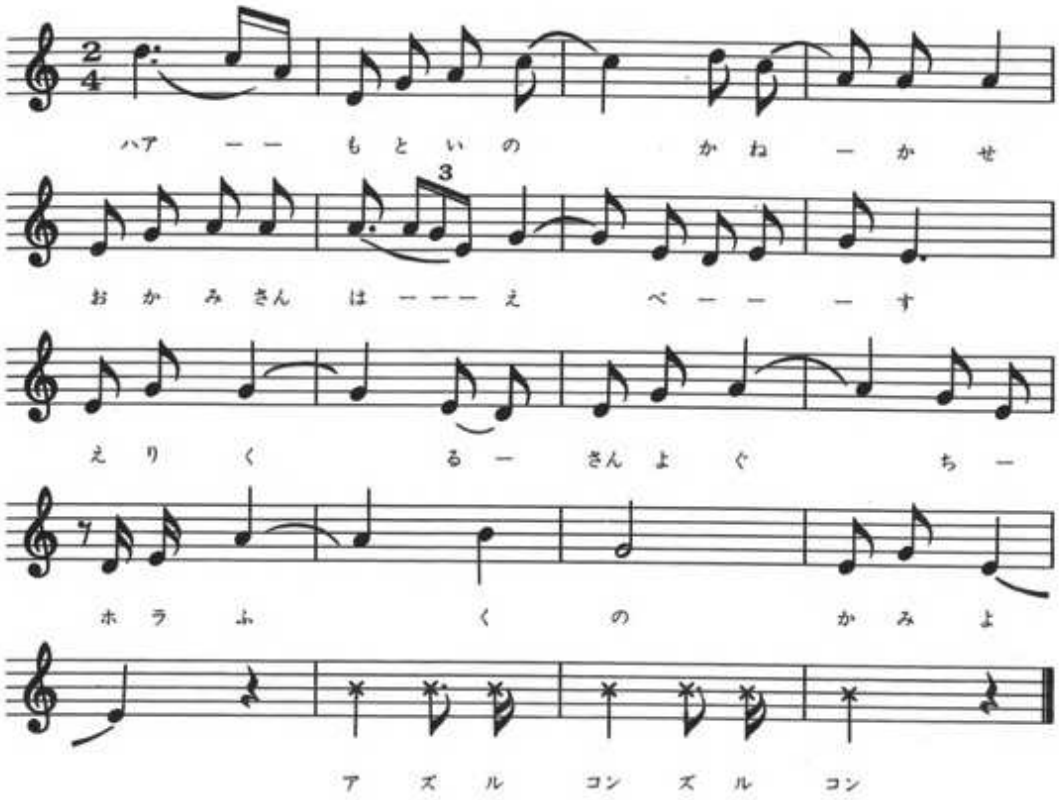
馬方の通った鳥居峠旧街道

袋倉の獅子頭

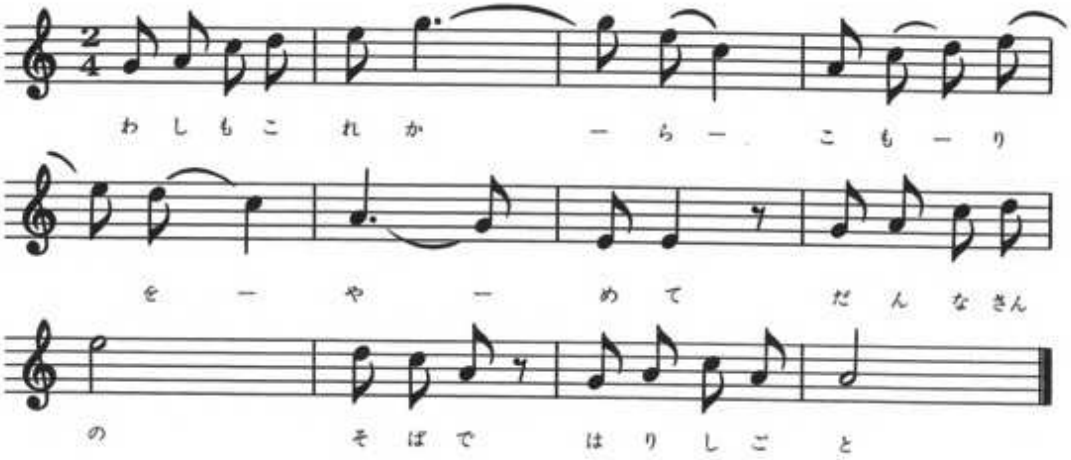
大笹丸一団の手ぬぐい

鎌原の獅子舞　　（以上の何れも撮影酒井正保）

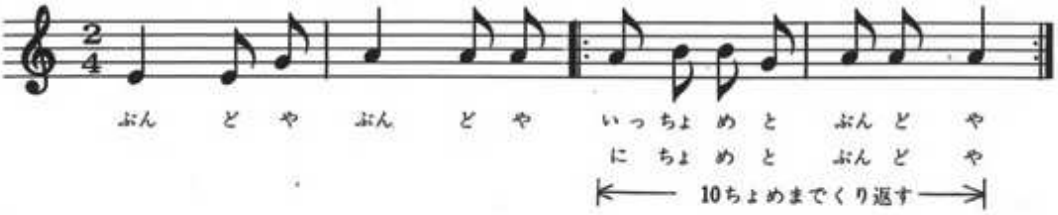
木　挽　唄　（田代）

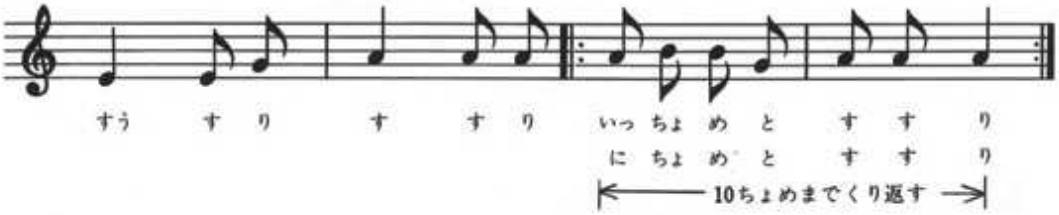

ハア　ー　ー　もといの　かね　ー　か　せ
3
おかみさん　は　ー　ー　ー　え　べ　ー　ー　ー　す
えりく　る　ー　さんよぐ　ち　ー
ホラふ　く　の　かみよ
アズル　コン　ズル　コン

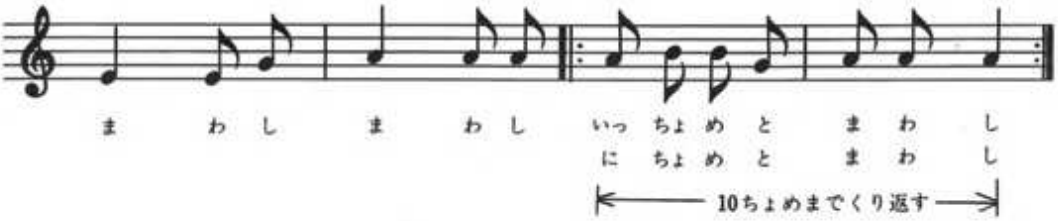
端　唄　（田代）


わしもこれか　ー　ら　ー　こもーり
を　ー　や　ー　めて　だんなさん
の　そばで　はりしごと

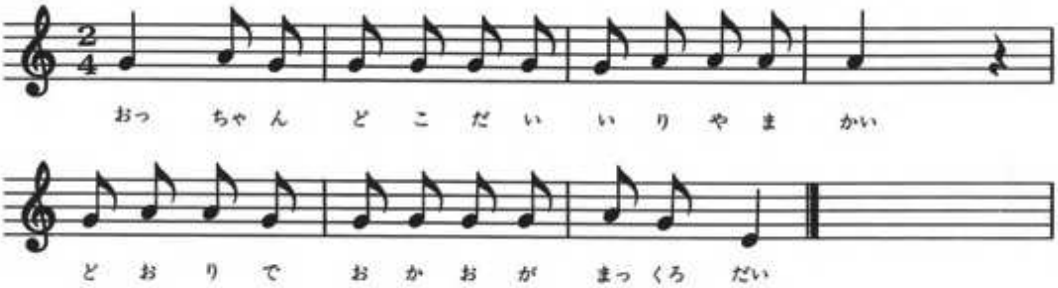
まりつき唄（ぶんどや）　（大笹）







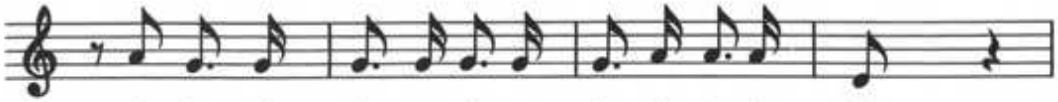
おっちゃんどこだい　（大笹）



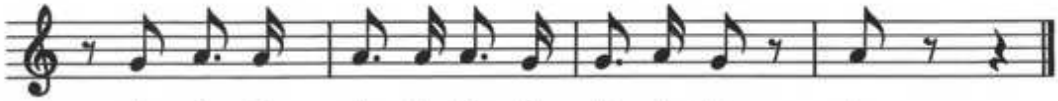
悪口唄　（大笹）

すない　すりこぎ　うまれた　まんま

悪口唄　（大笹）

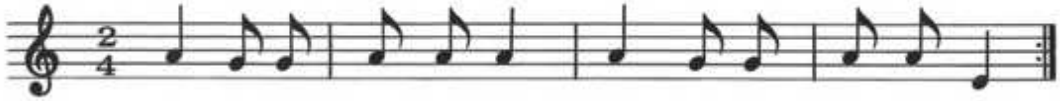


たしろ　たがない　やまのな　か



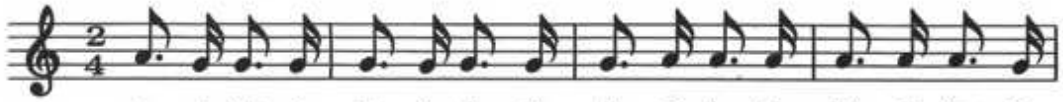
とだな　あければ　いもばっ　か

とんび　（大笹）



とんび　ととろ　めまいて　みせろ

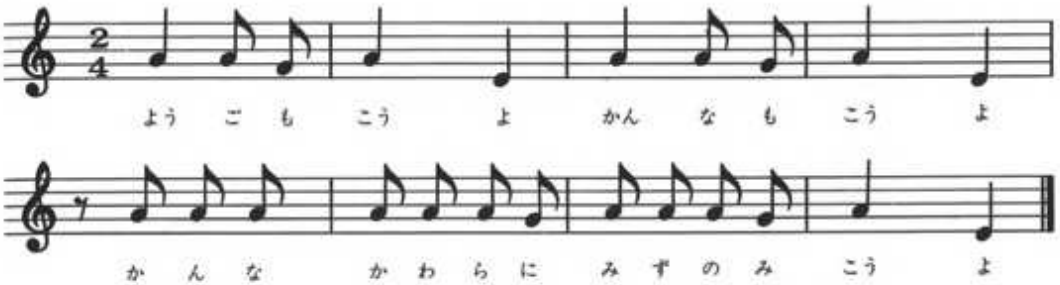
からす　（大笹）



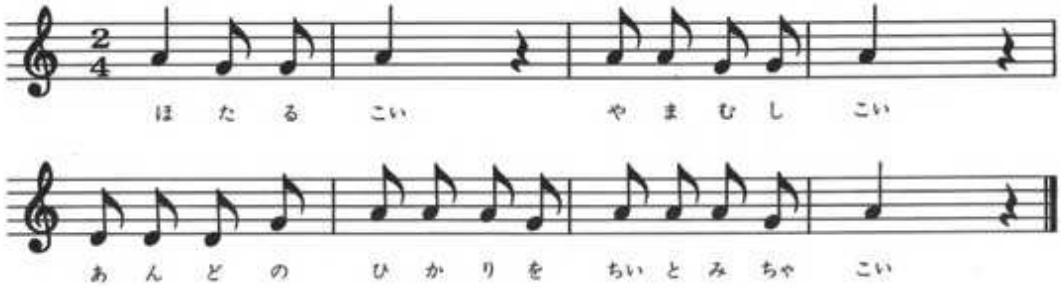
いまないた　からす　が　おてらの　だんごくって

だ　まった　だ　まった　（泣き虫に向って）

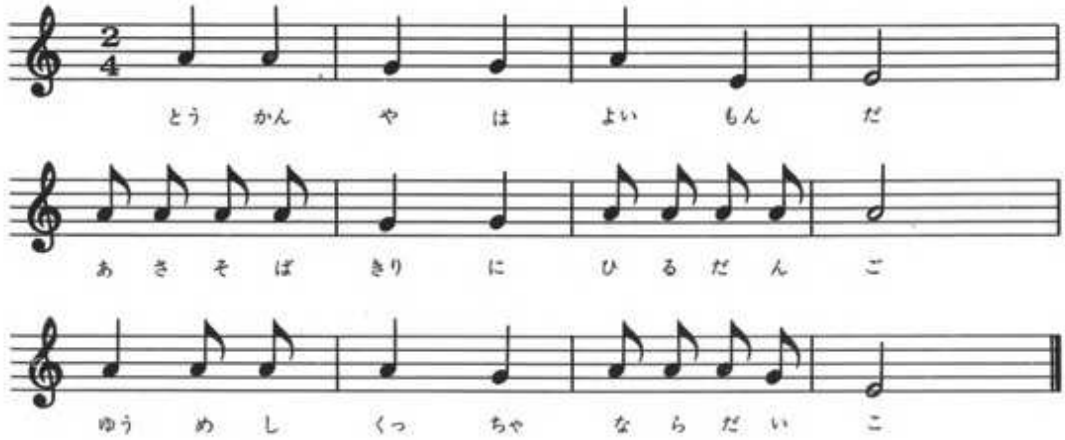
ようごの唄　（大笹）



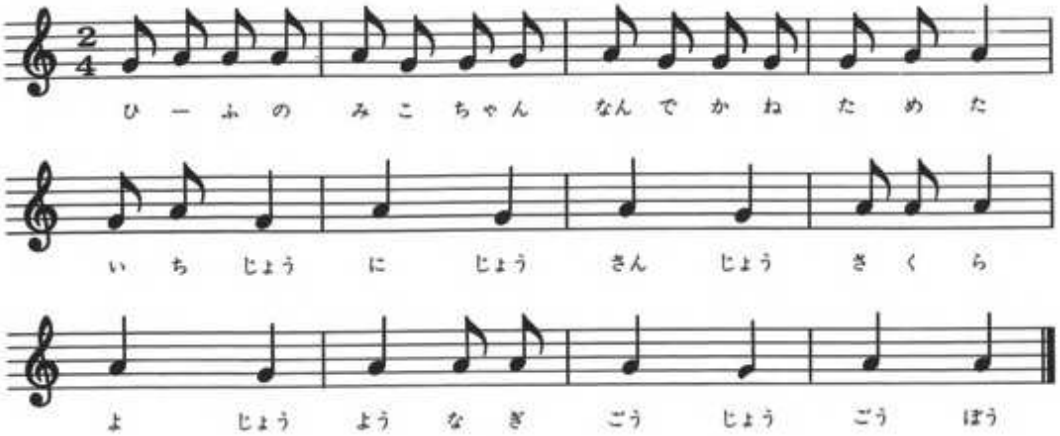
ほたる来い　（大笹）



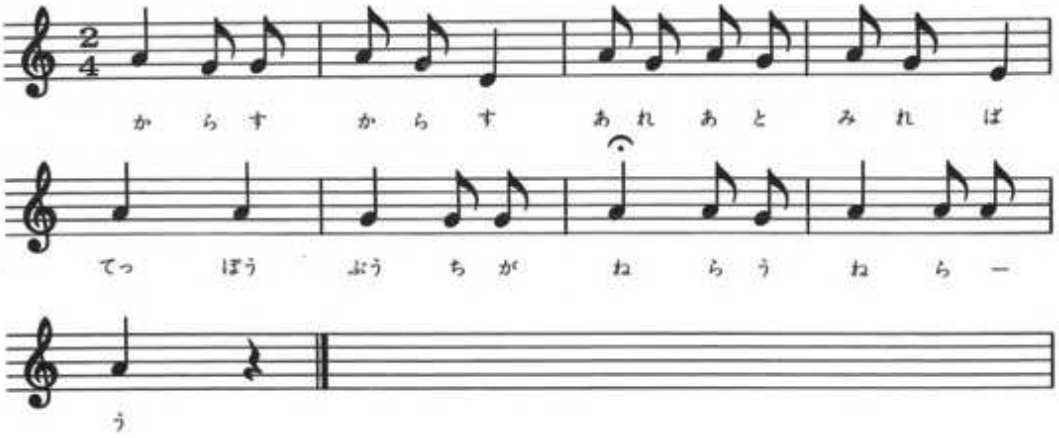
十日夜　（大笹）



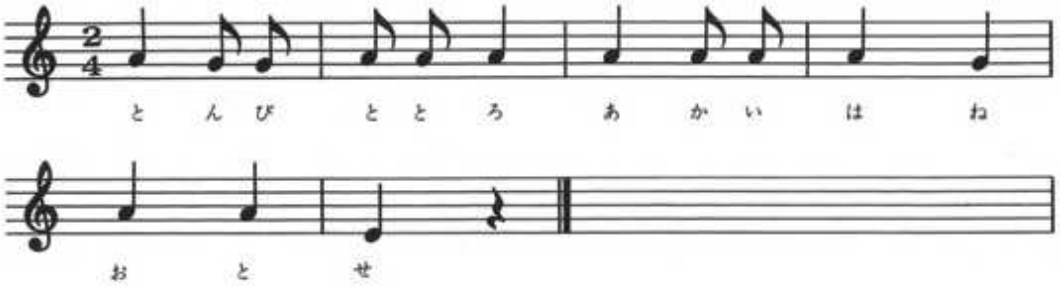
お手玉唄　（今井）



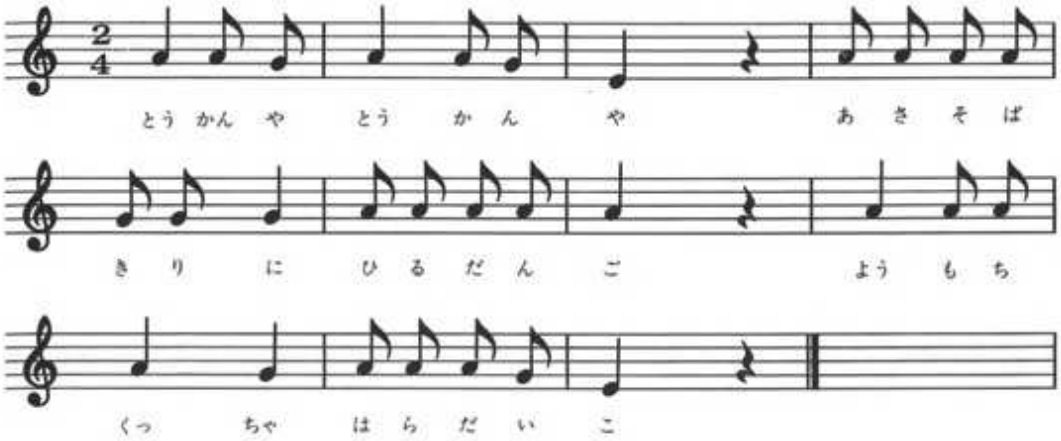
からすからす　（今井）



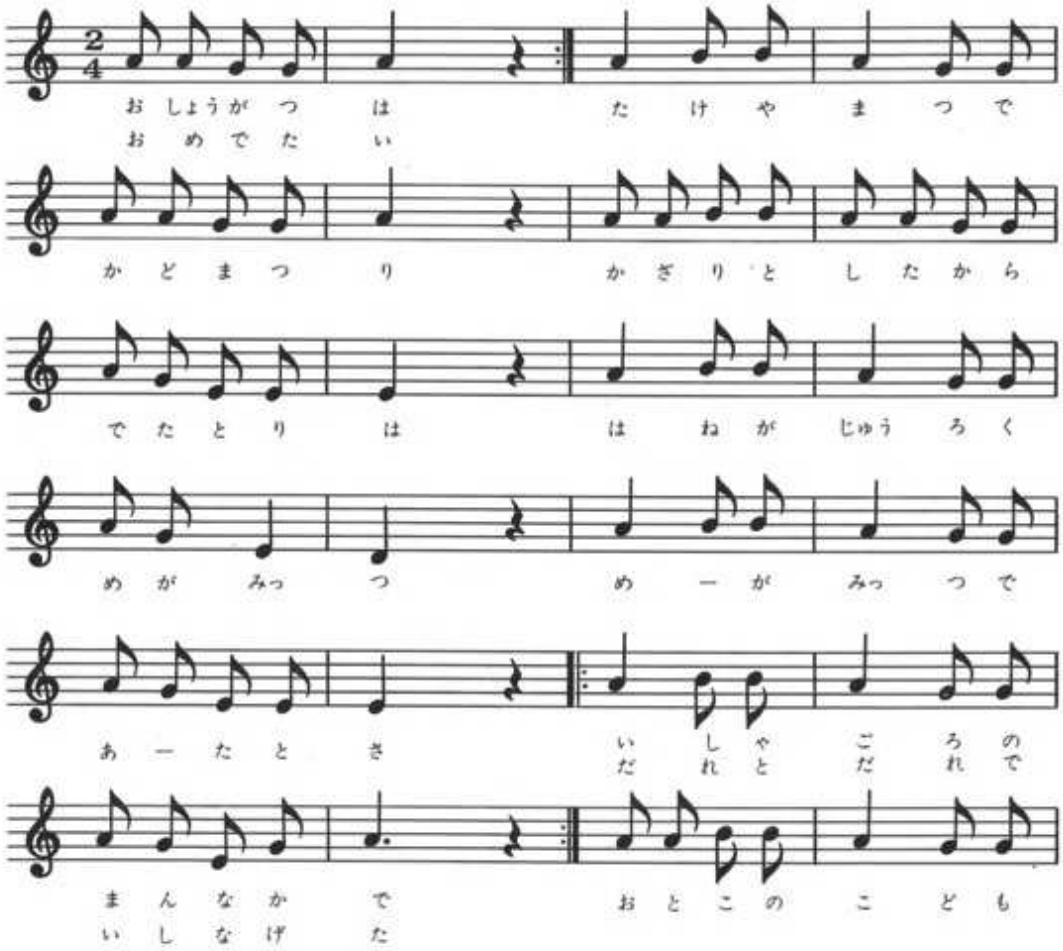
とんび　（今井）

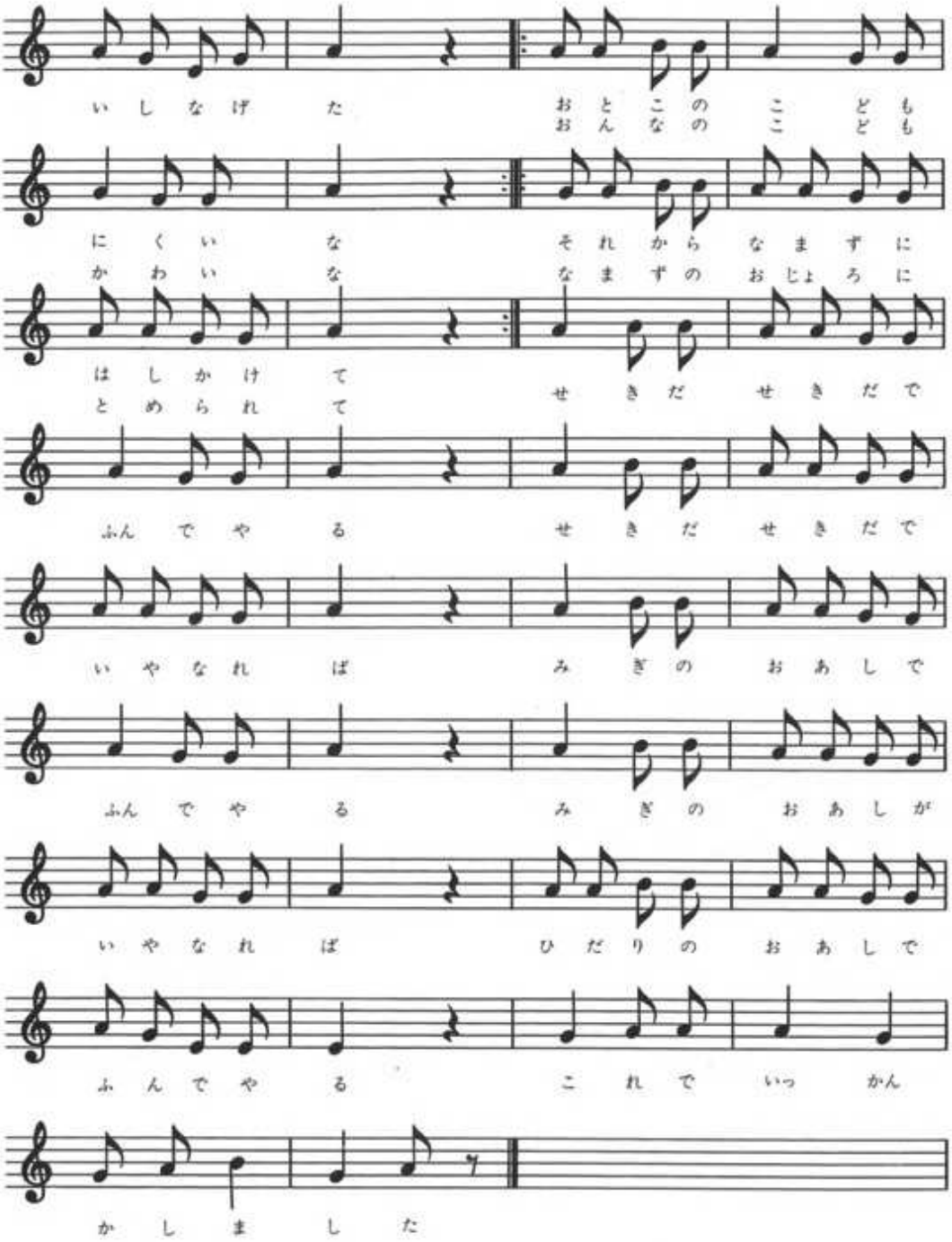


十 日 夜　　（今井）



糸まりつき唄　　（今井）

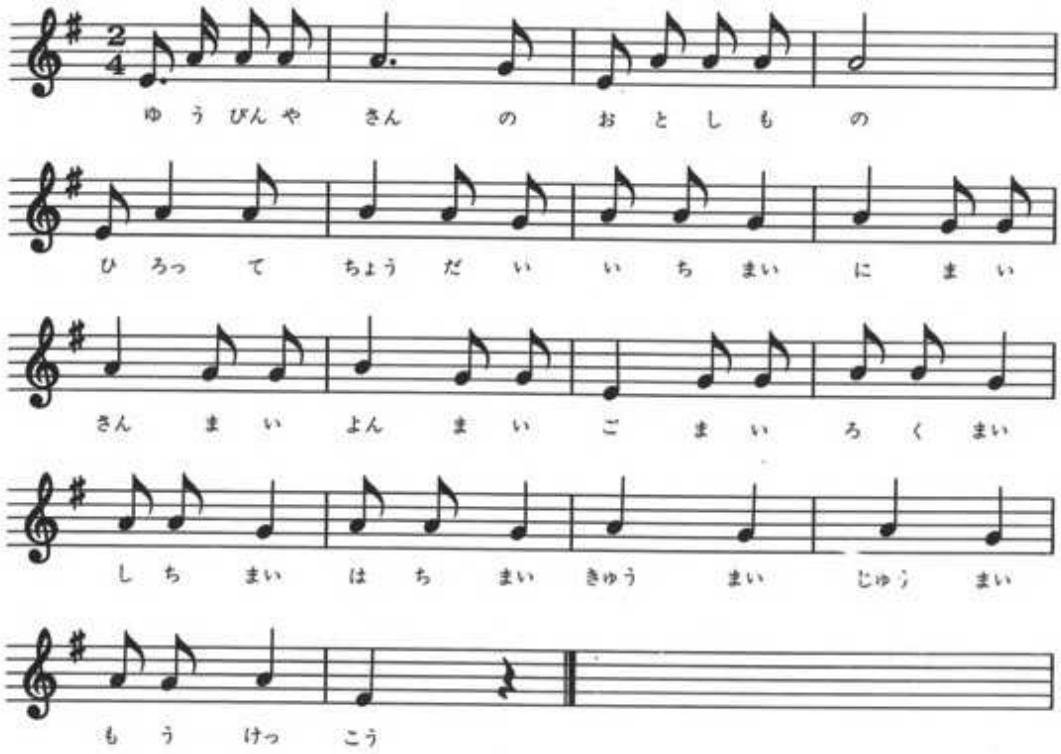



いしなげた
おとこのこども
おんなのこども
にくいな
それからなまずに
かわいな
なまずのおじょろに
はしかけて
とめられて
せきだせきだで
ふんでやる
せきだせきだで
いやなれば
みぎのおあしで
ふんでやる
みぎのおあしが
いやなれば
ひだりのおあしで
ふんでやる
これでいっかん
かしました

田代小学校児童のわらべ唄

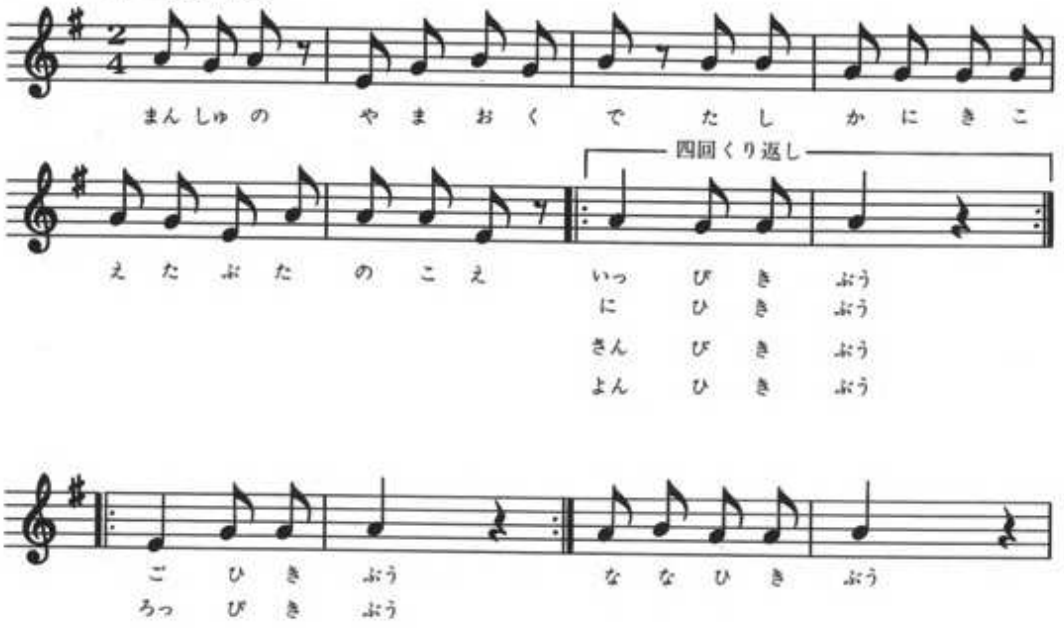
♩=92～100

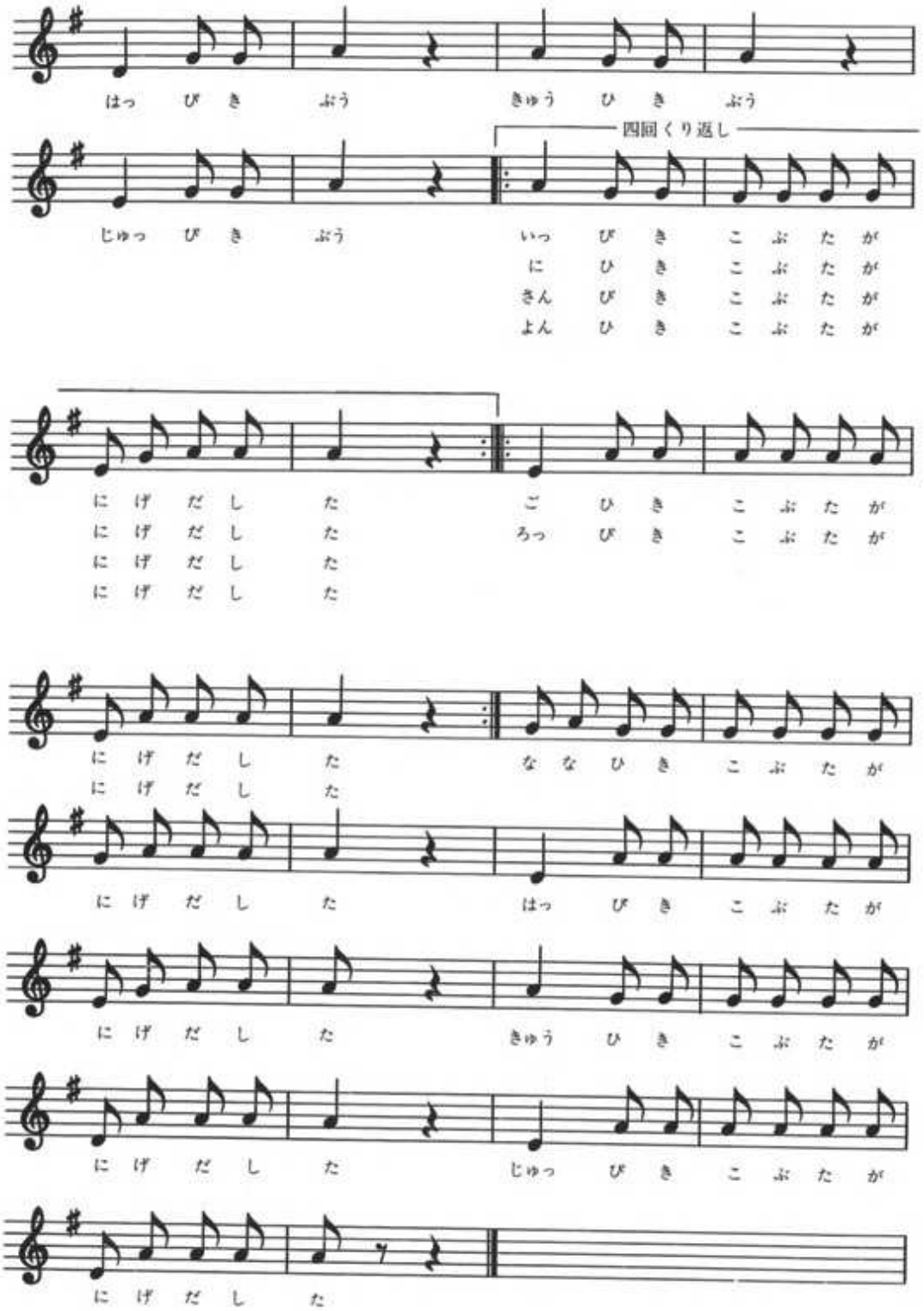
なわとび唄



満州の（なわとび唄）

♩=100～116




はっ　び　き　ぶう　きゅう　ひ　き　ぶう
四回くり返し
じゅっ　び　き　ぶう　いっ　び　き　こ　ぶ　た　が
に　ひ　き　こ　ぶ　た　が
さん　び　き　こ　ぶ　た　が
よん　ひ　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た　ご　ひ　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た　ろっ　び　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た
に　げ　だ　し　た
に　げ　だ　し　た　な　な　ひ　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た
に　げ　だ　し　た　はっ　び　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た　きゅう　ひ　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た　じゅっ　び　き　こ　ぶ　た　が
に　げ　だ　し　た

月っくり火くり（なわとび唄）

♩=92～104

月っ　く　り　火っ　く　り　す　い　よ　ー　び

もっ　く　り　きん　と　き　どっ　こ　い　しょ

に　ち　よ　う　び　や　ま　た

の　さ　く　ら　の　し　ず

か　な　に　わ　に　ぴい　しゃ　ら

どん　どん　さん　だ　い　め　お　ま　え　の

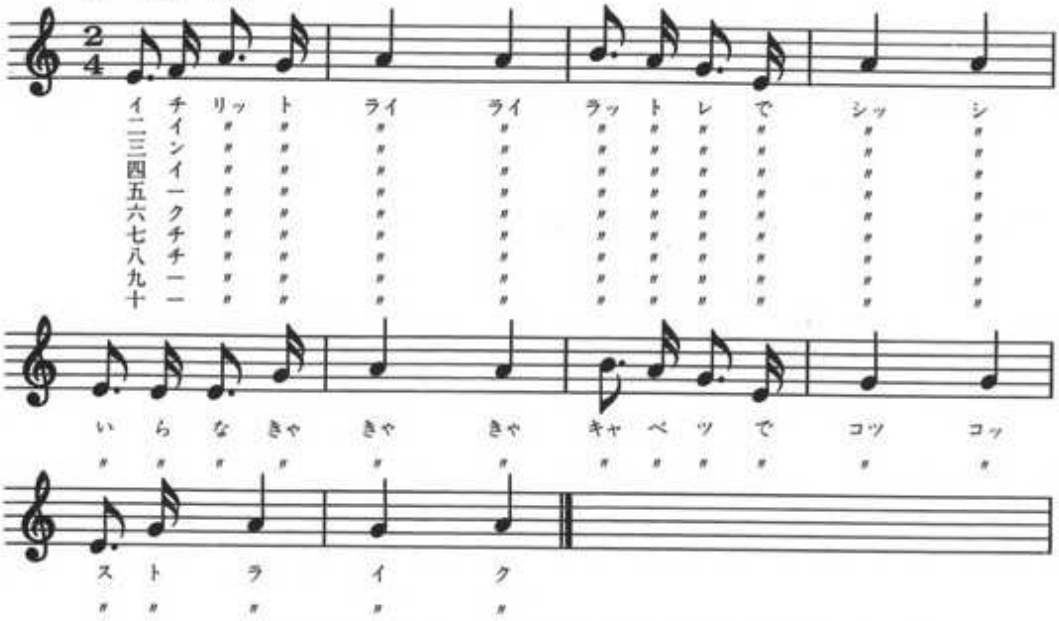
か　み　さ　ま　よん　だ　い　め　そ　ら

はい　れ　みん　な　は　い　れ　そ　ら

で　ろ　みん　な　で　ろ

イチリットライライ（まりつき唄）

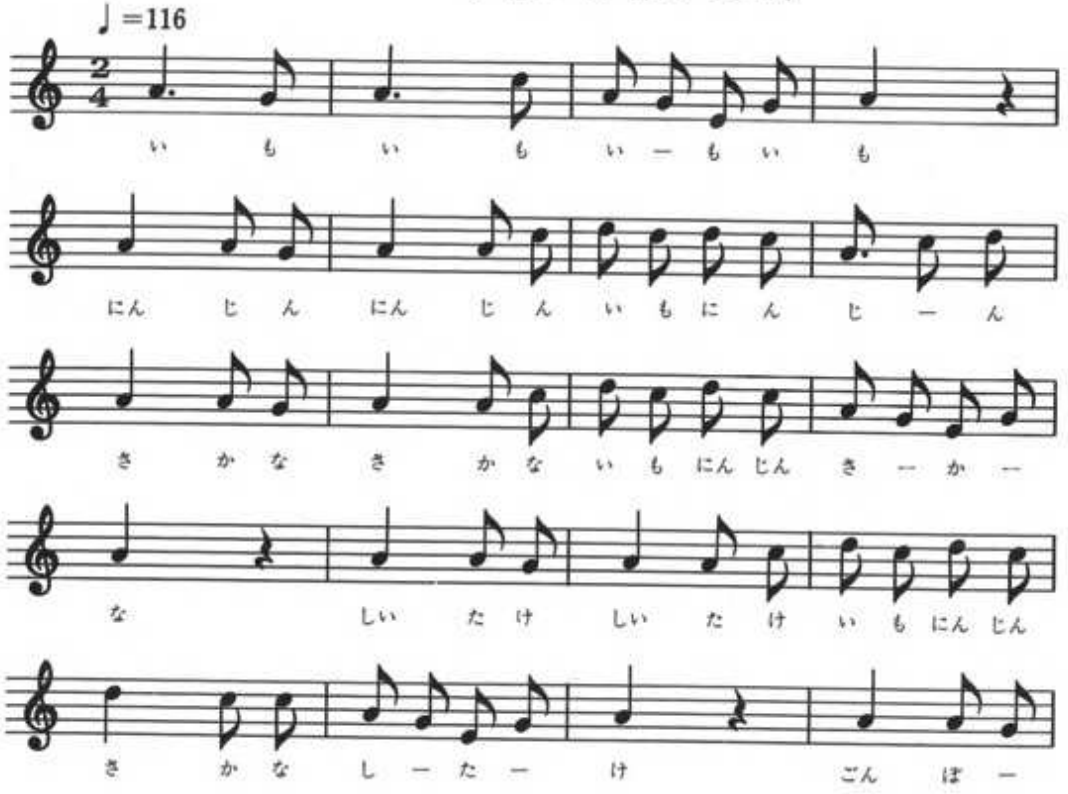
♩=108～116

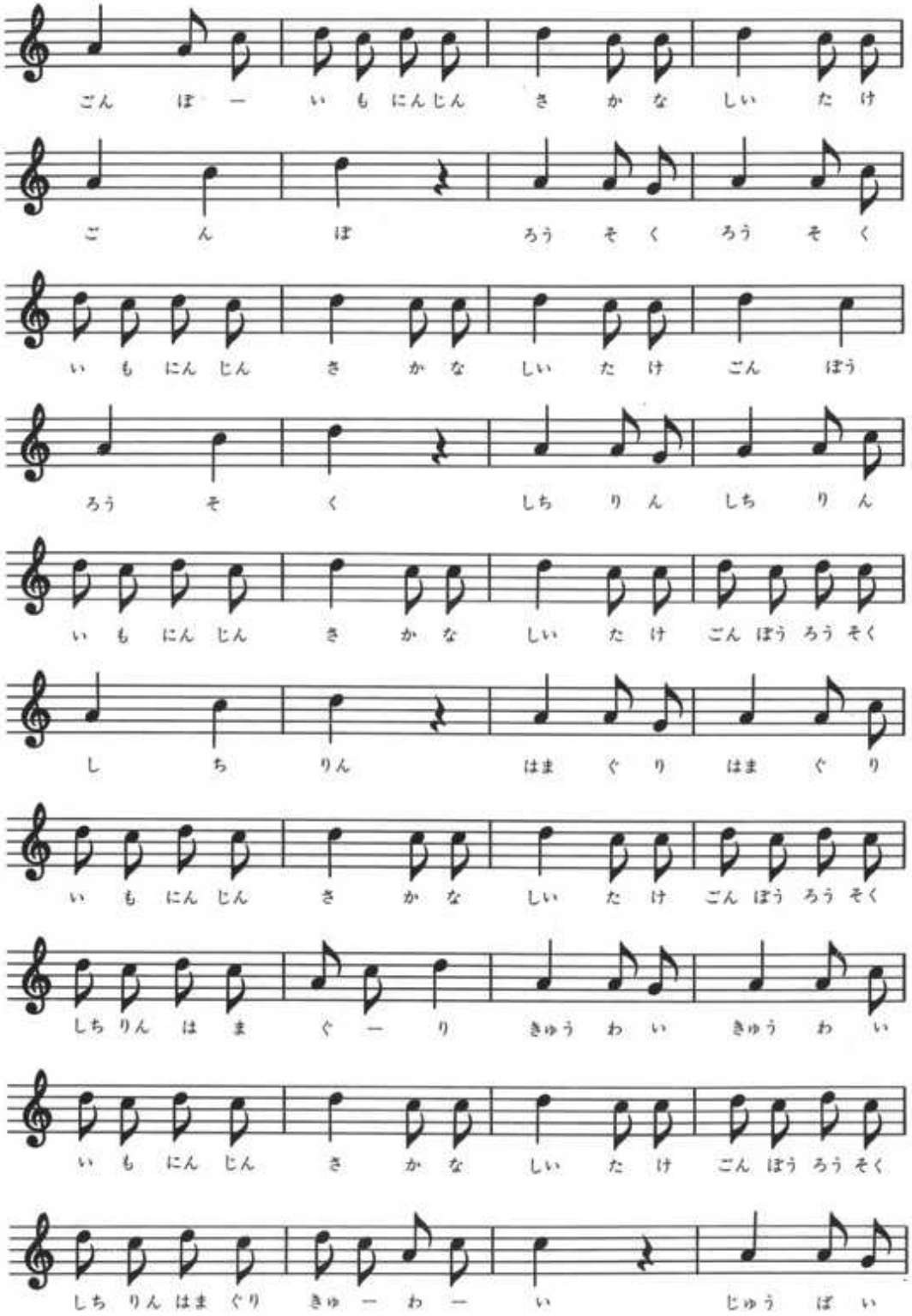


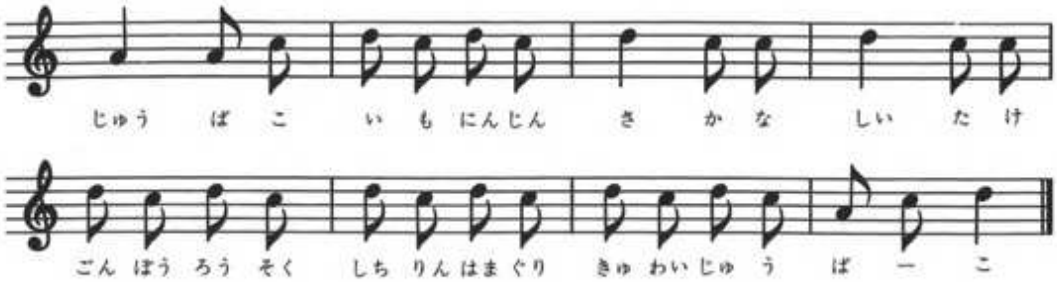
（嫁恋特産のキャベツを歌い込み、ストライクと結んでいる。子供は歌の中に、現代社会の事象をもののみごとに表現する。）

いもいも（まりつき唄）

♩=116



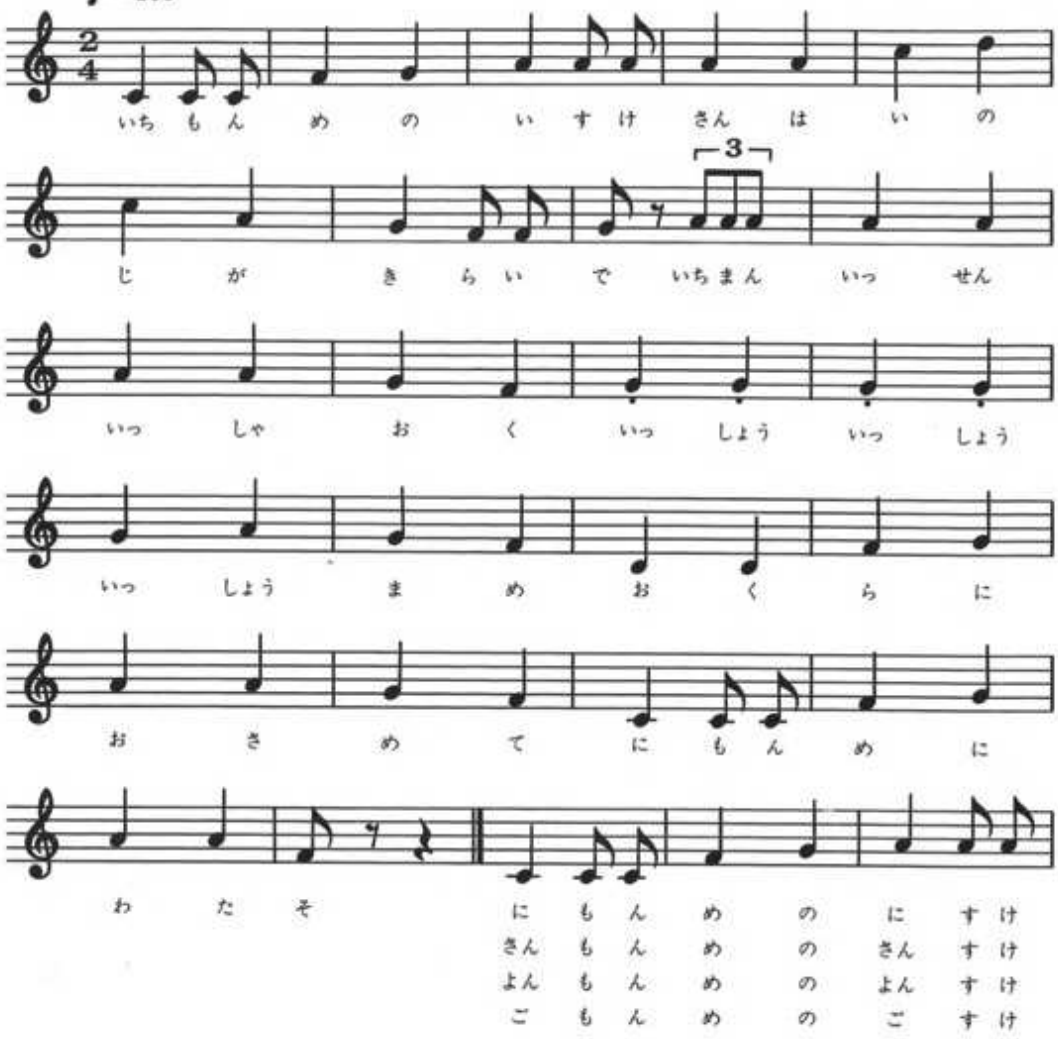

ごん ぼ ー い も にんじん さ か な しい た け
ご ん ぼ ろう そ く ろう そ く
い も にん じん さ か な しい た け ごん ぼう
ろう そ く しち り ん しち り ん
い も にん じん さ か な しい た け ごん ぼう ろう そく
し ち りん はま ぐ り はま ぐ り
い も にん じん さ か な しい た け ごん ぼう ろう そく
しち りん は ま ぐ ー り きゅう わ い きゅう わ い
い も にん じん さ か な しい た け ごん ぼう ろう そく
しち りん はま ぐり きゅ ー わ ー い じゅう ば い

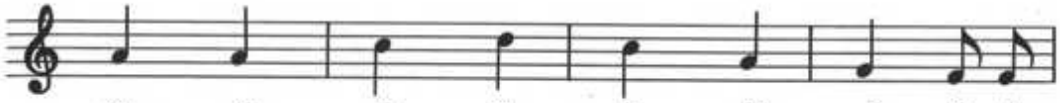


（この歌は県内では松井田、安中で採集した。長野県境に歌われているようだ。信州との関係をみてゆくべきだろう。）

一匁の一助さんは（まりつき唄）

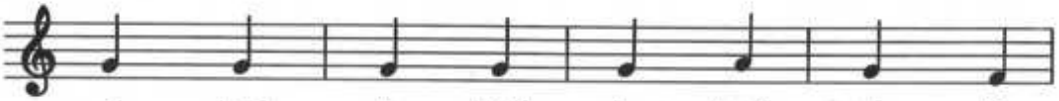
♩＝108





さん　は　に　の　じ　が　き　ら　い
さん　は　さん　の　じ　が　き　ら　い
さん　は　よん　の　じ　が　き　ら　い
さん　は　ご　の　じ　が　き　ら　い

で　に　ま　ん　に　せん　に　しゃ　お　く
で　さん　ま　ん　さん　せん　さん　しゃ　お　く
で　よん　ま　ん　よん　せん　よん　しゃ　お　く
で　ご　ま　ん　ご　せん　ご　しゃ　お　く



に　しょう　に　しょう　に　しょう　ま　め
さん　じょう　さん　じょう　さん　じょう　ま　め
よん　しょう　よん　しょう　よん　しょう　ま　め
ご　しょう　ご　しょう　ご　しょう　ま　め

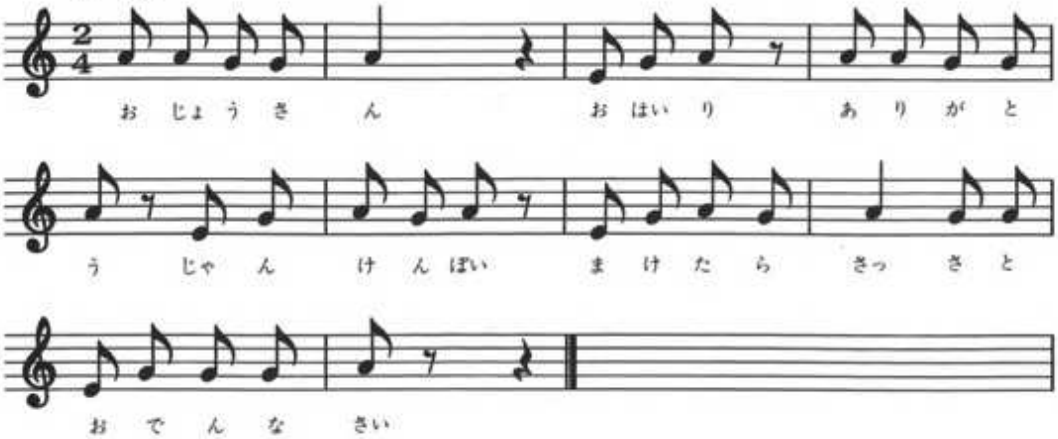
お　く　ら　に　お　さ　め　て
お　く　ら　に　お　さ　め　て
お　く　ら　に　お　さ　め　て
お　く　ら　に　お　さ　め　て

さん　も　ん　め　に　わ　た　そ
よん　も　ん　め　に　わ　た　そ
ご　も　ん　め　に　わ　た　そ
ろく　も　ん　め　に　わ　た　す

（全国的にうたわれている唄。しかし歌われる地域性が表現されている。この歌の最後の「す」などそれである。）

おじょうさん（なわとび唄）

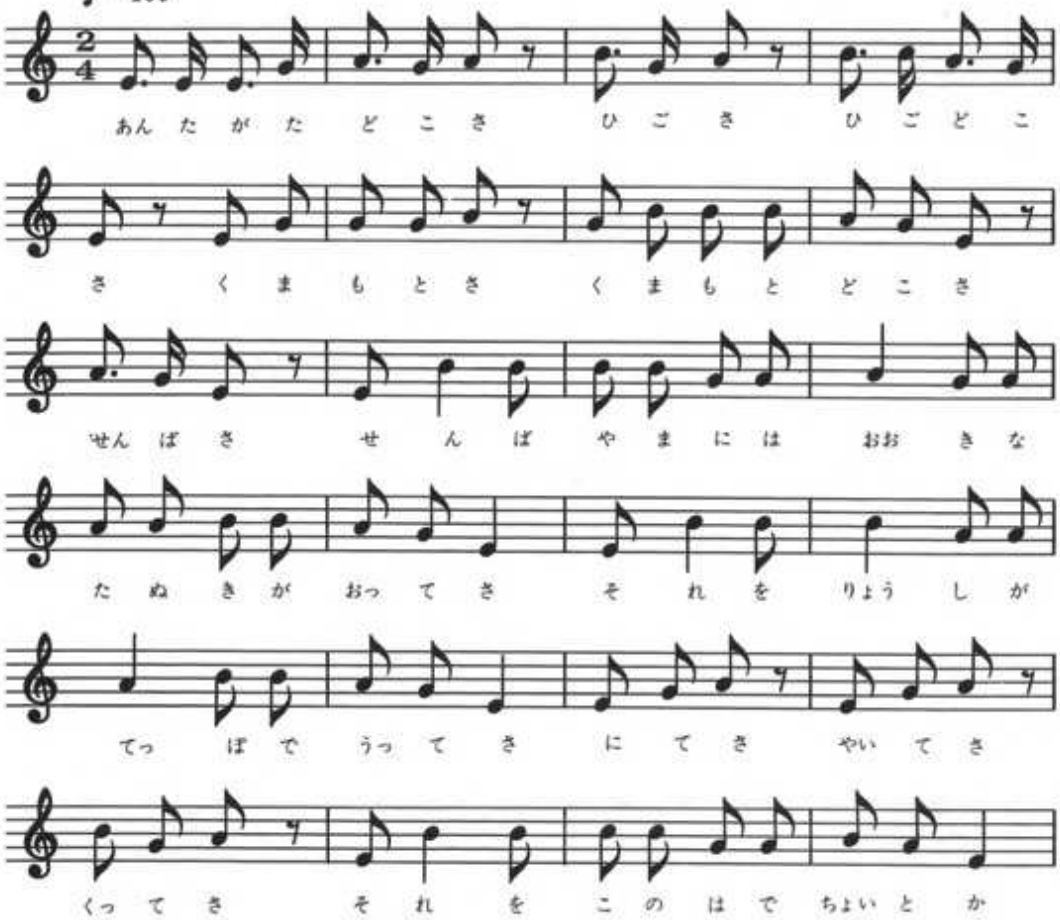
♩=104

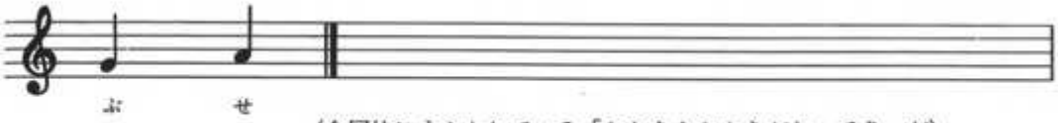


（この地方の方言が歌の中にそのまま表現されている。
じゃんけんぽい。まけたらさっさとおでんなさい。）

あんたがたどこさ（まりつき唄）

♩=100

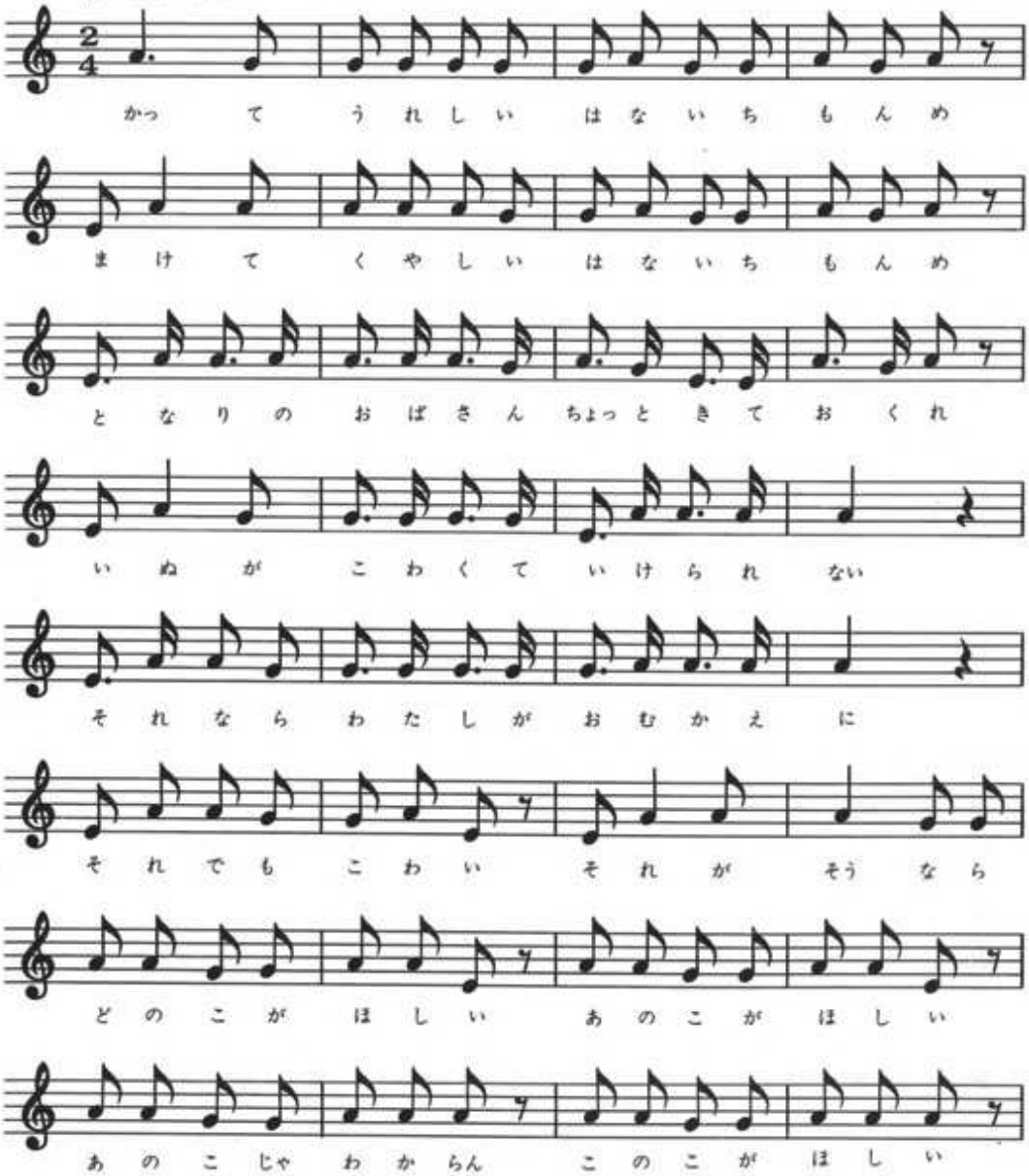




（全国的にうたわれている「おおきなたぬきがおってき」が特殊であろう。）

かってうれしい（おんとり）

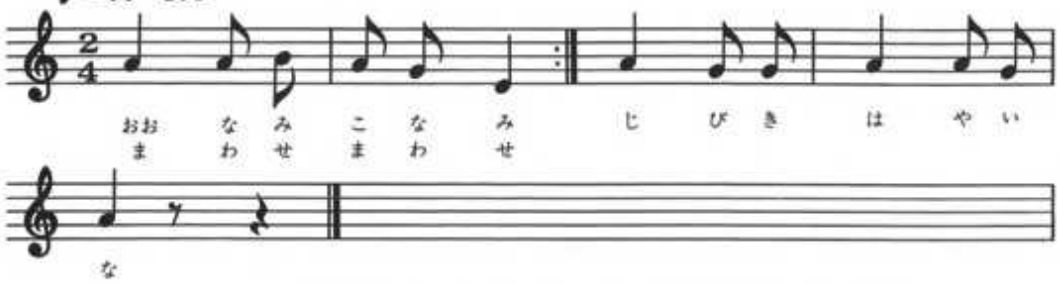
♩=116～120



（となりのおばさんからの比較、となりのおばさんから～それがうそなら
までの16小節が他地方のうたい方とちがう。）

大波小波

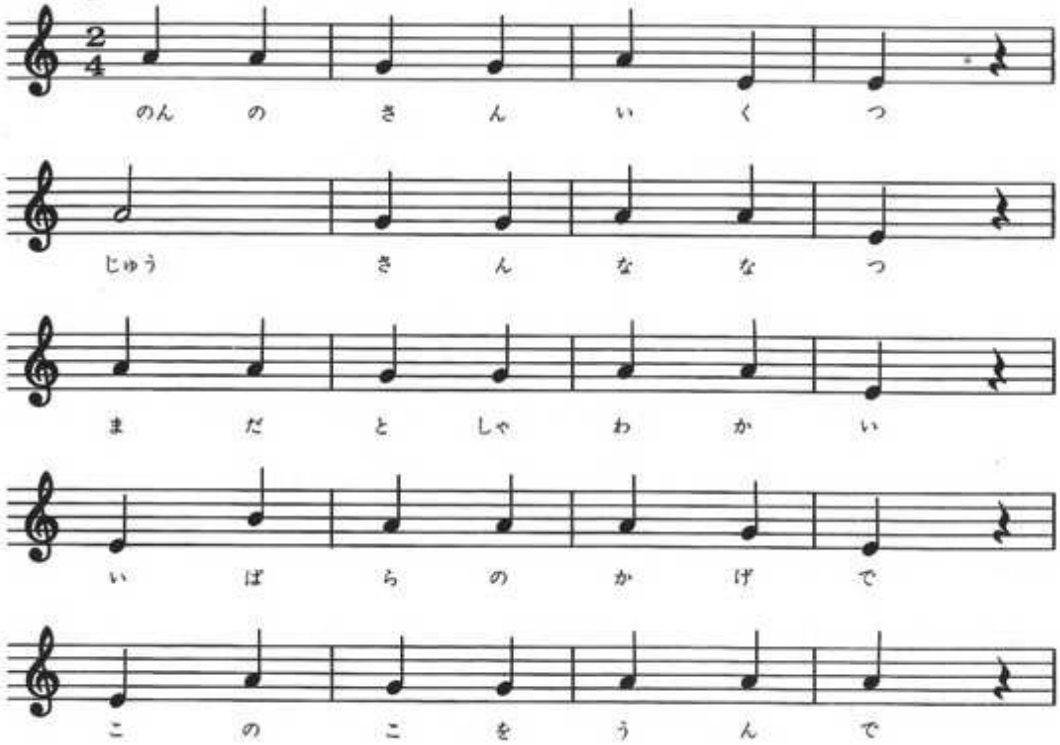
♩=96～104

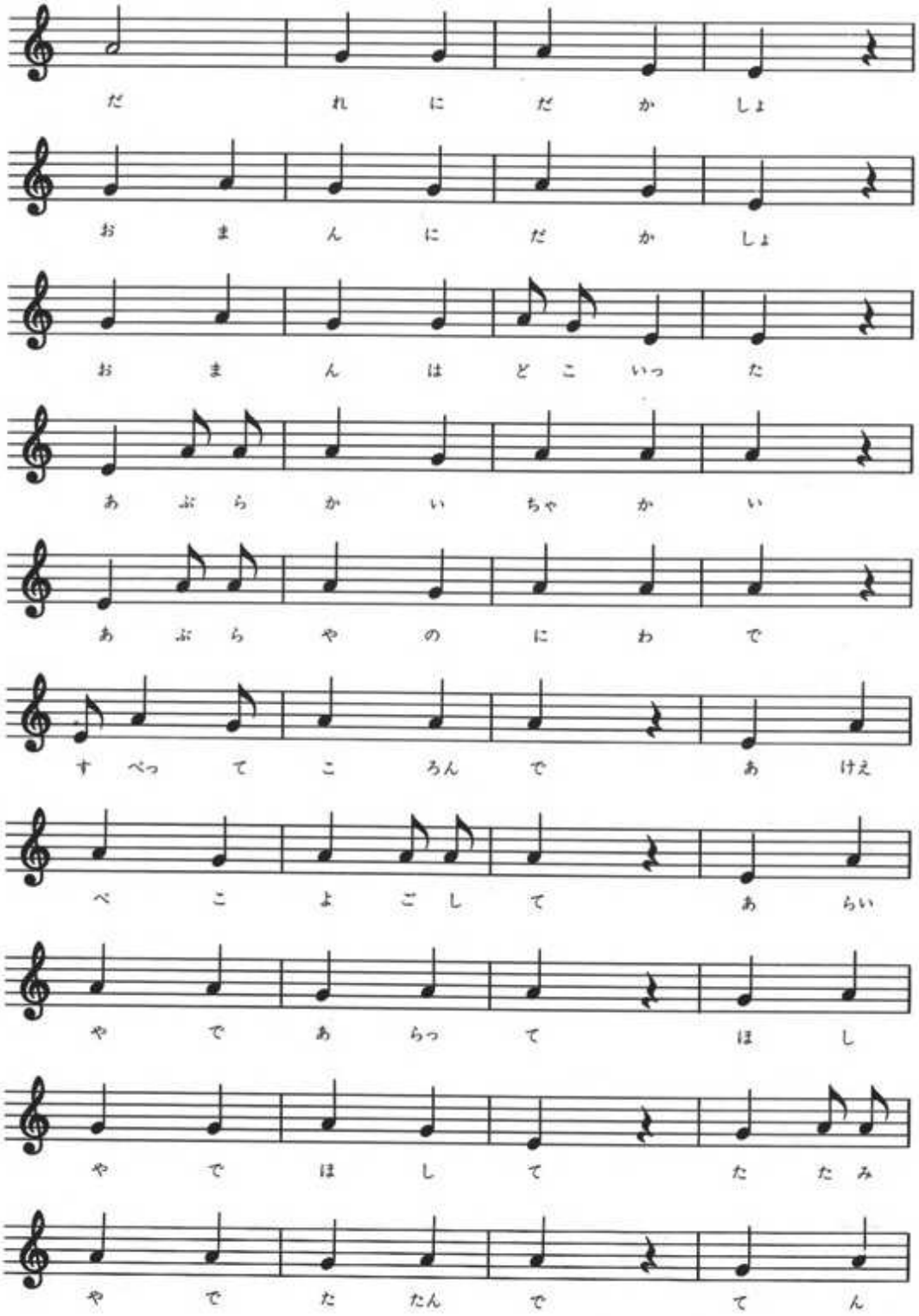


（短かい歌であるが大波小波の次から特殊な詞障がおもしろい。）

のんのさん幾つ（月に向って）

♩=92

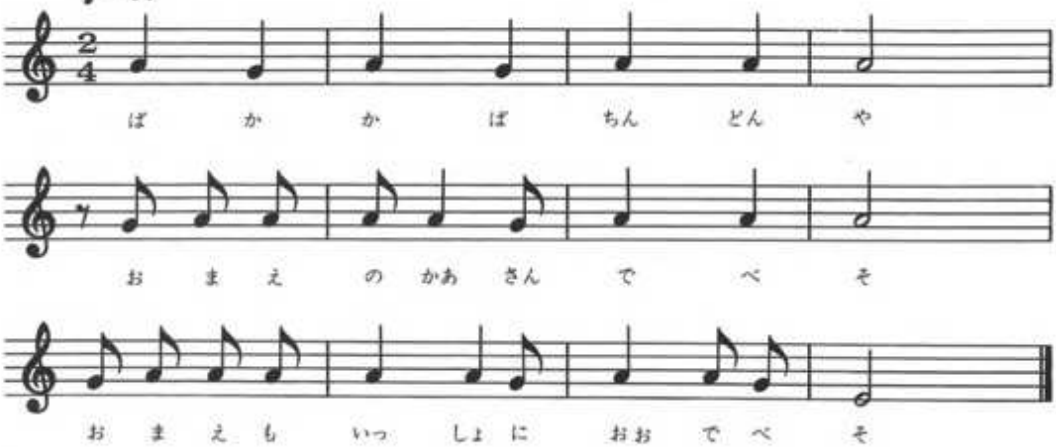



だ れ に だ か しょ
お ま ん に だ か しょ
お ま ん は ど こ いっ た
あ ぶ ら か い ちゃ か い
あ ぶ ら や の に わ で
す べっ て こ ろん で あ けえ
べ こ よ ご し て あ らい
や で あ らっ て ほ し
や で ほ し て た た み
や で た たん で て ん

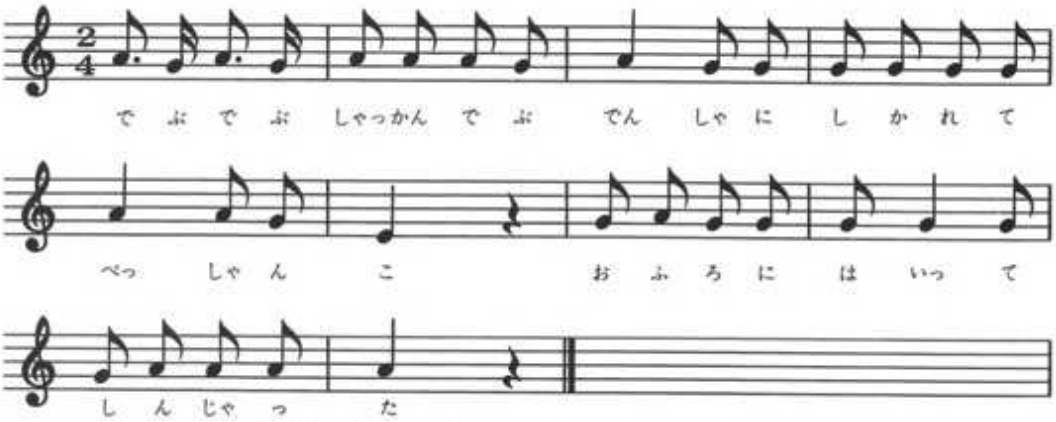
（県下各地のものとちがう部分が多い「いばらの道で」「油やの庭で」「あらい屋で洗って」から最後まではまったくめずらしい歌い方をしている。）

ばかかば（悪口唄）

♩=96



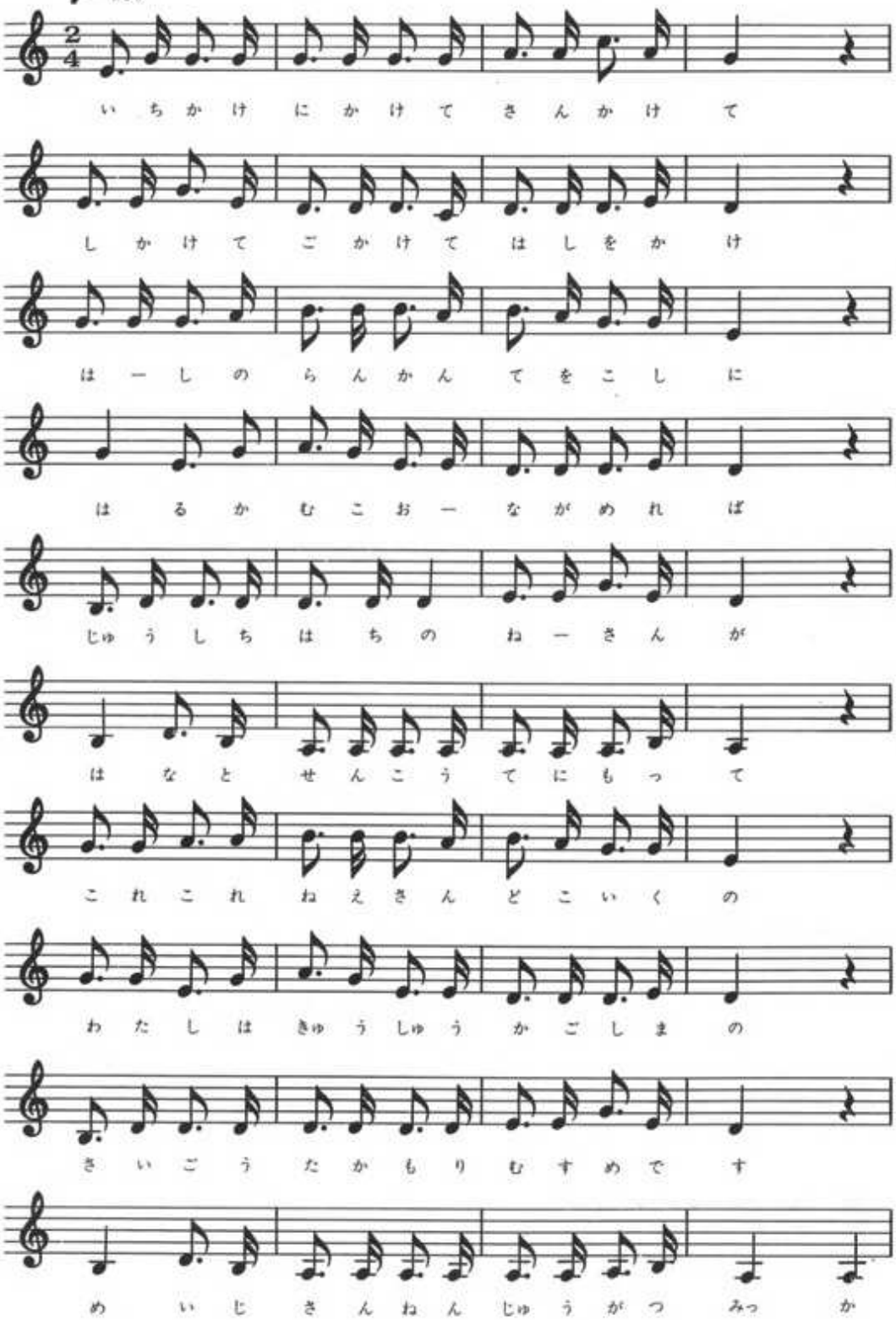
（最後のお前も一諸に大でべそと大担ないい方をしているのが他地区にない。）

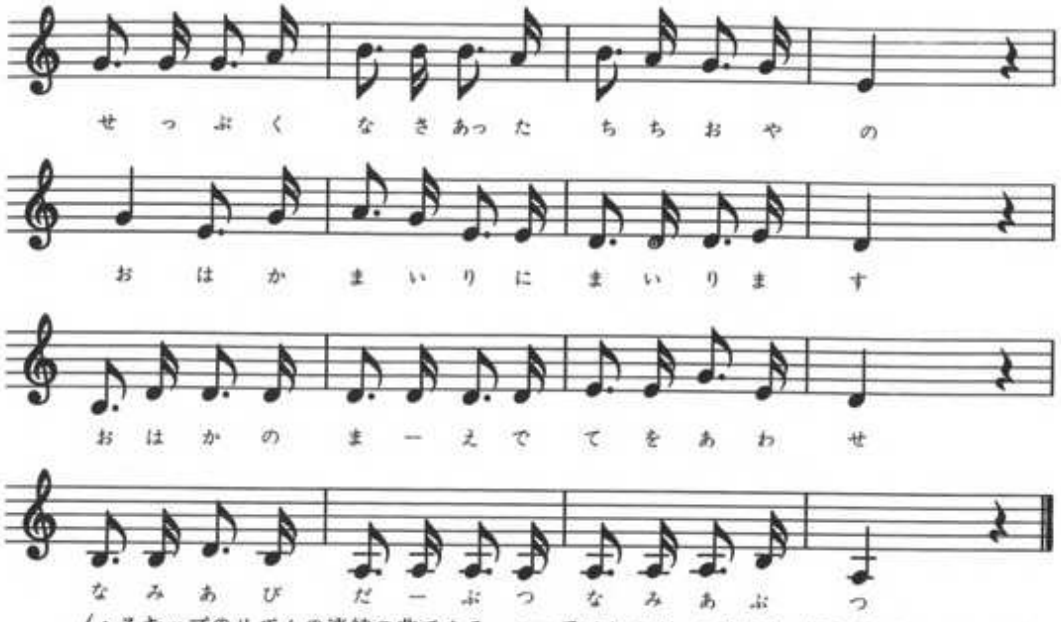


（電車にしかれて（ひかれて）しゃっかんでぶ（ひゃっかんでぶ）など方言がおもしろい。最後のおふろに入って死んじゃったとむすんでいる。）

1かけ2かけて（身体表現唄）

♩=108

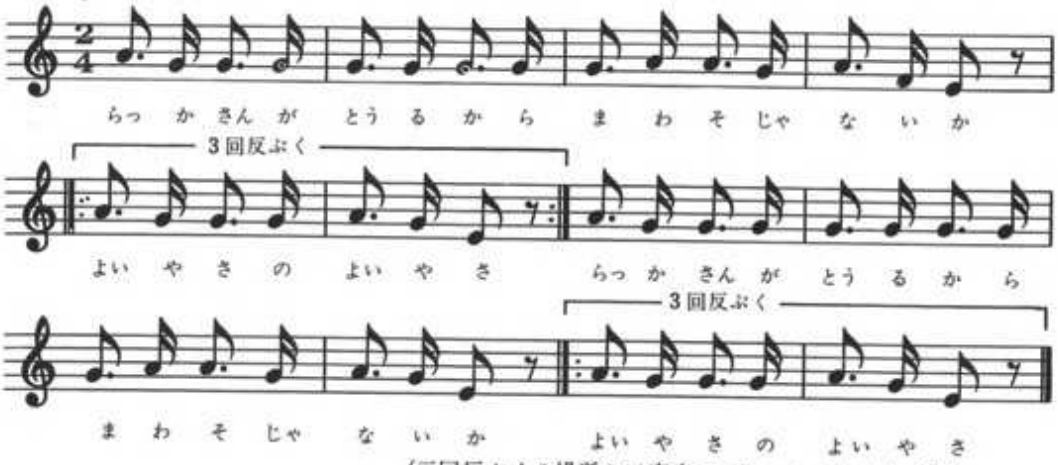




（・スキップのリズムの連続の曲である。・一番はじめは一の宮のかえ唄である。・なむあびだぶつを（なみあびだぶつ）と方言。・宮城が11度という広域さ。・10月3 日という歌詞が多すぎてこの部分リズムが変化。）

らっかさん（身体表現唄）

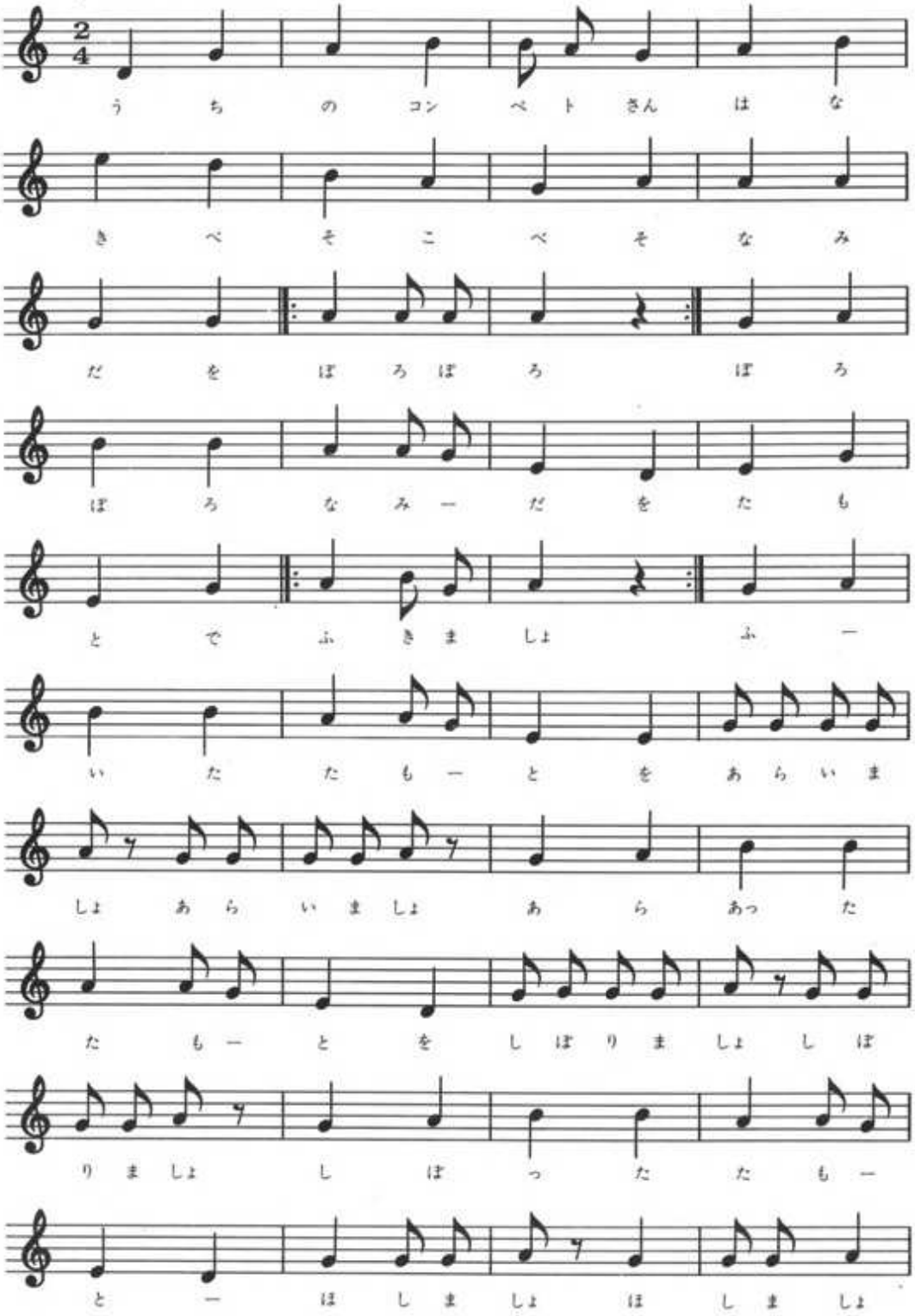
♩=108

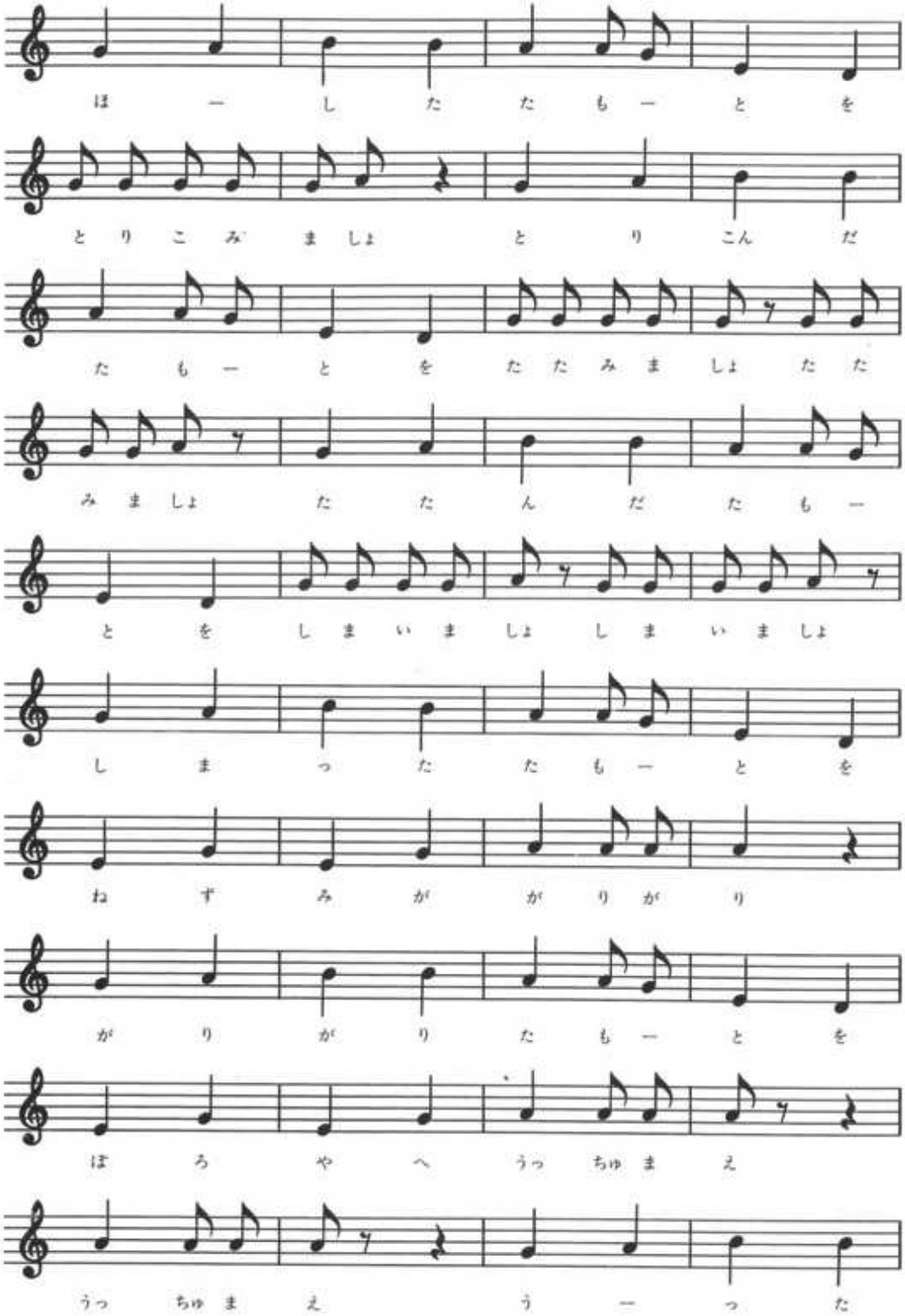


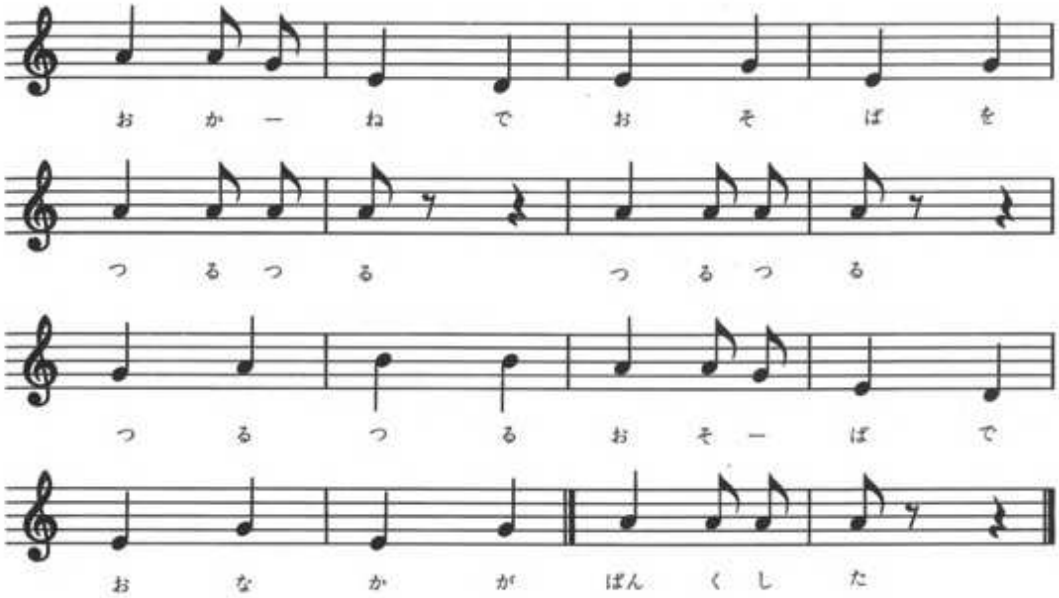
（三回反ぶくの場所が二度出てくる。しかしわらべ唄では不自然でない。）

うちのコンペトさんは（身体表理唄）

♩=108



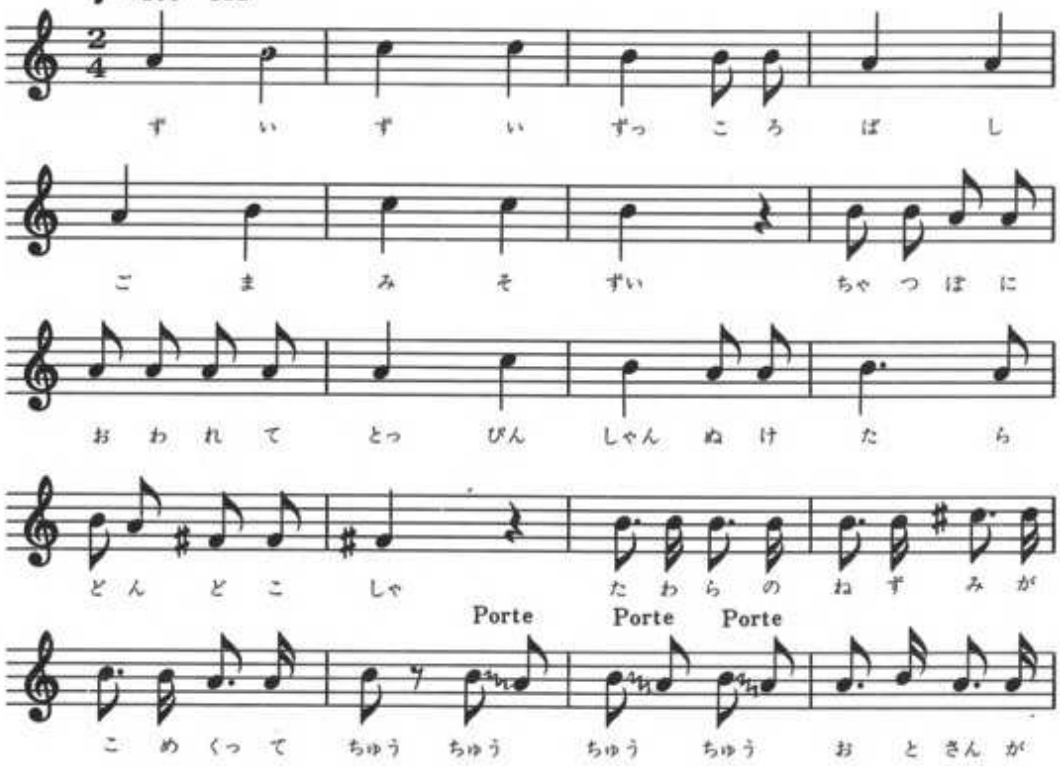

ほ ー し た た も ー と を
と り こ み ま しょ と り こん だ
た も ー と を た た み ま しょ た た
み ま しょ た た ん だ た も ー
と を し ま い ま しょ し ま い ま しょ
し ま っ た た も ー と を
ね ず み が が り が り
が り が り た も ー と を
ぼ ろ や へ うっ ちゅ ま え
うっ ちゅ ま え う ー っ た



（物語的に長々とつづく曲である。方言と音符の関係が特異的である。
ぼろやにうるなど生活感がにじみでている。）

ずいずいずっころばし（手遊び唄）

♩=100～112



よんでも　おっかさんが　よんでも　いきいっこ

なーー　し　よいど　のまわり

でおちゃわ　んかいた　のだ　ーれ

（どんどこ「しょ」と普通歌うが、ここではどんどこ「しゃ」と歌う。米くってチューは普通にうたい、次からのチューは三回ともポルタメントの歌い方をしている。）

おいばねこばね（はねつき唄）

♩=92～104

おいばねこばね

西洋音階的不降である

ちょう　ーちょに　なーて

そらまで　あがれ

Porte

ひーふーみーい　つ

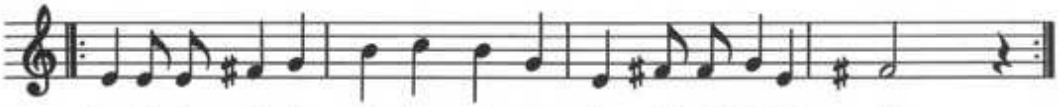
つでわたそ　はなこさんに

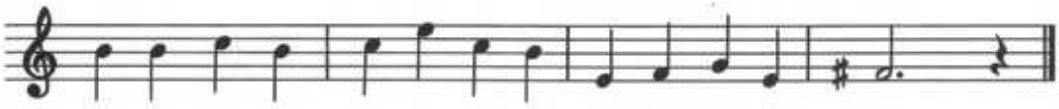
わた　そ

（非伝統的音階が入っている。現代小学生の西洋音楽教育の影響であろう。ひいふう「みい」の「みい」がポルタメントでうたわれている。）

ねんねんねころげて（こもり唄）

♩=100

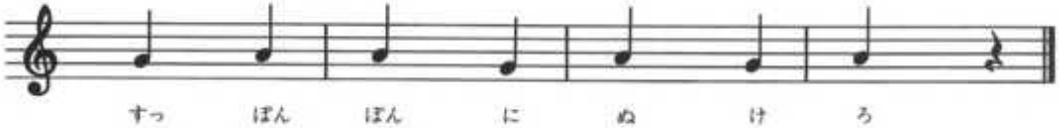




（県下には「猫のけつに」と歌われるのが多いから「ねころげて」と歌うのはめずらしい。）

白豆・黒豆（鬼きめ唄）

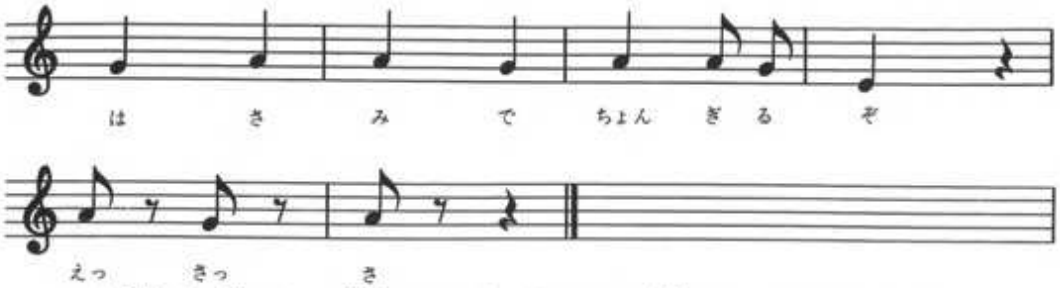
♩=97～100



（曲が終るまですべて四分音符でうたわれているが、鬼の決め方がおもしろいので平ぼんでない。）

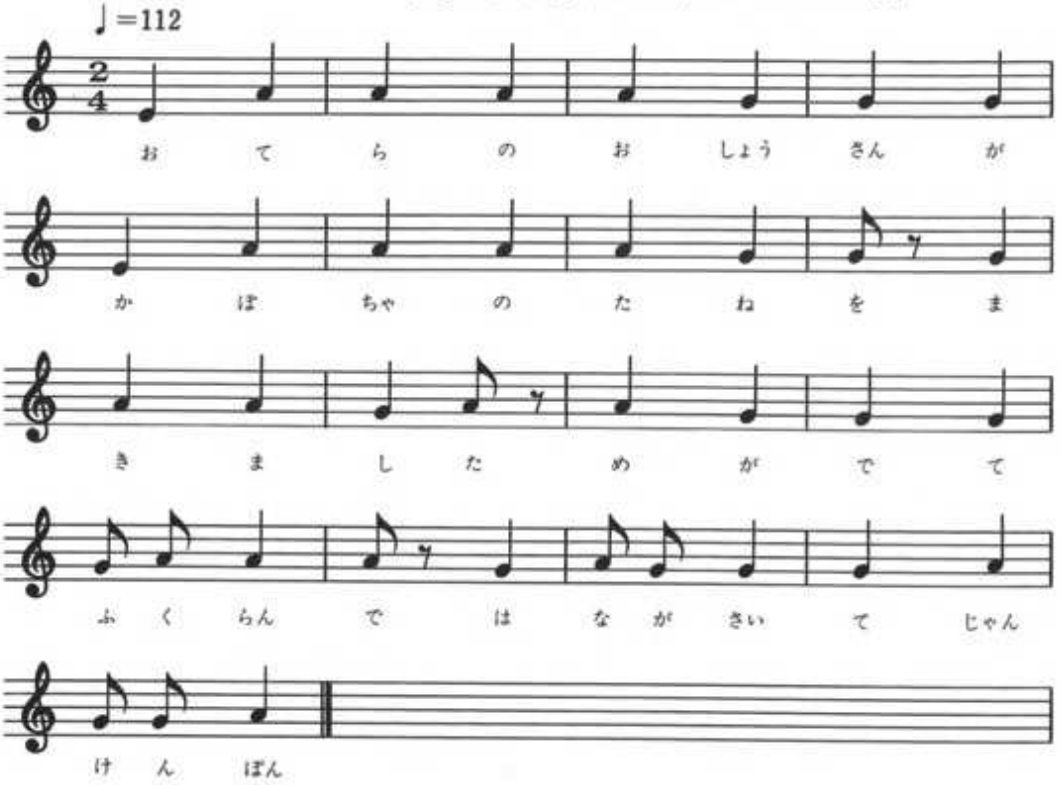
あやめがめ出した（鬼きめ唄）

♩=108



（「花さきゃ開いた」が普通のメル。しかしここでは「花さか」と唄っている。
県下では「花さきゃ開いた」と歌っているがここでは「花さか」と歌っている。）

お寺のおしょうさん（ジャンケンの唄）



（・ジャンケンをする前におしょうさんの種まきの身体表現する（心をおちつけ呼吸を合わせる）いみなのだ。
・最後でジャンケンポンを勝負する。
・あいこの場合にジャンケンをつづける。）

東 京 の（くすぐらせ唄）

♩=100

とうきょう　の　にほんばしの　ないが

いやまの　ぶたや　のおいさん

（・くすぐらせうたはめずらしい。
・遊びの中で相手をくすぐらせながら歌われるわらべ唄はめずらしい。）

12の3（手遊び唄）

♩=126～132

いちにの　さんにのしの　ごさんいち

にのしの　にのしの　ご

（・指で歌っている数を表現する。・うっかりするとまちがえる。
・速度が早くなるとよりむずかしい。
・歌いながら速度をはやめ、ますますむずかしくなる。）

からすからす（からすに向っての唄）

♩=104

からす　からす　かんざぶ　ろう

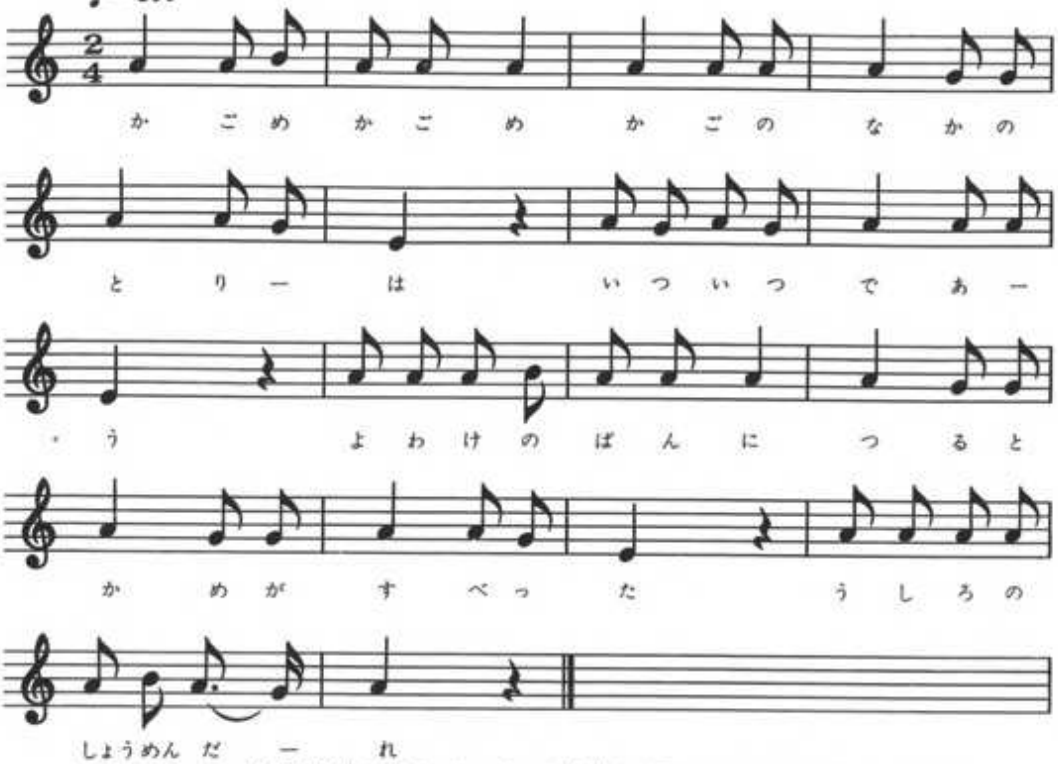
おまえの　うち　は　いまかじ　だ

はやく　かえれ　とんで　かえ　れ

（・古くは「おめえのうちが」と歌っているが、現代子は「お前のうちが」と標準語を用いている。
・からすのうたで早く帰れ、とんで帰れとうたっているのが他地区にない。）

かごめかごめ（鬼きめ唄）

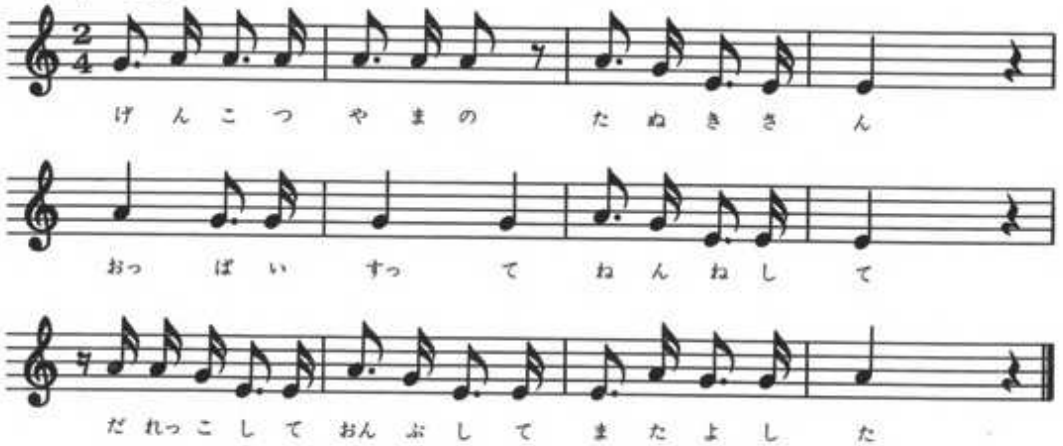
♩=100



（全国各地で歌われているのと変化なく歌われている。遊びも同じ。ラジオ、テレビで見、ききするせいであろう。今後も全国共通のわらべ唄が発展し、地域性は少なくなるであろうか。）

げんこつ山のたぬきさん（身体表現唄）

♩=104



（「だっこして」を「だれっこして」という方言。・おもしろい身体表現。・女の子の遊びらしい「おっぱい」「ねんねして」の表現など。
・おっぱいくれるとか、ねんねしてなどの表現は母性愛を表現した女の子の遊び。遊びの中で、このように女性としての本能的な生活基本が養われるのだ。）

今年のぼたんは（鬼きめ唄）

♩=92

こ と し の ぼ た ん は

よ い ぼ た ん お み み を

か ら げ て すっ ぽん ぼん もひ と つ

お ま け で すっ ぽん ぼん 私 も 入 れ て

や だ よ じゃあ家の前で お尻をたたくわよ じゃあ入れてあげる

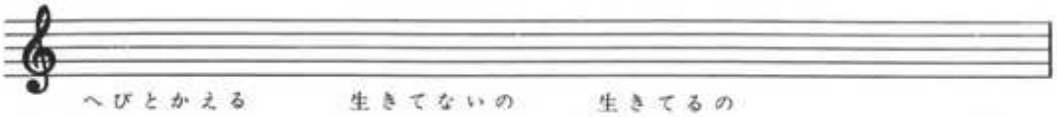
こ と し の ぼ た ん は

よ い ぼ た ん お み み を

か ら げ て すっ ぽん ぼん もひ と つ

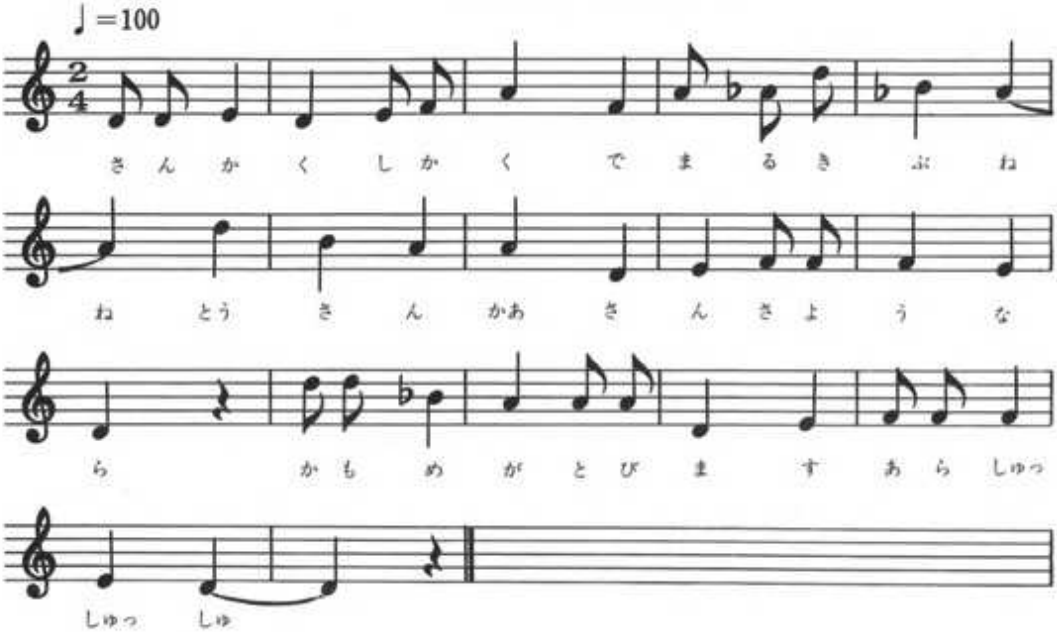
お ま け で すっ ぽん ぼん 私 も う 帰 る

ど う し て 夕ごはんだもの 夕ごはんの おかずなーに



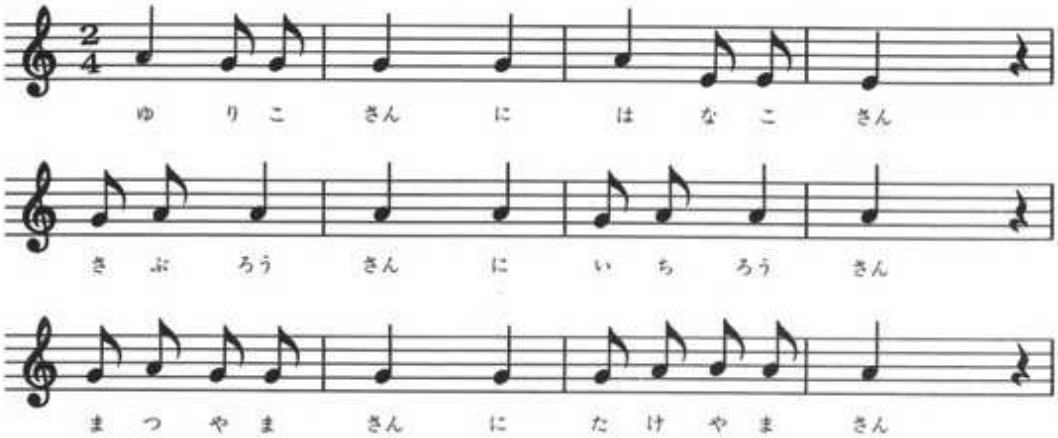
（どこにでもある。問題形式の唄。しかし外国にはこの形式のわらべ唄がないのが不思議である。）

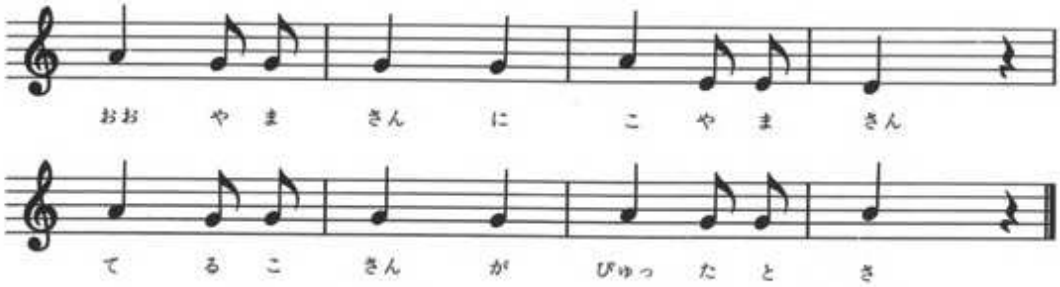
三角四角で（絵書唄）



（流行歌とわらべ唄の不統混合の曲である。）

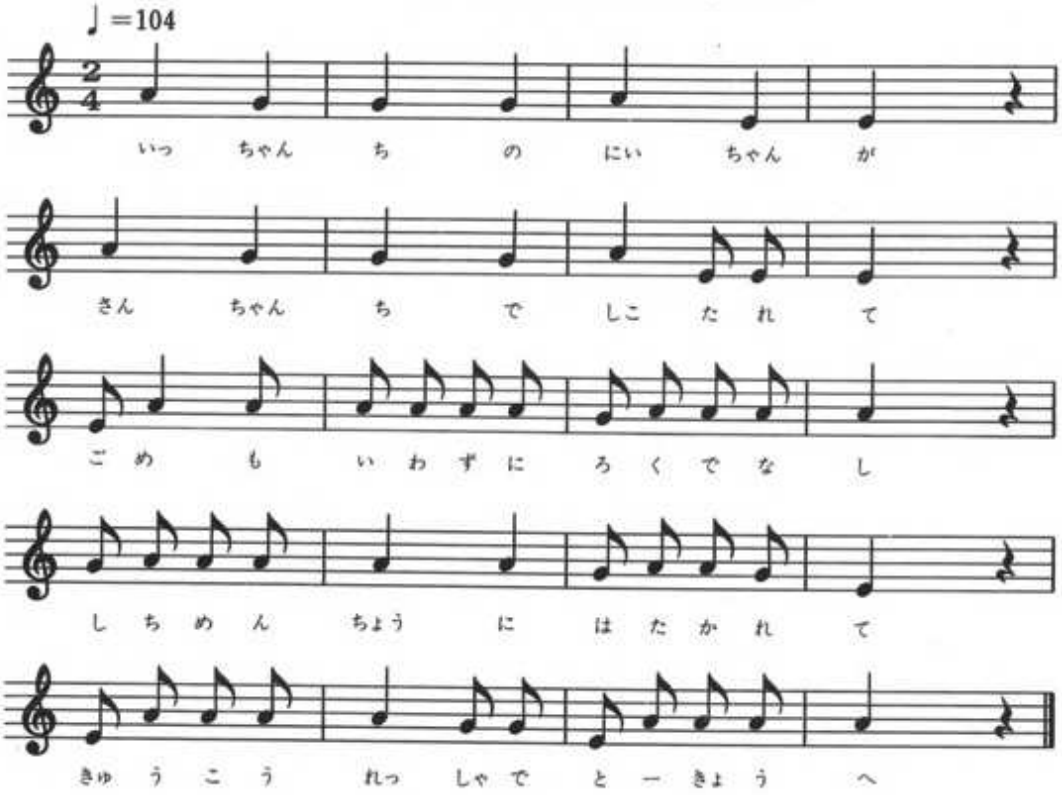
百合子さん花子さん（絵書唄）





（松山、竹山、大山、小山など絵に出てくるのを友だちの名前になぞらえてうたっていく。）

一ちゃんちの二ちゃんが（絵書唄）



（急行列車で東京へと絵かき唄の中には、その時代をそのままおりこんでうたっている。絵かき唄程現代っ子の創作するわらべ唄はあるまい。）

棒が一本あったとさ（絵書唄）

♩=104

ぼ　ー　が　いっ　ぽ　ん　あっ　た　と　さ

はっ　ぱ　か　な　はっ　ぱ　じゃ　な　い　よ

か　え　る　だ　よ　か　え　る　じゃ　な　い　よ

あ　ひ　る　だ　よ　ろ　く　が　つ　む　い　か　に

さ　ん　か　ん　び　さ　ん　か　く　じょ　う　ぎ　に

し　び　い　っ　て　こっ　べ　ば　ん　ふ　た　つ　に

ま　め　みっ　つ　あ　ん　ば　ん　ふ　た　つ

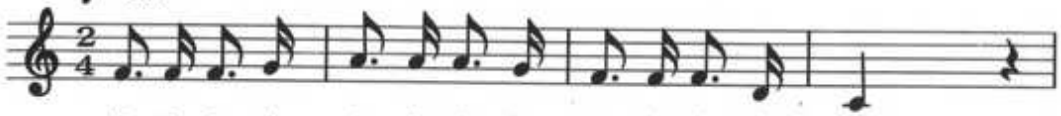
く　だ　さ　い　な　おっ　と　た　ま　げ　た

こっ　く　さ　ん

（・この唄の中にもわらべ唄の現代性を知ることができる。県下では普通「あんばんかって」と歌うが、ここでは「こっべバンかって」と歌っている。
・三角定規に「し」び入ってと歌っているが「ひ」び入ってであろう。）

三角先生（絵書唄）

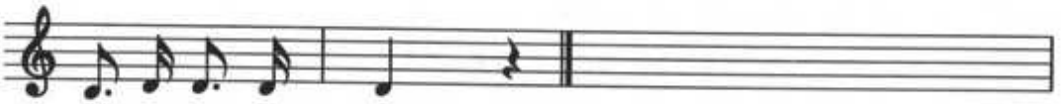
♩=104



（・「汽笛一声新橋を」のメロディーでうたっている。
・先生（学校生活）を折り込んで歌っている。）

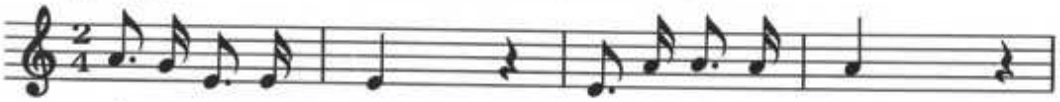
丸ちゃん（絵書唄）

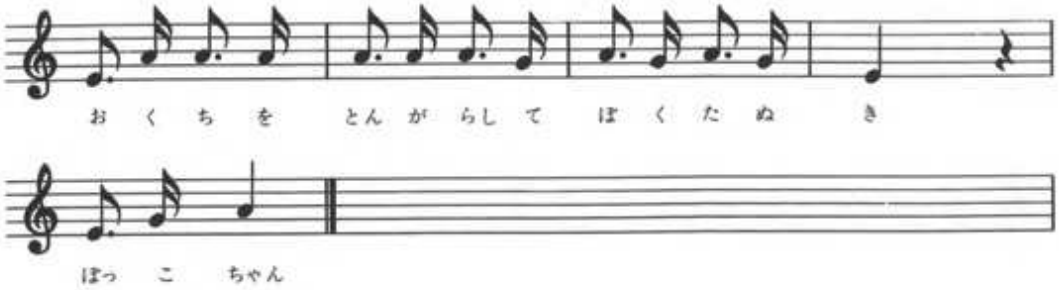
♩=104



♩=100

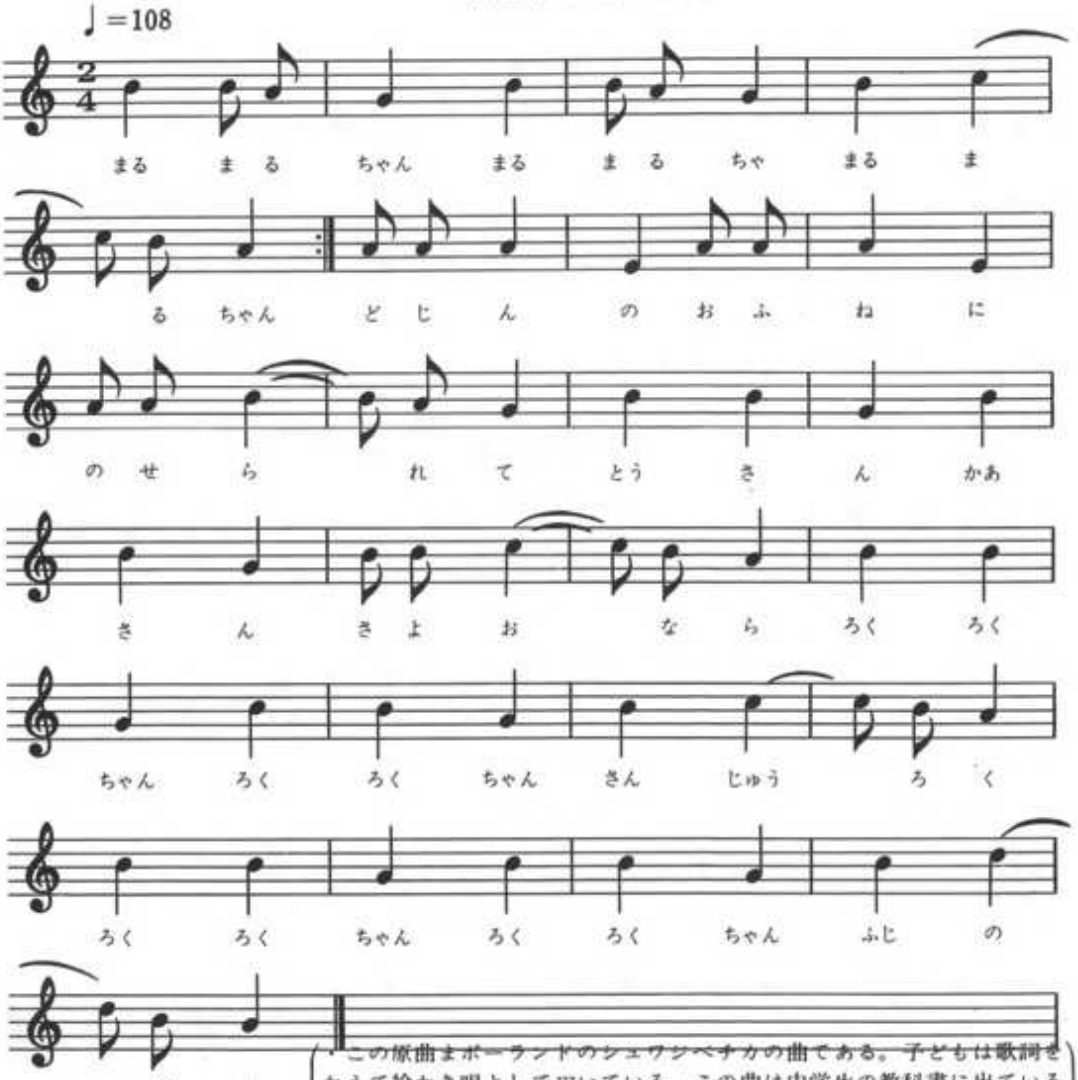
さんちゃんが（絵かき唄）





丸ちゃん（絵書唄）

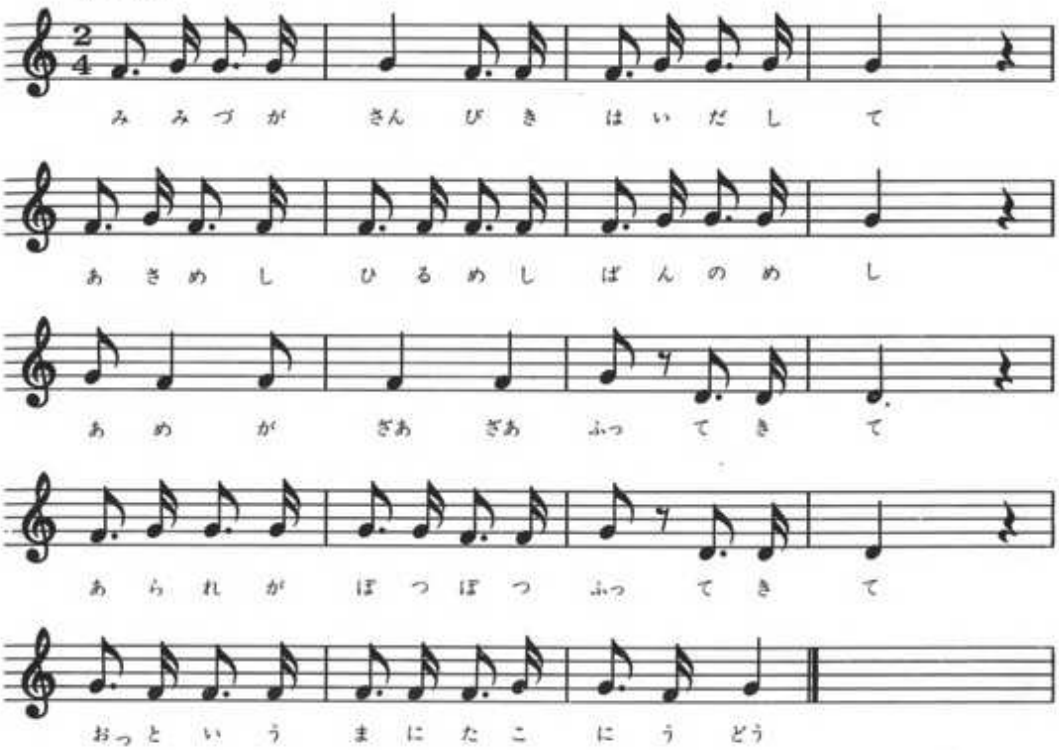
♩=108



（この原曲はポーランドのシュワンベチカの曲である。子どもは歌詞をかえて絵かき唄として用いている。この曲は中学生の教科書に出ている曲である。）

みみずが三匹（絵書唄）

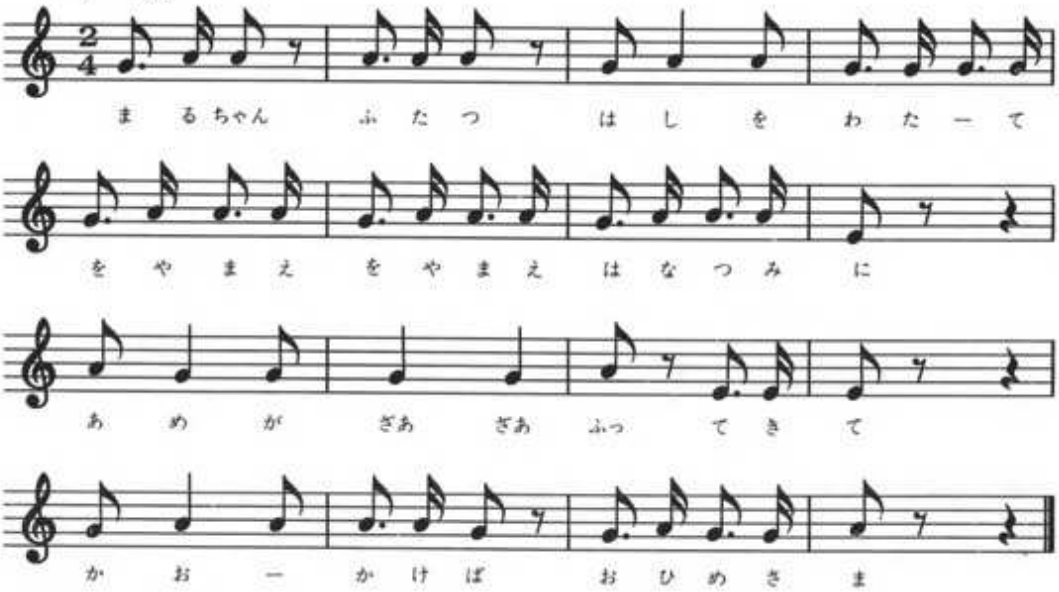
♩=104



（・日常生活をたくみに、おり込んでうたっている。）

丸ちゃん（絵書唄）

♩=100



にいちゃん（絵書唄）

♩=108

に い ちゃ ん が さ ん え ん も ら っ て

ま め か っ て お く ち を とん が らし て

あ ひ る の こ

（・絵かき唄の音符はほとんど♪♪が多い。この曲もその典形的なものである。
・♪♪はリズミックで絵を書きやすいためであろう。）

くうちゃんしいちゃん（絵書唄）

♩=104

く う ちゃん し い ちゃん ベッ ト ル し い ちゃん

お しゃ れ な ね ー ちゃん パー マ ネ ン ト

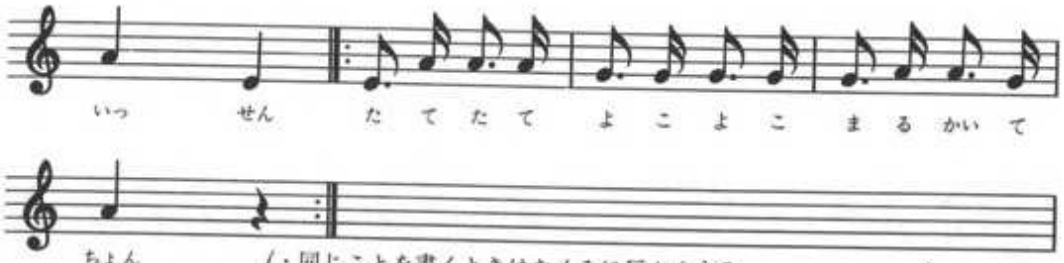
お ー き な リ ボ ン が じゅっ せん で
ち ー さ な リ ボ ン が じゅっ せん で

ま がっ た は り が れ ー え ん で

た て た て よ こ よ こ ま る かい て ちょん

3回反ぶく

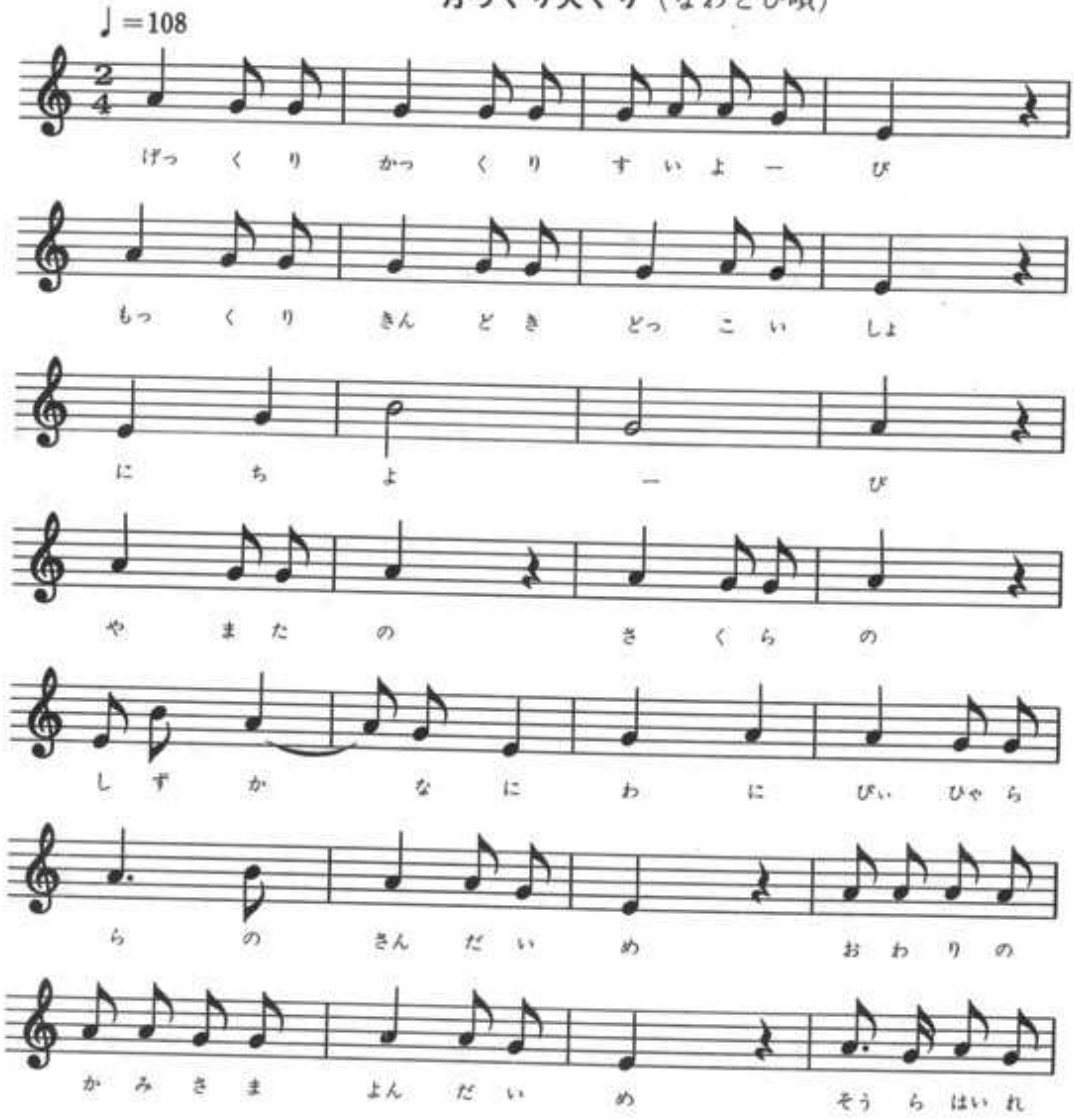
み か づ きちゃん き れ い な ス カ ア ト ひゃ く じゅ う

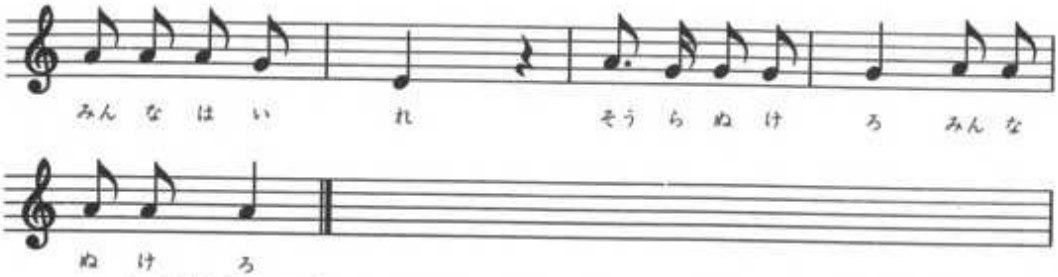


（・同じことを書くときはたくみに反ぶくする。
・絵かき唄ほど子どもの自由さの表現をするものは他にない。）

東小学校児童のわらべ唄

月っくり火くり（なわとび唄）

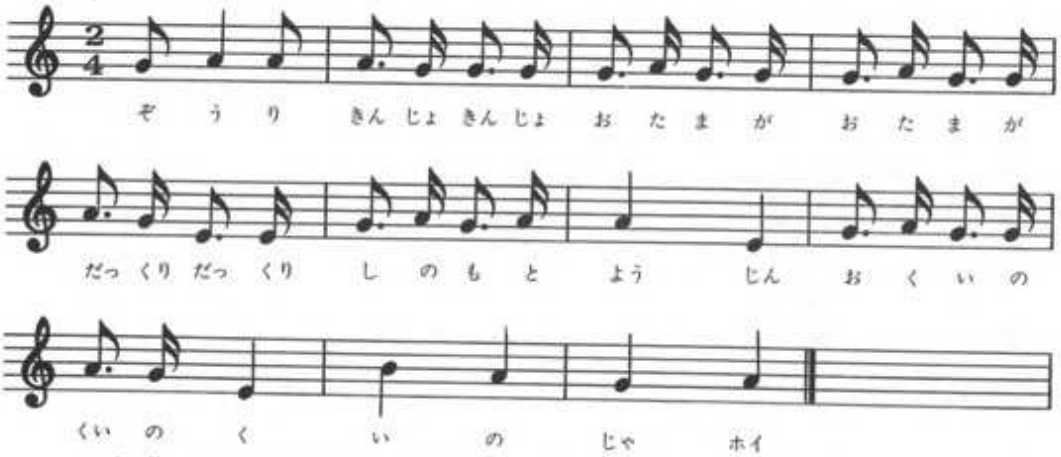




（・田代小学校で採集したものとは少しちがう。音の高さ、リズム、特に歌詞で「お前の神様」と田代では歌っているが、東小では「おわりの神様」と歌っている。同じ附帯目的をもった唄でも地域によりこのように異なっている。わらべ唄の浮動性を知るのに大切なものだ）

ぞうりきんじょ（くつかくし唄）

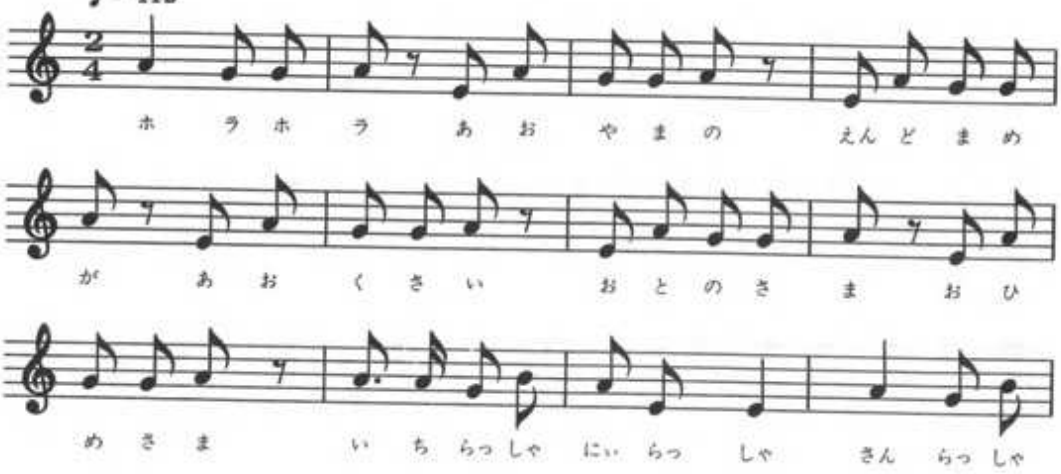
♩=108～112

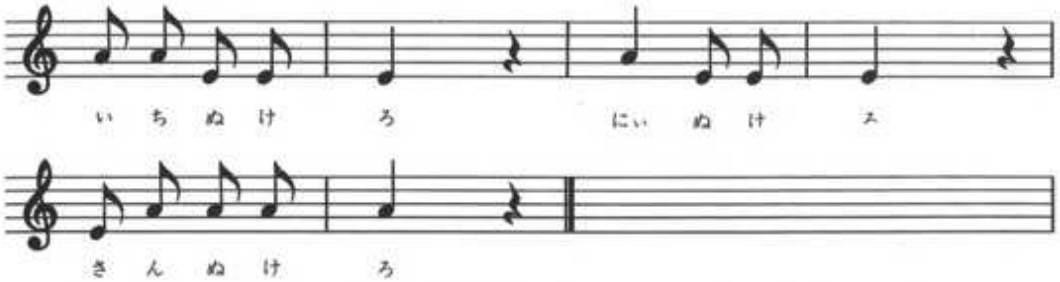


（・昔はこの唄に合わせて、ぞうりで行ったのであるが現在は運動ぐつで行っている。
・この地域には昔の遊びが、そしてわらべ唄がそのまま残っているのが特徴である。
・「火の用心」を「しのもと用心」と方言をつかっているのが特徴。）

青山（なわとび唄）

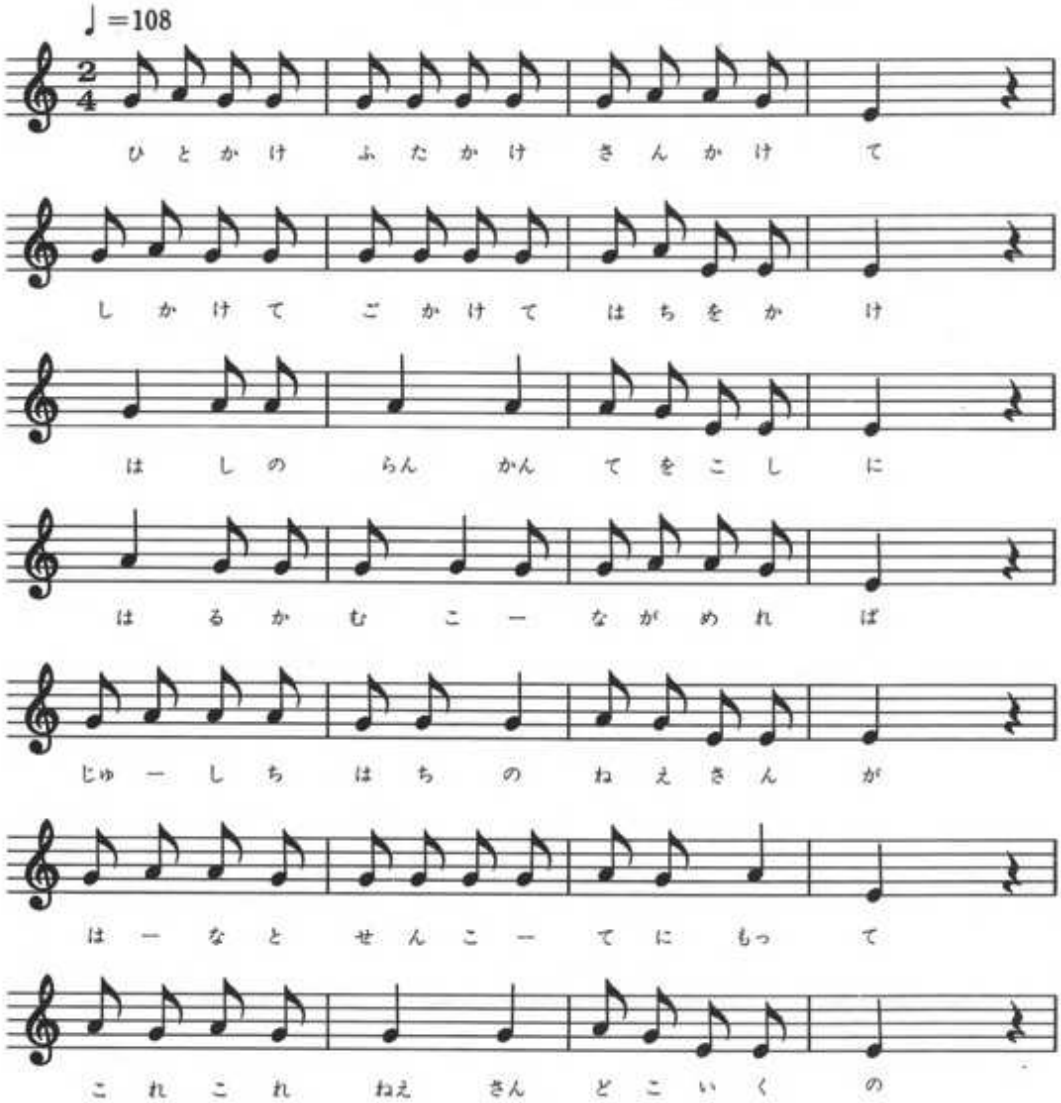
♩=112

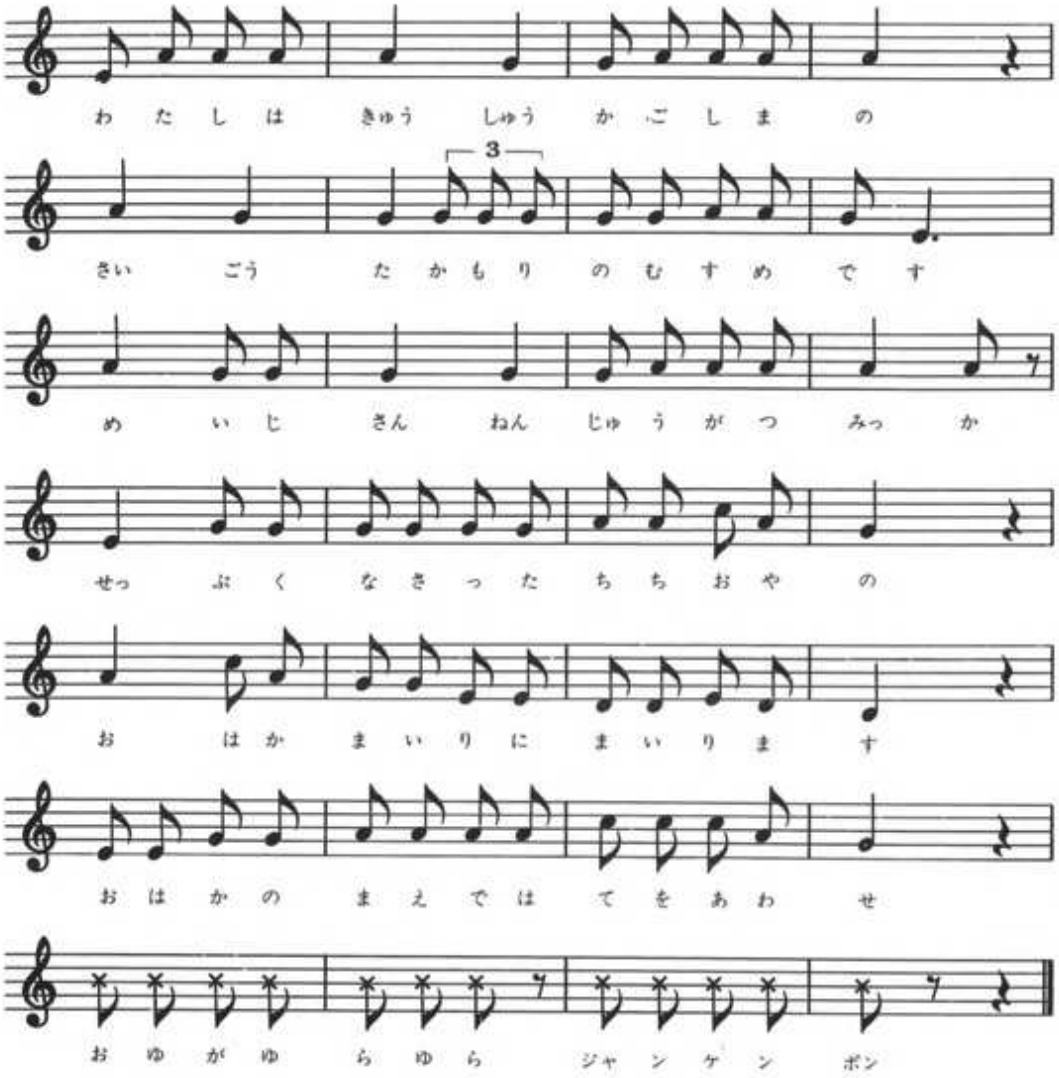




（・歌詞からみて少々古い歌であろう。老人からは採集できなかった。）

ひとかけふたかけ（身体表現唄）

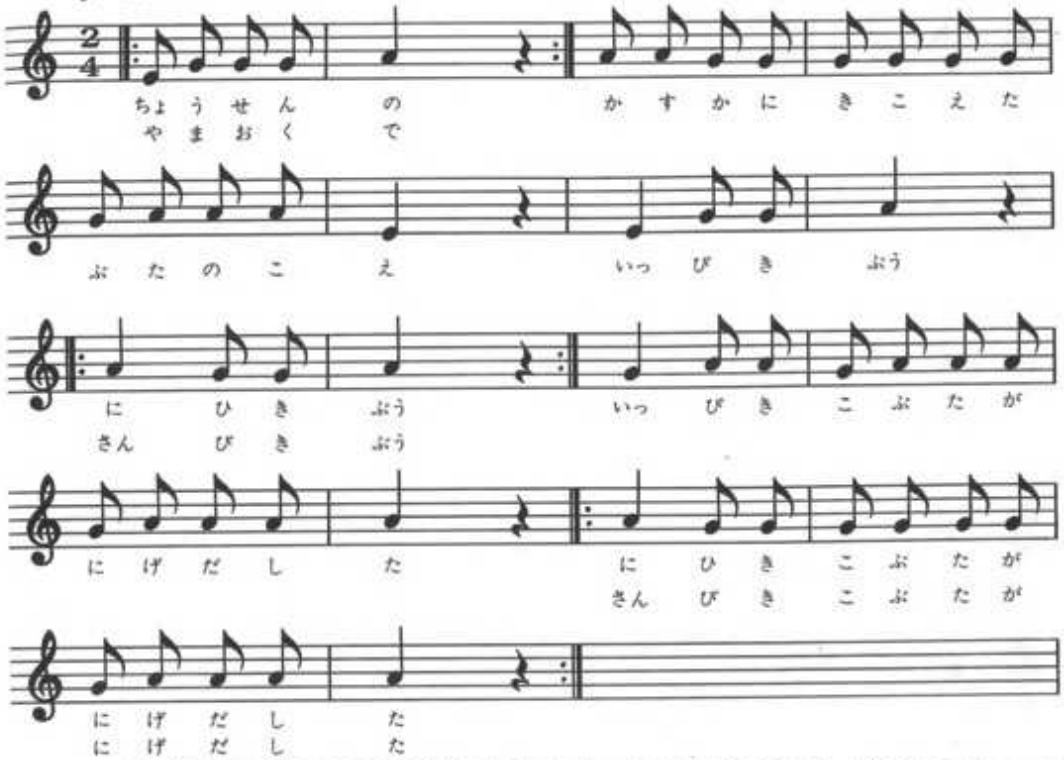




・田代地区の1かけ2かけと同じ歌詞。しかし曲はちがう。途中せっぷくなされた処から田代地区のものに似てくる。しかし○○おゆがゆらゆらジャンケンポンは「となえで」である。
・田代地区では一番はじめはこの曲でうたっている。同じ曲でもこのように変ってくる。
・遊びの目的には変りなく、身体表現が変る。

朝鮮の（なわとび唄）

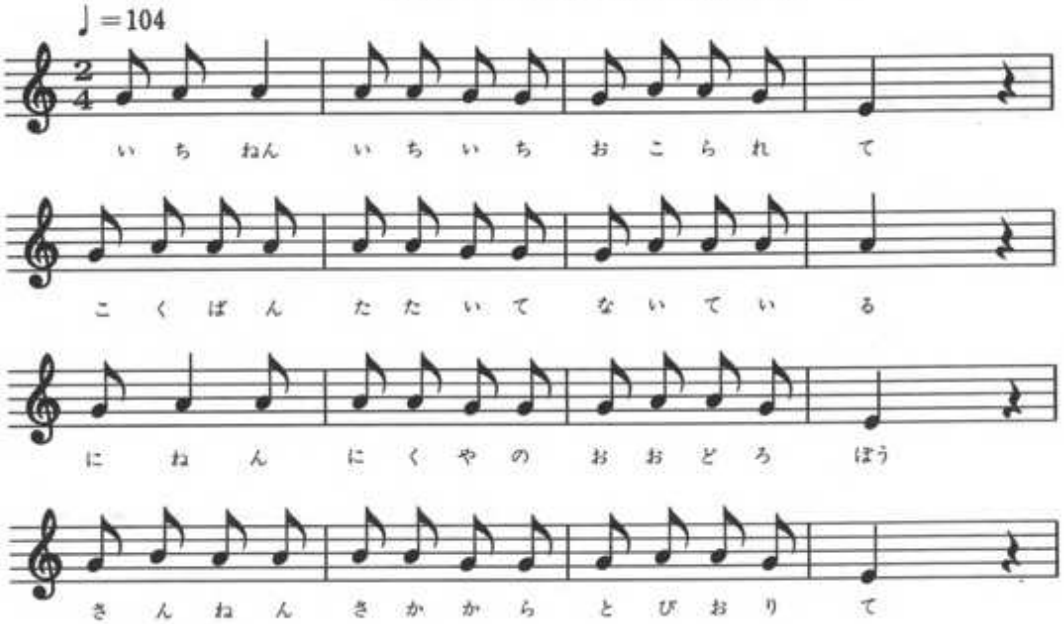
♩=108

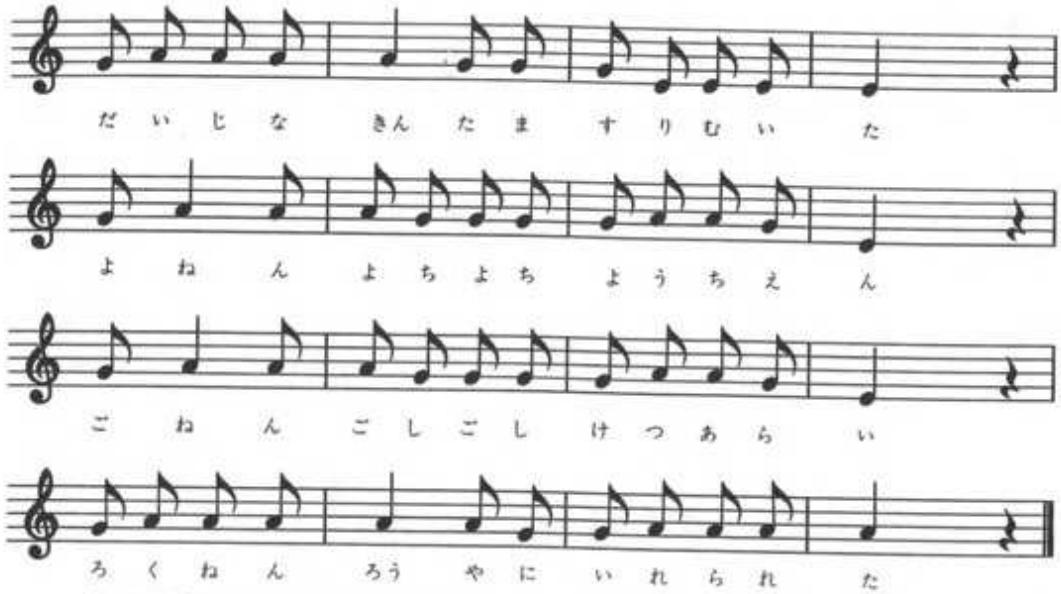


（・田代小の子どものうたう満州のと似ている。なわとびうたである。比較してみると、類似しているところとまったく別な部分とある。一つの曲のよい部分は受け入れ、他の部分はあみ出すか、つけ加えるわらべ唄の創作過程がさぐれる。）

1年いちいち怒られて（数え唄）

♩=104

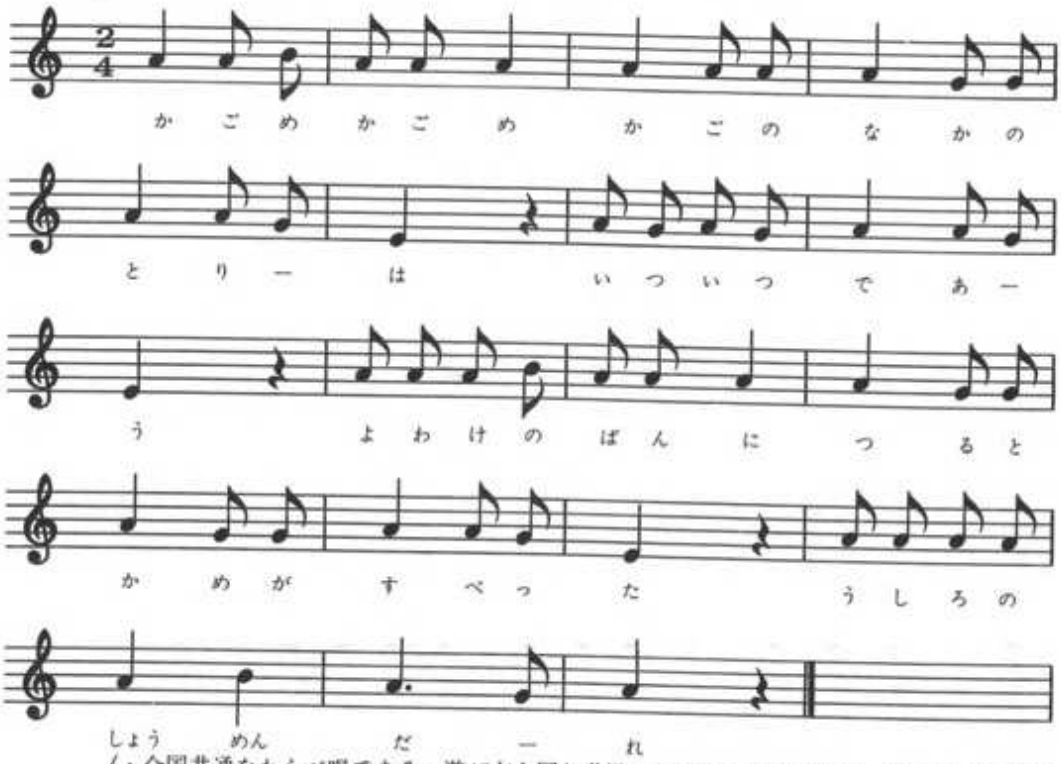




（・小学各学年を低学年から歌ったユーモラスな悪態歌。採集の折りにも子どもはうるおいをもって歌ってくれた。カントクの先生がいるとこんな歌はでない。）

♩＝108

かごめかごめ（鬼とり唄）



（・全国共通なわらべ唄である。遊び方も同じ草深い山の子どもも現在は、全国同じ遊びのわらべ唄を用いる。狀報時代のわらべ唄の伝承過程が理解できる。）

あんたがたどこさ（まりつき唄）

♩=100

あんたがたどこさ　ひごさ　ひごどこ

さくまもとさ　くまもとどこさ

せんばさ　せんばや　まにはた　ぬきがをっ

てさそれを　りょーし　がてーぼ　でうってさ

にてさ　やいてさ　くってさ　それをこ

のはでちょい　とかぶせ

（・田代小のものとの比較リズムのちがいがわかる。）

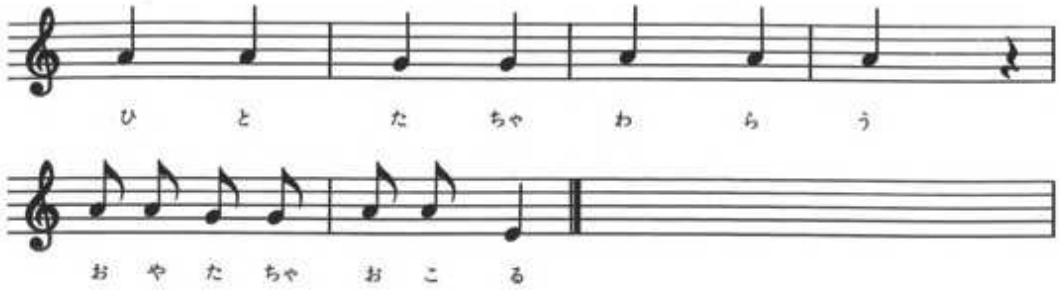
子どもと子どもで（指あそび唄）

♩=104

こどもと　こどもが　けんかして

くすりや　さんが　とめたけど

なかなか　なかなか　とまらない



かがつくから（悪口唄）

♩=116

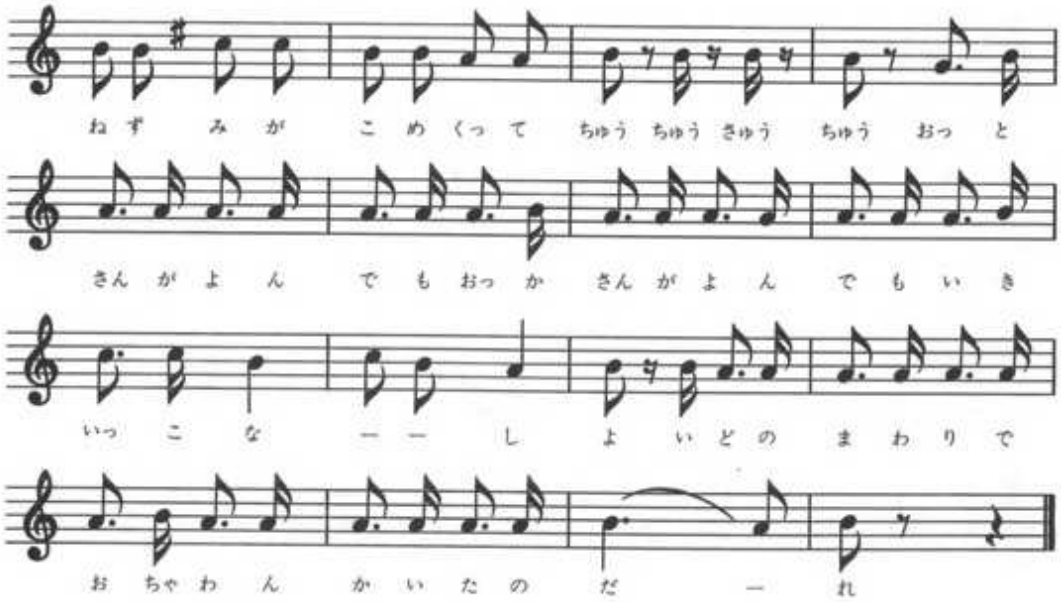
1.2 か が つ く か ら か ん じ う ろう
3 や が つ く か ら や ん じ う ろう
か ぜ きん た ま に か り ぶ く ろ
や り きん た ま に や り ぶ く ろ
かっ た か かっ た か な ん か っ た
やっ た か やっ た か な ん や っ た

（・一番歌詞を二回歌い、二番歌詞を一回うたう。反ぶく形式の悪口うたである。
・男の子の勇ましい歌である。）

ずいずいずっころばし（指遊び唄）

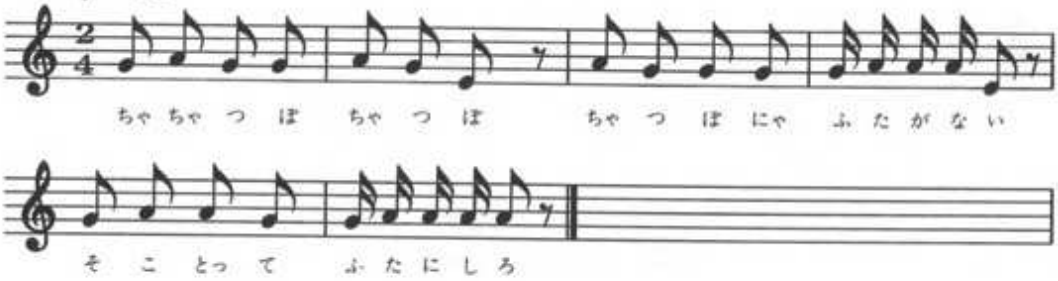
♩=108

ず い ず い ずっ こ ろ ば し ご ま み そ ずい
ちゃ つ ぼ に お わ れ て どっ ぴん しゃん ぬ け
た ら ど ん ど こ しょ た わ ら の



ちゃちゃつぼ（指遊び唄）

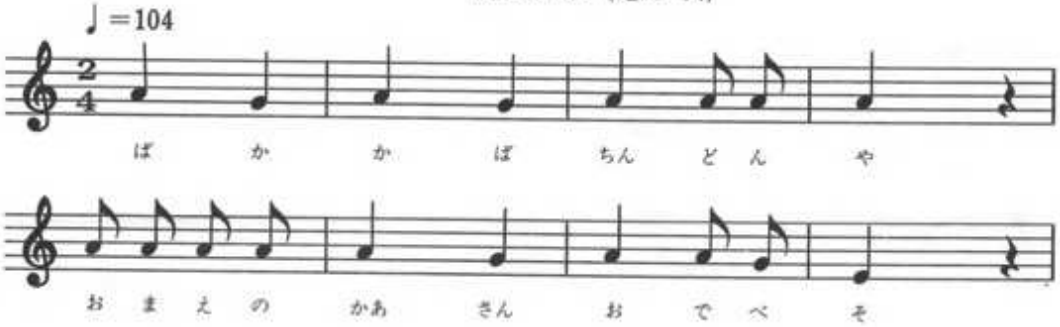
♩=112



（・全国的に歌われているわらべ唄である。子どもたちにはゲームの唄といった方がわかりやすいか知れない。）

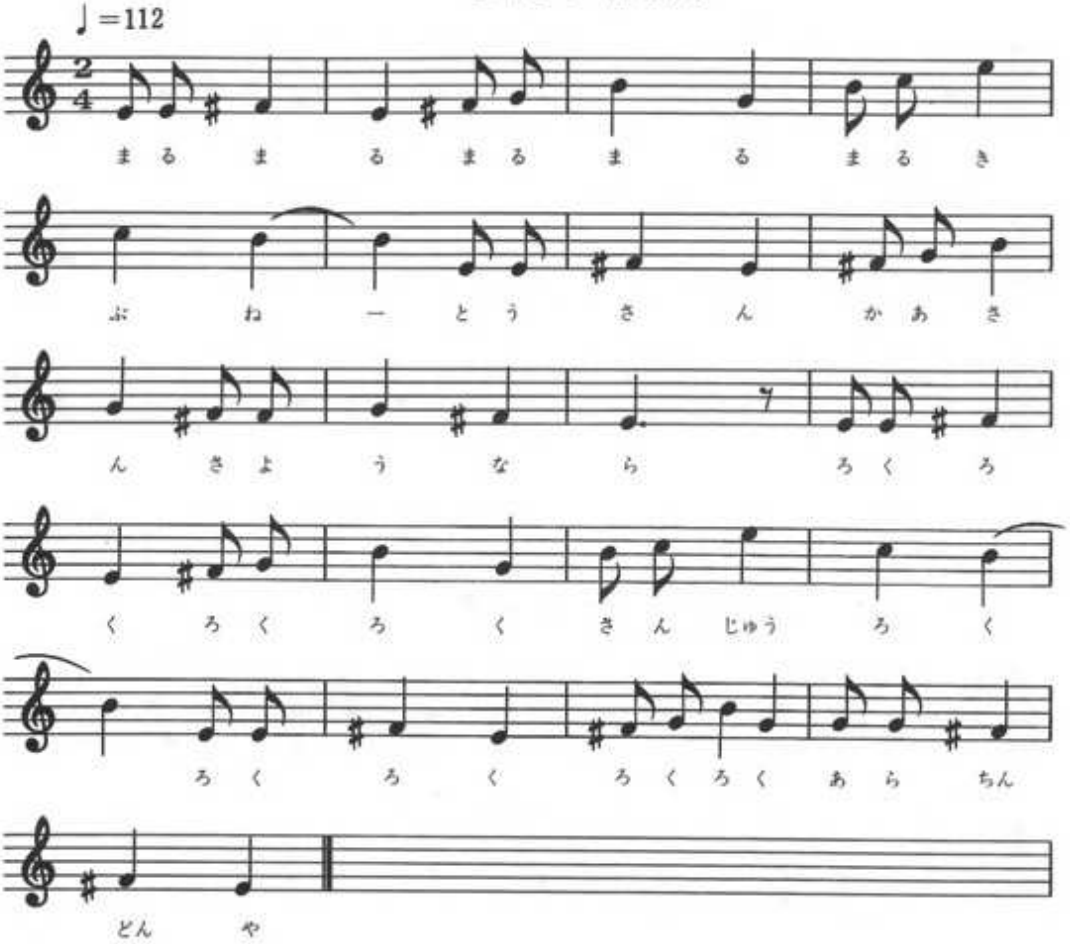
ばかかば（悪口唄）

♩=104



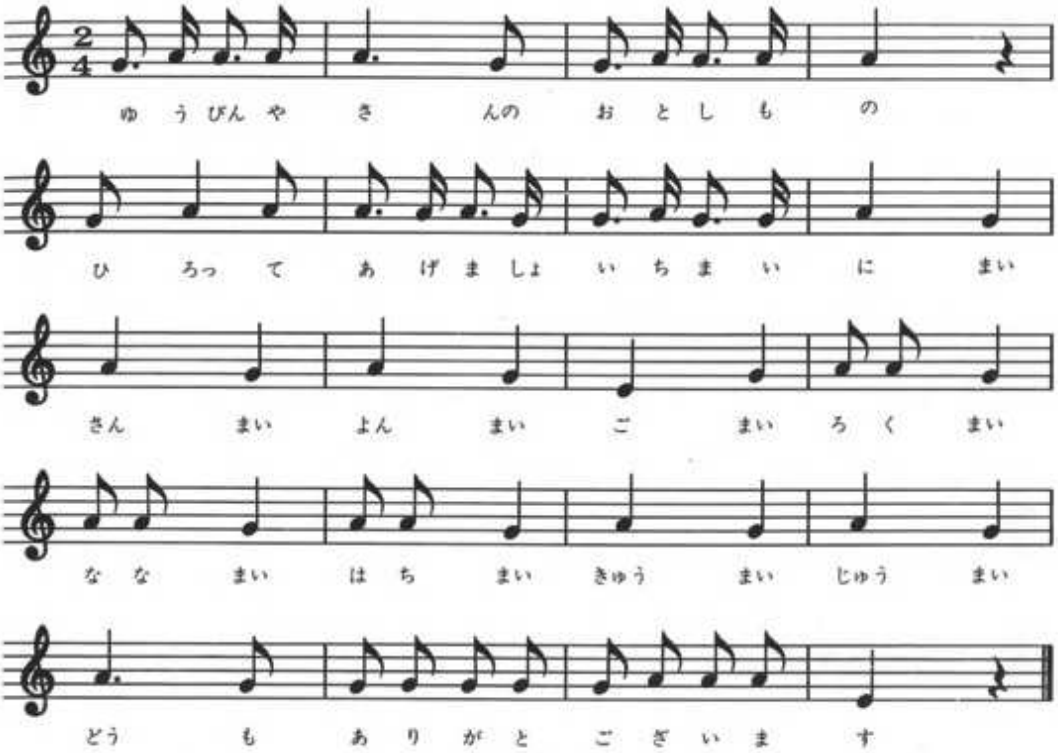
（・「ちんどんや」の$\dot{ラ}$の音が五線に記譜したものより少々高い。）

まるまる（絵書唄）



♩=96～104

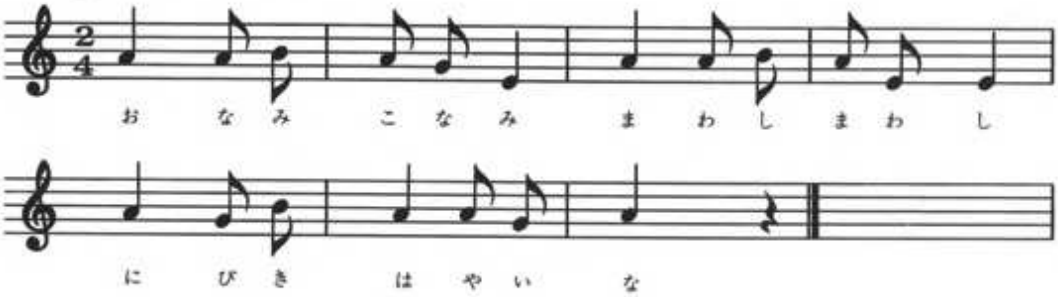
ゆうびんやさんの（なわとび唄）



（・県下各地では「ひろってちょうだい」と歌うが、ここではひろってあげましょと歌っている。
・最後に「どうもありがとございます」とていねいに歌っているのがおもしろい。）

♩=88

大波小波



民家

はじめに

今回本調査を実施した民家は、第一表に上げた二十七棟である。調査にあたって深井寛光、唐沢雅夫、土屋俊忠、黒岩親、黒岩勇松、唐沢明彦の各氏に案内と援助をいただいた。農繁多忙中にもかかわらず、家の隅々まで快く見せていただいた各家の持主に心から感謝の意を表したい。（桑原　稔）

第1表，地域別による調査民家の棟数

地名	調査民家の所有者名	棟数
今井	西窪盛司	1
西窪	黒岩平治	1
三原	黒岩幸文・黒岩重行	2
大前	滝沢千城・黒岩伝五郎・黒岩源蔵	3
鎌原	佐藤信一・山崎国正・橋爪一	3
干俣	干川英吉・市場忠一郎・宮崎友次・干川なか 干川源治・干川浜吉・土屋長太郎	7
田代	干川進・松本喜重	2
大笹	岩上武・土屋源三郎・小林重太郎・中島守一	4
門貝	山口伯明・佐藤茂・滝沢孝男・黒岩房吉	4
合計		27

一、調査対象民家の選定について

調査対象民家は嬬恋村十一大字のうちから左記の基準により一大字当り五棟平均を村教委が選ぶ。村教委が選んだ対象民家に対し、本調査の前に簡単な予備調査を実施し、全体で約二十棟位の民家を選定して本調査における調査対象民家とする予定であった。

調査対象民家の選定基準

調査対象民家の候補は主として江戸時代とそれ以前に建てられた農家・町家・宿場の建築・神官・武士の家など広範囲にわたる。これらのうちから優先的に次のような民家を選ぶ。

(ア) 古い家……大字程度の範囲についてどの家が古いかについては、地元の老人の中に詳しい人が多い。その場合建築の古さと家柄の古さを混同しないように注意する。古い家をみつける場合の特徴を次に記す。

①柱を手斧で仕上げている家。②壁が多くて薄暗い家。③家全体が低く軒も低く葺き下している家。④じゃまな所に柱がある家。

(イ) 建築年代の明らかな家……単なる言い伝えだけでなく、建てられた年代を示す資料（棟札・黒書・古図・普請帳など）が存在する家。しかしこのような家はまれにしか存在しないから明治時代の建築でも調査対象に入れる。

(ウ) 保存状態のよい家……家全体について建設当時の様子が良くしのばれ、改造の少ない家は意匠に統一があって美しいと同時に史料としての価値も高い。

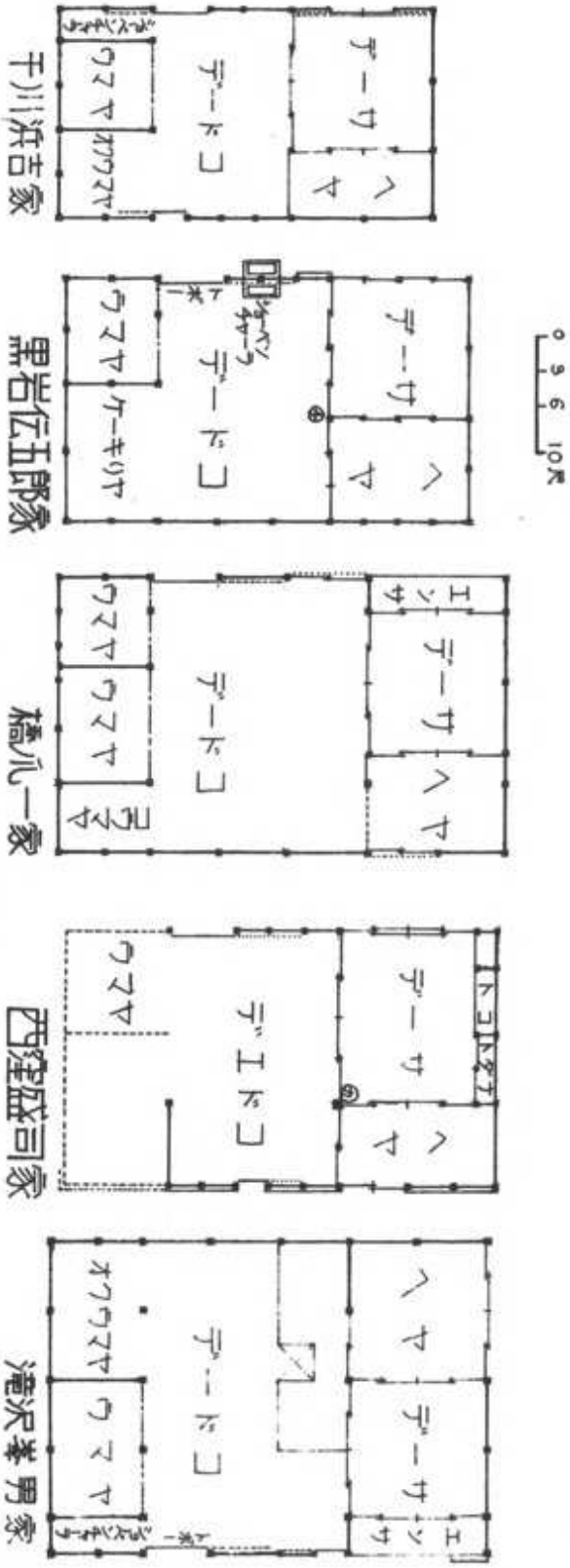
(エ) 質がよく美しい家……名主や大きな商人、土地の旧家などの建築は一般のものにくらべ材質がよく、ていねいにつくられている。

また、意匠も洗練され美しいことが多い。調査対象があまり立派な家のみに偏っても困るが、このような遺構があったら比較的新しいものでも調査対象の候補としてあげてほしい。

以上のような「選定基準」を村数委に配布し、予備調査の対象民家の選定を依頼した。その結果、予備調査の対象となったのは四十七棟であり、この中から類似したものや、改造が激しく復原の困難なもの等を除外し、第一表に掲げた二十七棟を本調査対象民家としたのである。

二、村内における古民家の現況と調査遺構の分類

このたび村内全地区を調べて感じたことは当地区が県境の山地であるにもかかわらず、幕末以前に建築されたと思われる民家は極めて少なかったことである。その原因の一つは、村のほぼ中央を国道一四四号線



図－1，2 間取型（復原平面図）

が横断し、高原キャベツの収入が農家経済を豊かにしていることが考えられる。また、北部の門貝・干俣地区の他は天明三年の浅間山爆発の際、膨大な流出熔岩に埋まってしまったといういい伝えがあるとうりで、古い家でもこの大爆発直後のものである。従って、天明三年以前の建築と思われる古い民家は門貝に一棟（山口伯明家）、干俣に三棟（土屋長太郎家・干川なか家・市場忠一郎家）発見されただけであった。干俣の市場忠一郎家は梁に打ちつけられていた棟札により、元文六年の建築であることが明らかになって、県内で棟札の存在する民家では最も古いものであることが確認できた。

村内の近世民家は復原平面における室数から次のように大別される。

(1) 二間取型
(2) 三間取型
(3) 喰違四間取型
(4) 多間取型

三、二間取型の民家

いずれも幕末頃の建築であると伝えられるもので、比較的建築年代の新しい遺構である。西窪盛司家は土蔵造であるが、この地方にみられる土蔵造りの中では最も軒高が低く、二階を利用できるように、考えられていなかった（後掲の写真参照）。このようなところから当家はこの地方の土蔵造りの初期的形態を今日に伝える遺構として貴重である。建築年代は当主（七十才）の二代前の人である盛泉（安政二年四月生）が数え年二才の時火災にあい、その後ただちに建ったものであると伝えるところから、安政三・四年頃の建築ということになる。

二間取型遺構の規模は梁行三間～四・五間、桁行五・五間～六・五間の小規模民家であるが、いずれも「デードコ」には「ウマヤ」が設けられている。

民家は単純機能から複雑機能へと展開し発展したものと考えられているが、このような観点から考察すれば、当地方の二間取型遺構は、どれも建築年代こそそう古くはないが、発達史的に考察する時、次の三間取型よりも古い民家の平面形式を伝えているものと考えられる。

四、三間取型

梁行三・五間～四間、桁行七・五間～八・五間の規模をもち、桁行のほぼ中央で二分し片側を土間として、ここを「デードコ」と呼んでいる。床上部は表側の「デードコ」寄りに四～五坪程度の正方形あるいは矩形の「チャノマ」を設け、その隣に表側に面する室を配し、ここを「デーサ」と呼ぶ。そして、「チャノマ」と「デーサ」の裏側は一室になった奥行一間程度の細長い室が設けられ、ここを「ヘヤ」と呼んでいる（図12、参照）。「ヘヤ」は家族の寝室に用いられた室であるといわれているが、このような細長い寝室をもつ例は県内で他にみられないめずらしい形式である。

このような三間取型で、最も古い遺構と考えられるものが、土屋長太郎家であり、建築年代は十八世紀初期頃と推定される。

干川なか家は名主をしたと伝えられる家で、家号を「久星」という。表側の開口部は閉鎖性が強く、土屋長太郎家とほぼ同じ年代頃の建築と思われる。

干川源治家は文化十年の年号入絵図面が残されており、復原図も絵図面の部屋割と一致するところから、その頃建築されたものとみてよい。したがって、当家は一九世紀初期の建築ということになる。

山口伯明家は干川源治家よりも古いと考えられ、十八世紀中期頃の建築であろうと推定する。

黒岩房吉家は現在総二階となっているが、これは当初からでなく、後の改造によるものである。復原すると当初は平家で三間取型となるが、

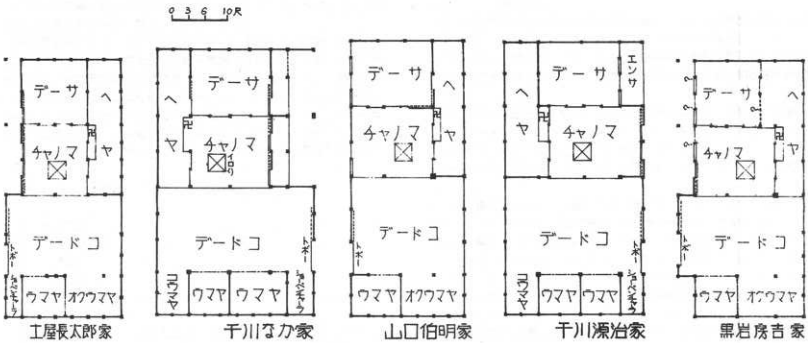


図-2, 3間取型（復原平面図）

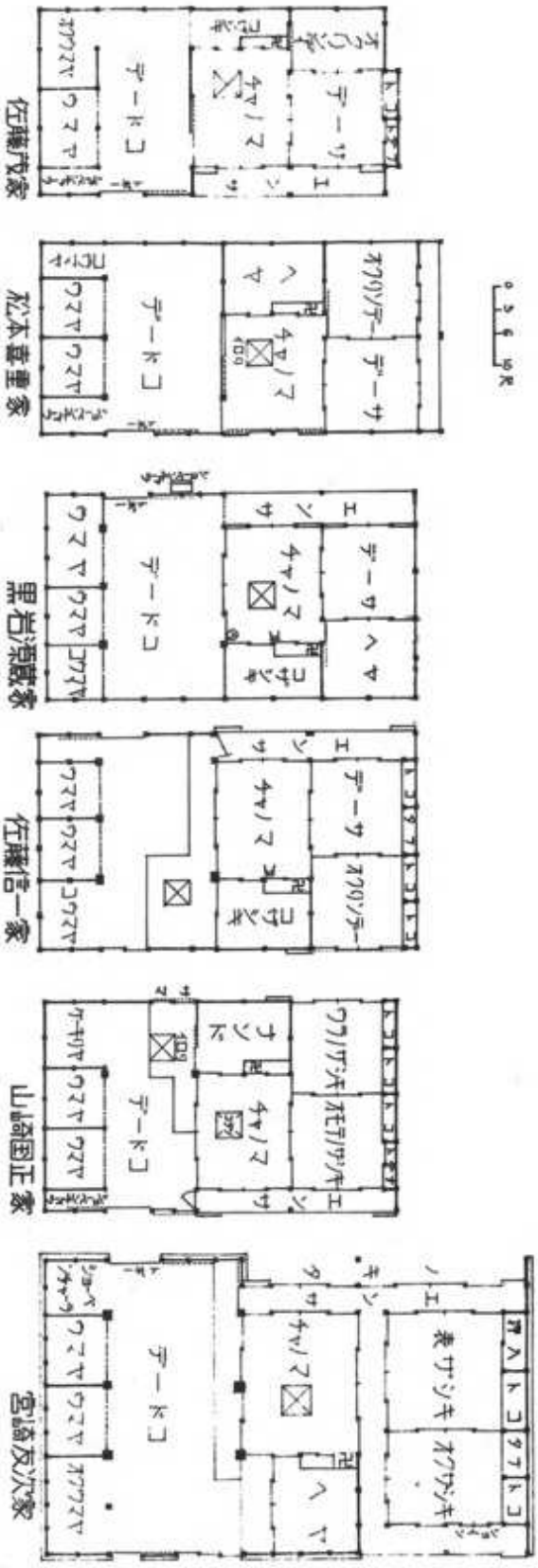
表側の柱間装置や内部の間仕切に復原の困難な個所が数個所ある。

三間取型民家は、図―2に掲げた五棟しか発見することができなかったが、黒岩房吉家を除く四棟は現在も寄棟造りであり、軒が低い。そして、復原するとどの遺構にも「トコ」や天井はなく、柱間装置は次の喰違四間取型よりも閉鎖的である。このようなところから、三間取型は喰違四間取型を遡った民家の平面形式であると考えられる。「デードコ」と床上境の柱仕上げは土屋長太郎家・山口伯明家・黒岩房吉家が手斧（チョーナ）、干川なか家・干川源治家が手斧と鉋の併用である。

五、喰違四間取型

梁行四～六間、桁行七・五間～十・五間の規模で、古い遺構は寄棟造りになるが、軒高はどれも三間取型の遺構より高くなっている。

佐藤茂家・松本喜重家・黒岩源蔵家は喰違四間取型の中では古い遺構と思われるもので、各室に天井がなく、屋根裏の利用も考えられていない。しかし、「エンサ」が設けられ、表側の開口部は差鴨居を使用し、中


佐藤茂家
松本喜重家
黒岩源蔵家
佐藤信一家
山崎国正家
宮崎友次家
デードコ
ウマヤ
ナヤノマ
ヘヤ
オクリデー
デーサ
エンサ
ウラリデー
オモテリデー
ナンド
ヒロマ
ケヤリヤ
ヒロバ
ヒロ
ヒロ
ヒロ

柱を抜き取っている例が多い。

黒岩源蔵家は天明三年の浅間山大爆発で、家が熔岩に埋まってしまい、その上に現在の家を建てたと言い伝えられていたが、近年になって家の前に道路をつくる際、屋敷と路面との差が大きくなったため、現在の家の下の土を一・五メートル程けずり取った。その時黒く焦げ、熔岩に押しつぶされた家の木材が多数出て来たということである。したがって、現存の黒岩源蔵家は天明三・四年頃の建築と推定する。

佐藤茂家・松本喜重家は建築様式が黒岩源蔵家と類似しているところから、同家と同年代頃の建築であろうと推察する。ちなみに、「デードコ」と床上境の柱仕上げは佐藤茂家・松本喜重家・黒岩源蔵家とも手斧と鉋の併用である。佐藤茂家は「デーサ」に奥行の浅い（奥行一・六尺）「トコ」が設けられているが、松本喜重家・黒岩源蔵家には「トコ」がない。故にこの地方の一般農家の「デーサ」に「トコ」が設けられはじまるのは十八世紀末期頃のことであると考えられる。

佐藤信一家は草葺総二階、山崎国正家もやはり草葺総二階の造りであるが、裏側と東側は屋根が低く下がっている。宮崎友次家は板葺切妻土蔵造り、総二階の形式であり、以上三棟の建築年代は一九世紀中期以降のものであろう。この三棟の「デードコ」と床上境の柱仕上げは鉋であり、表側には必ず「エンサ」が付き、「デーサ」とその裏側の室にもトコやタナが設けられるのが新しい特徴である。

喰違四間取型は主に名主階級より下の平均的農家階層の遺構と考えられ、一八世紀末期以降の民家に多くみられる形式である。

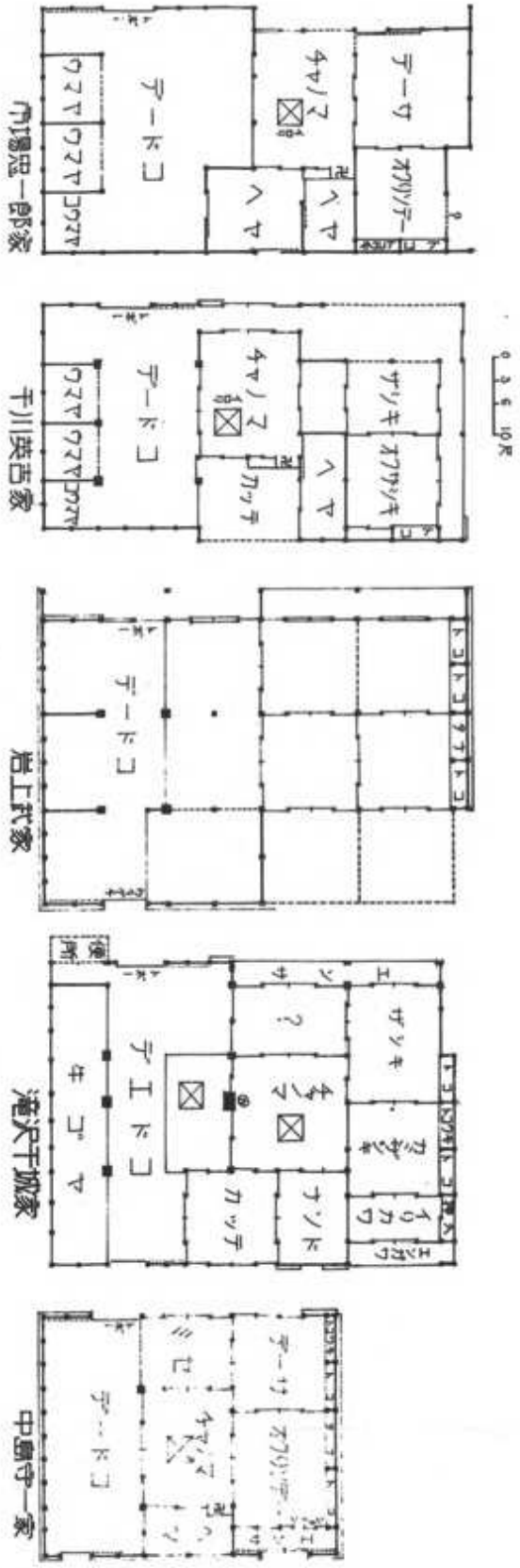
六、多間取型

市場忠一郎家は小屋梁に釘打ちされていた棟札によって元文六年三月の建築であることが明らかになった。したがって、今から二百三十一年前に建築されたもので、県内の民家で棟札の存在する遺構としては最古のものである。当家は草葺寄棟造りであるが、一八世紀中頃の遺構としては比較的大規模である。その理由として、当家は先祖が名主をしていたということであり、そのために一般農家よりも規模が大きく、「オクリンデー」に「トコ」や「トコワキ」が設けられているのも、一般農家にさきがけて設備することが可能であったものと推察する。さらに、「デードコ」と床上境の柱はすべて鉋仕上げとされている。名主以下の農家の場合、前述の佐藤茂家・松本喜重家・黒岩源蔵家などの遺構が示すように一八世紀末期頃になっても、デードコと床上境の柱仕上げは、手斧と鉋の併用である。このように農家の中でも、名主階級に属する上級民家では設備においても、仕上げにおいても一般農家より一段進んでいた様子がうかがわれるところである。

市場家の平面は喰違四間取型に類似しているが、「チャノマ」の裏に「ヘヤ」を二室とり、「デードコ」側の「ヘヤ」が「デードコ」に突き出しているのが異なるところである。

千川英吉家の平面は六間取となっており、市場家において「チャノマ」を土間側に突き出した「ヘヤ」の先端まで移行し、「デーサ」と「チャノマ」の間に小部屋を設け、中央の「ヘヤ」の奥行を「オクリンデー」と同じにしたものであると考えられる。表側に復原の困難な個所があり、建築年代・役職等も不明であるが、おそらく上級の民家に属したものであると思われ、建築年代は市場家よりかなり下降するものと推察される。当家はザシキ側の妻を兜造りにし、屋根裏の利用が考えられている。蠟恋村では妻側兜造りの遺構は少なく、当家の他に戸部新栄家（田代）にみられただけであった。

岩上武家は以上の二棟よりさらに大規模で、総二階土蔵造石置切妻屋根であったが、現在の屋根はトタン葺に改められている。当家は本陣をしていた本家より分家し、脇本陣および「中屋」という屋号の宿屋をしていた家で、主屋の裏に書院付の立派な「ハナレ」があり、その長押に墨書で一茶の署名入りの落書がある。この「ハナレ」と主屋は同年頃の



図―4　多面取型（復原平面図）

建築と思われるところから、当家は一茶の没年である文政十（一八二七）年以前の一九世紀初期頃の建築であると推定する。

なお、十返舎一九著の「方言修行金草鞋序」（文政辰年四月）の大笹・大前の項に当家の店の様子が描かれており、大変興味深い。

滝沢千城家は岩上武家の主屋とほぼ同様の大規模民家であるが室の配置は異なっている。岩上武家の平面をみると、いかにも脇本陣および宿屋らしい室の配置となっているが、滝沢千城家は「カッテ」・「ナンド」・「チャノマ」の配置など千川英吉家と似通っており、本業が農家であったようすがうかがわれる。当家は屋号を「ミョウバンヤ」といい、近くでとれた明礬を一手に引き受けて、幕府に出荷していたといい伝える。「デードコ」の妻側の「ウマヤ」に相当する部分は絵図面によれば「牛午家」となっており、この「牛午家」はほとんど梁行いっぱいにとられている。故に、ここは馬でなく、牛が多数飼われている場所であり、この牛は明礬を積んだ荷車を引くために飼われていたものであろう。当家は先程の絵図面により弘化三（一八四六）年に建築されたことが明らかである。当家の造りは切妻総二階出桁造りで、屋根は石置屋根であったと思われるが、現在は瓦葺になっている。なお、当家の大黒柱は大変豪華（一、五尺×二、〇二尺）で、六合村小雨の市川久義家の大黒柱（一、

五〇尺×二、一〇尺）に次いで県下で二番目に大きなものである。

中島守一家は幕末の頃建築されたと思われる切妻総二階造りの「ミセ（店）」を持つ住宅、すなわち町家であるため、「デートコ」の幅は狭く「ウマヤ」等は設けられていない。当家は、妻側を前面道路に面する、いわゆる「町家」と異なって、平側が前面道路に面しているため、平面は「デードコ」の幅が狭く「ウマヤ」がないこと以外は、一般農家の間取と大差ない造りとなっている。現在、屋根は鉄板で葺かれ、二階上ほぼ中央部に三階を設けているが、三階部分は後補のもので、二階の屋根も元は石置屋根であった。当家は比較的改造が少なく、戸袋にはぶ厚い大戸が残されており、現在でも開け締めが可能で、その機能を立派に果している。

黒岩伝五郎家（２間取型）

前面屋根中央部の突き出した屋根部分は屋根裏への採光のため、後で設けられたもの。
手前の妻は切妻になっているが元は寄棟である。

千川浜吉家（２間取型）

西窪盛司家（２間取型）

土蔵造りの中では最も軒高が低く、土蔵造りの初期的形態がしのばれる。
手前妻側の下屋は後補のもの。

橋爪一家（２間取型）

土屋長太郎家（３間取型）

滝沢峯男家（２間取型）

千川源治家（3間取型）

土屋長太郎家

「トボー」より「デードコ」をみる。左側の板張部分は後補のもの。右側には「ウマヤ」がみえる。

黒岩房吉家（3間取型）

元は平家であったと思われるが、中古に大改造し2階とする。主要は個所には古い柱がよく残っている。

千川なか家（3間取型）

佐藤茂家（喰違4間取型）

喰違4間取型としては古い遺構で外観など3間取型遺構と変らない。

山口伯明家（3間取型）

黒岩源蔵家

中央の突き上げ屋根は後補のもの。

佐藤　茂家

「ヂードコ」奥より「トボー」をみる。
現在では「トボー」の大戸が残っている家は少ない。

黒岩源蔵家

「ヂードコ」奥より「トボー」(大戸をしめたところ)をみる。大戸の中のくぐり戸が当家のものは大きくできている。左側は「ウマヤ」だが現在は牛が飼われている。

佐藤　茂家

「チャノマ」の表より奥をみる。「チャノマ」の上は吹き抜けとなっており、天井が張られていない。奥の右上部に神棚がみえる。この神棚の下が仏壇になる。

佐藤信一家（喰違4間取型）

松本喜重家（喰違4間取型）

宮崎友次家（喰違４間取型）
土蔵造総２階

佐藤信一家２階
総２階であるため広々と造られている。
さらに屋根裏（３階）も利用できるように考えられている。

市場忠一郎家（多間取型）
棟札の存在する民家では県下で一番古い遺構である。

佐藤信一家
「チャノマ」の表側より奥をみる。「チャノマ」の奥には「オクリンデー」に寄った方に「トダナ」が設けられ、その一部が仏壇になっている。仏壇の上に「チャノマ」幅いっぱいに棚をつくり神棚としている。

市場忠一郎家の棟札
「于時元文六辛酉三月吉□」と記されている。

山崎国正家（喰違４間取型）

岩上武家（多間取型）
屋根および前面のヒサシはトタン葺になっているが元は板葺の石置屋根であった。

千川英吉家（多間取型）
片側（ザシキ側）が「兜造り」になっている。

岩上武家の「ハナル」
主屋の裏側にあり、ていねいに造られており、立派な「出書院」と「トコ」「チガイダナ」が設けられている。

千川英吉家の「ウマヤ」
現在は牛が飼われている。

岩上武家の「ハナレ」の長押に落書されている一茶の署名入墨書

千川英吉家
「チャノマ」の表より奥をみる。

黒 岩 平 治 家

滝沢千城家（多間取型）

千 川　進 家

「前兜造り」の豪華は名主の家であるが、土間側が大改造され店舗が設けられている。
「前兜造り」の形式は村内でめずらしく当家以外にみられなかった。

滝沢千城家の豪華な大黒柱
県で2番目に大きなもの。

小林重太郎家

中島守一家（多間取型）
3階は後補のもの。

滝沢せい家（門貝）

屋根の中央に3階にしては小さいが、換気ヤグラにしては大きい突出部があり、興味を引いたので撮影した。内部調査をしていないのでこの部分が当初からのものか後補のものか不明。

黒岩重行家

戸部新栄家（田代）

「妻側兜造り」でこの地方ではめずらしい造りである。

黒岩重行家

出桁下の扇形は装飾的趣向があって興味を引く。当家の他にもこのようなデザインを持つ家が数軒みられた。

土屋源三郎家

普請帳により明治9年に建築されたことがわかる。梁行8.5間、桁行13.5間の大規模な家であるが、内部は未完成な室が多数ある。

黒岩幸文家

内部の調査ができなかったので3階部分は当初のものか後補のものか不明。

有形民俗資料

はじめに

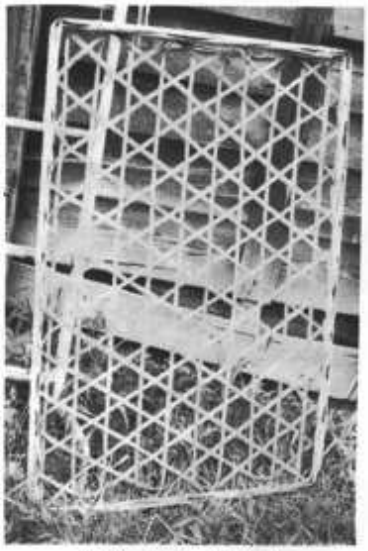
「民具」の標題のもとに有形民俗資料をまとめるようになったのは、昭和四十三年度の白沢村民俗調査（報告書第十一集）からであるが、民具調査を主体としたものでなく、総合調査の一部として記録されたものをまとめるため、調査、記録はわずかであり、対象となる有形民俗資料も限られたものであったのがこれまでの例である。

今回の調査もまた例外でなく、結果としてまとめたものの中で嬬恋村の特色を示すものとしては、ハバキ、サシモノ、トコトン（箱ぶるい）、いもの粉おろし機、サシマワシ等を除いては県下の一般的な姿を示すものである。しかし、ハバキやケンデー（みの）、イズミ（ツグラという名でも知られている）、千歯こきなどにみられるように、隣接の信州方面とのつながりが深く、他方では、いもの粉おろし機、サシモノのように、生活の中から生まれたくふうも出ている。さらに鎌原所見の臼のように、ミネバリとよばれるカバの一種を材料としてつくられ、杵もまたシナの木にナラの柄をつけたり、ヤマッカ（ヤマクワ）の木にハギの柄（マユミの柄もある）をつけてつくる杵などは、高冷地の生活を物語るものといえよう。

整理、分類は次のようにした。

一、生産用具
二、運搬用具
三、日常家庭用具
四、その他

きわめて概括的であり、不十分なものであるが、衣・食・住をはじめ、



カイコズ（石津）
（阿部　孝撮影）

桑切り機　（下袋倉）
（阿部　孝撮影）

桑切り包丁（袋倉）
（阿部　孝撮影）

関係各項目を参照せられたい。（阪本英一）

カヤマブシ（鎌原）
（阪本英一撮影）

ヌカ焼き　モミヌカを焼き蚕に使用（今井）（阿部　孝撮影）

一、生産用具

(一) 養蚕に関するもの

養蚕は明治になってからといわれ、もとは夏蚕一回だけだった。一時は蚕種製造をやったりしたが現在は少なくなって、蚕具も整理してしまった家も多い

カヤマブシ　昭和三十四・五年ころまで使用。カヤが枯れないうちに刈っておき、冬の手間のあるときに折ってつくる。使い方は、穂の方が内側になるようにして二人が向き合って一緒にひろげ、あわさったところで使う。倒れないようにするため、ハギの棒をとっておいて凹みのところに入れて固定する。乾燥するのでよいまゆがとれたもの。（鎌原）

ヌカ焼き　養蚕では、蚕座の乾燥や消毒の意味もあってモミヌカを焼いたものを使用することは県下各地でみられるが、ヌカヤキに使用する道具もまた県下一般にこの形式のものである。もちろん市販品である。（今井）

マンガ（鎌原）（阪本英一撮影）

(二) 農耕に関するもの

マンガ　ほとんど田のなかった地区なので昭和になってから村の中の鍛治屋につくってもらったもの。柱が三本でハシゴになっているのも田が固いことを示している。（鎌原）

アゼシメ　春田の畦をたたいて固め、畦つくりをした道具。（大前）

ボウチンボウ　棒打棒とでも書くものか。大豆、小豆などをこなすときに使用するもので、ここではクルリ棒は使わない。少量のときなどはベエを使う。（大前）

ブチ　麦ぶち台、たたみ一帖の広さがある。四隅に竹・ほうの木を立ててぶつ。

脱穀機をブチと呼ぶこともある。（西窪）

千歯コキ　大正八年製のものは鉄歯が三角穂になっていて、二十一本あり、信州の形式である。（今井）

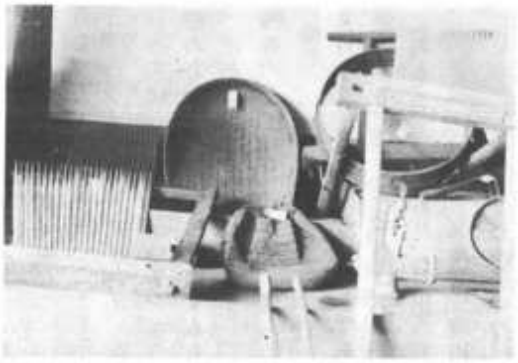
スルス　昭和の六・七年ころまではあって、モミスリをした。（鎌原）

ビッチュウ　刃　幅一七・五cm、高さ三十二cm、厚さ一・一cm、一枚

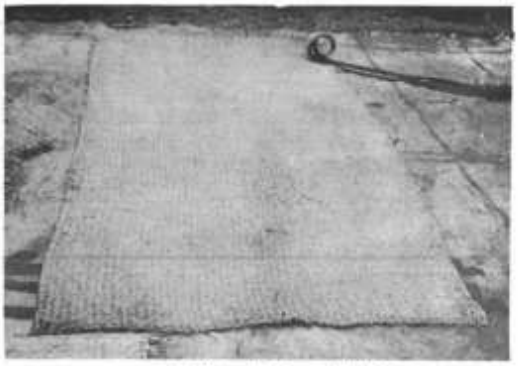
ボウチンボウ（大前）（関口正己撮影）

アゼシメ（大前）
（関口正己撮影）

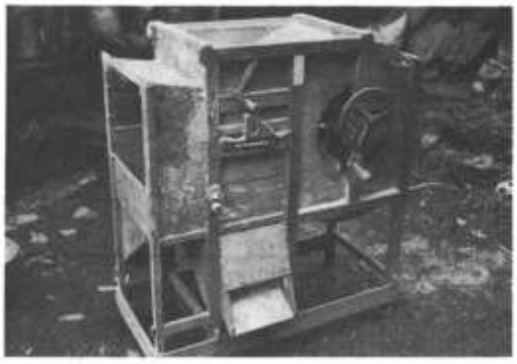
スルス　モミの木製のもみすり臼。（大前）
（関口正己撮影）



千歯コキ（左）歯が三角穂のものに大正八年の銘がある。（大前・鑢恋西小）（関口正己撮影）



ねこ（今井）（阿部　孝撮影）

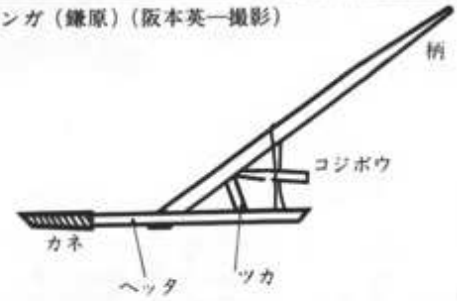


トオミ（石津）（阿部　孝撮影）

左より、ベエ（ボウチンボウでたたいた仕上げ用）マサキリ、ツルハシ、トウグワ、アラックワ、サクギリグワ、クサカキ、ビッチユウ、（大前）　（関口正己撮影）

右、ふたまたのビッチュー（千俣）らちがあかないので三本になったという。もう使用していないという。（金子緯一郎撮影）

エンガ（鎌原）（阪本英一撮影）



草かき　砥石でよくとぎ、切れるようにして使用する。（田代）（阿部　孝撮影）

くね　いんげんに使用する、他の土地より来る。依託販売（田代）（阿部　孝撮影）

アサヒキブネ（大前）（金子緯一郎撮影）

三本バシゴ（左）果樹の手入れ用のもの（大前）　（関口正己撮影）

の幅一・六cm、柄の長さ一〇六cm。（西窪）

備中鍬　二つまたと三つまたとあり、二つまたではらちがあかないので、三つまたになった。若いころは、これで田んぼを掘りおこした。二つまたは、刃先の長さ二七センチ、巾十二、五センチ、柄九七センチほど、三つまたは、刃先の長さ二八センチ、巾一九センチ、柄の長さ八七センチほどである。（干俣）

エンガ（柄鍬）

三本バシゴ　果樹の手入れをするためのもので、持ち運びに便利なこと、安定することを考えてある。枝を引きよせて作業するためにカギ枝を使用する。（大前）

アサヒキブネ　別名ネドコブネともいう。この中に麻を入れて水に浸してひいたものといい、長さ約一間余（約二m）。（大前）

くね　花いんげんに使用するくねの材料は竹や篠を使うが嬬恋村にはないので他の土地より移入されたものを購入する。（田代）

シグツ　馬のえさを入れる袋。たて糸にシナ、よこ糸にわら縄を使ってムシロ織りの道具でつくる。馬の首にかけて、歩きながら馬がえさを食べられる。（門貝）

ショイビク　袋を編んでつくり、弁当を入れたり、いろいろなものを入れて背負い歩くもの。麻でつくったのは高級品だった。（大前）

馬鈴薯の澱粉　干俣では明治時代に、馬鈴薯から澱粉を製造して売り出していた。イモオロシで馬鈴薯をすりおろして、干俣川の流れにさらして、澱粉をつくったが薯十俵から澱粉一俵の割合で取れた。イモオロシは長方形の箱形で、水車に仕掛けて薯をすりおろした。（干俣）

いもの粉おろしはいもの粉をつくるための手製の道具で、四角の桝形の中に洗ったジャガイモを入れ、交互に二人で引いてつぶす。つぶした汁をザルに入れ、スリコギですりながら水をかけてこまかにする。これをイモサーシといった。サーシタものをケブルイ（絹ブルイ）にかけ、何回もアク出シをして、白い粉がとれる。

昭和三十七年ころまでやっていた。（門貝）

㈢　山樵に関するもの

大ガマ　下刈に使う。体力がないと一日ふれない。刃の長さが八寸くらいのは婦人用、男子は尺ガマを使う。

ソリガマにコゴミナタという言葉があるが、カマの柄はそっているくらいが使い良い。

刃の幅五・八cm、長さ二十七cm、柄の長さ百十cm、太さ四cm。（西窪）

大鎌は、刃渡り一五～三十cm、柄の長さ約一mほどで、両手で使う。鎌の柄は自分で作るが、柳が丈夫で、手さがりがよい。

下刈り鎌は、刃渡り三十五cm、柄は一・五mほどある。（大前）

小鎌　刃渡り二十cm、柄は三十cmほどであり、手刈り用にする。（大前）

砥石　砥石は、アラ砥と、仕上げ砥を使って鎌をとぐ。カッツ（麻）でつくったトヅカリに入れて腰につけて運んだ。（大前）

オシガマ　ケイバを切る。昔は柄の側の台が長くスネッタマで押えて切った。

台の幅十五cm、長さ七十八cm、刃の幅十一cm、長さ三十一cm、柄の長さ六十cm。（西窪）

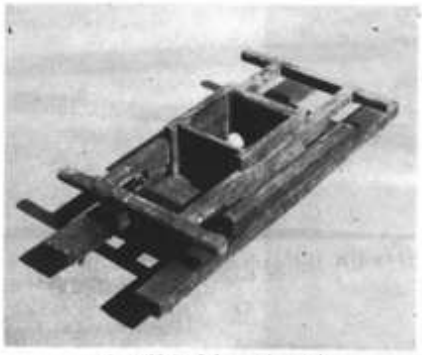
ネギリマサキリ　全長九十四cm、刃の幅五cm、長さ二十四cm、柄の太さ四cm。

刃に秀之の銘あり。（門貝）

ヒロハオノ　全長九十七cm、刃の幅二十二・五cm、高さ二十五cm、柄の太さ　刃の近く五・八cm、手でにぎる部分四・五cm（門貝）

ダイビキ　木を横に切る道具、刃は鉄、柄は木製、刃は柄にさし込む。刃幅十五cm、長さ八十二cm、柄の長さ十五・三cm、太さ十四・五cm。（門貝）

マイビキ　板にひく道具。銘　庄七郎、もとの幅は四十五cmくらいあったが、使って減った。柄にさし込み、針金でしばる。



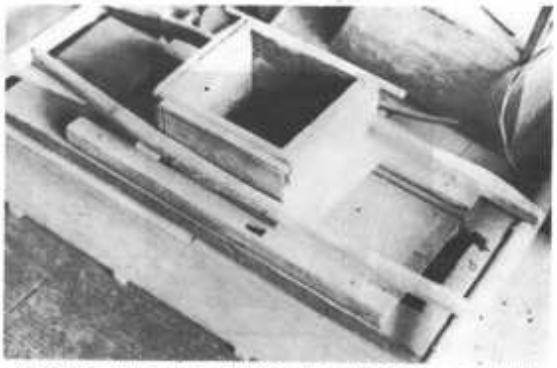
いもの粉おろし　（門貝）
（中村和三郎撮影）

シグツ　シナの皮を使う（鎌原）
（阪本英一撮影）

シグツ（西窪）
（青木則子撮影）

大鎌（右）手鎌（左）
（阿部　孝撮影）

シタカリ鎌（石津）
（阿部　孝撮影）



自家用の薯おろし機（大前、西小郷土室）　この機械にかけて、馬鈴薯から澱粉をとった。（金子緯一郎撮影）

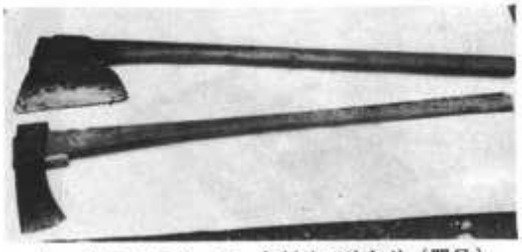
オシガマ（西窪）（青木則子撮影）

土間にかけられた鎌各種（鎌原）（阪本英一撮影）

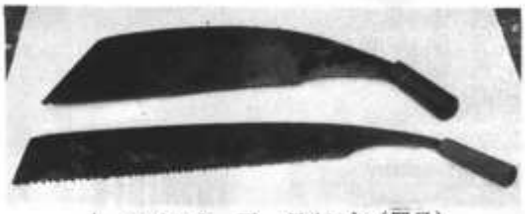
左からノコギリ　大マサツキリ　小マサッキリ
（千俣）　（金子緯一郎撮影）

左より大鎌（2本）下刈り鎌、ナタ鎌、桑切り鎌（2本）
（大前）　（関口正己撮影）

木挽き用のこぎり（門貝）
（中村和三郎撮影）

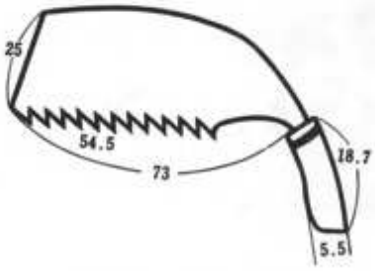


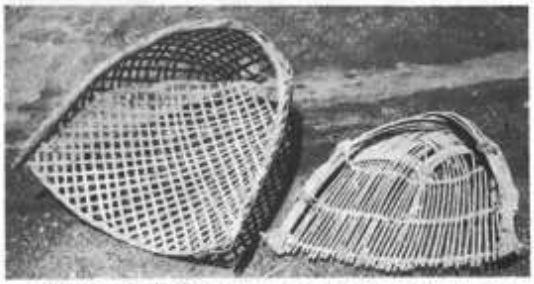
上、ヒロハオノ　下、ネギリマサキリ（門貝）
（中村和三郎撮影）



上、マイビキ　下、ダイビキ（門貝）
（中村和三郎撮影）

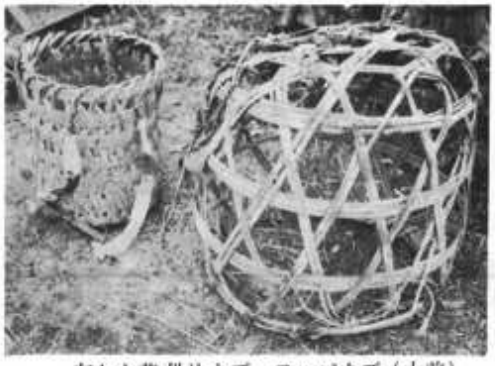
マキ切り台（石津）
（阿部　孝撮影）





（左）スミミ（右）コイミ　スズダケでつくってあるのでスズミともいう（西窪）（青木則子撮影）

炭箕　炭や、石まじりのごみをすくう。（千俣）（関口正己撮影）



左から草刈りカゴ、コッパカゴ（大前）
（金子綜一郎撮影）

草刈かご（千俣）
（金子綜一郎撮影）

草刈りかご　背負うひものつけ方に注意（井田安雄撮影）

薪切り台　冬の生活に備えての薪切りは大切な作業で、長さをそろえて切るためにくふうされたもの。この上に木材をのせて足でおさえながらのこぎりで切る。（石津）

二、運搬用具

スミミ　炭をふるいわけるためのミ。大竹を幅一cmに割り、アジロに編む。

幅六十cm、長さ五十八cm、アジロの目の間隔約一・八cm。（西窪）

コイミ　堆をすくいこんで、マゲーモチに入れるのに使う。スズ竹で作ってあるのでスズミともいう。スズ竹を六本あわせて、カアッソかフジでしばる。

幅五十三cm、長さ四十六cm。（西窪）

草刈りかご　めのあらい大きなかごで、草刈に使う。（大前）

ザマかご　めのつんだかごの外側に、草刈りかごのようなものをあみこんだもの。（大前）

コッパかご　小さい背負いかご。（大前）

まゆかご　まゆを入れるためにつくった大きなかご。（大前）

マゲエモチ　ビクともいうが、マゲエモチが一般的、馬の背につけて堆肥を運搬するものに使うが、慣れないと積んだり、おろしたりがうまくゆかないもの。木の枠のことはハシゴというが、縄のもとにはクマイブという植物のつるを使う。（クマイブは、夏に花が咲くが実は翌年につく植物）

子どものナゾに「モチニハモチダガ　クエネエモチナアニ」答は「マゲエモチ」というのがある。（鎌原）

マゲエモチは馬の背で堆肥を運ぶためのもの。木製の枠に縄で編んだビクをつけ、シト（荷グラ）につけて運び、ビクの底の紐をほどいて堆肥をおとす。ビクの口縁につるをまわし、それと枠を結ぶ。

幅五十cm、長さ二四三cm、厚さ四cm、枠の高さ六cm、ビクの長さ一一〇cm、口縁部四十二cm×四十cm。

コイミでコイをマゲーモチに入れることをコイッケをするという。（西窪）

コイダシモッコ　幅七十cm、長さ二二一cm、コイをのせる部分の長さ一〇〇cm。（西窪）

三、日常家庭用具

(一)　衣生活に関するもの

ケンデー　ワラ、シナ、クグなどで自分で作る。一日に一つ出来る人は腕が良い。シナはくさらないし、クグは軽くて良い。

ワラは、三束（一束―十二わ）が一つ分で、根元を内側に、穂を外に出すようにして編む。形は肩ミノや腰ミノが多かった。（門貝）

ワラとスゲでつくるが、鳥居峠をこえて、信州から上げたものが多い。（大前）

(二)　食生活に関するもの

トーフのヒキウス　自家用のトーフをつくるときに使う石臼、中央に穴があり（径七cm）、ここから大豆を入れてまわす。ヒキ木は上の石の横にある穴につけてまわすもの。石臼の直径三十三cm、全高二十四cm、（上石十三cm、下石十一cm）。（鎌原）

豆腐箱　大豆二升から十四丁（一箱）つくる。底が十四に区切ってあり、底、側面とも無数の穴があいている。

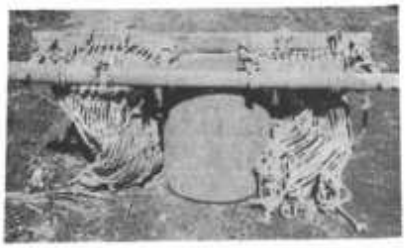
幅二十二・三cm、長さ六十一・五cm、高さ二十一cm、深さ十八・五cm、厚さ三cm。

おさえ、幅十七・八cm、長さ五十四・八cm、厚さ二cm。（門貝）

馬のクラにのせたコエビク（大前）
（撮影金子緯一郎）

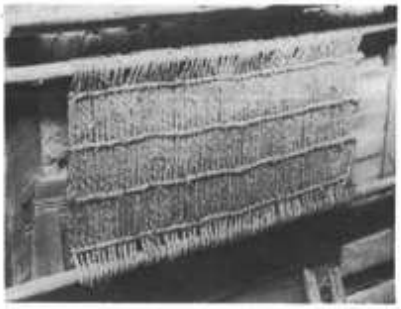
カゴを背負った農婦（上袋倉）
（阿部　孝撮影）

ザマカゴ（下袋倉）
（阿部　孝撮影）



マゲエモチ（ビク）長さ 153cm
巾 60cm（鎌原）（阪本英一撮影）

まゆかご（下袋倉）
（阿部　孝撮影）



肥出しモッコ（大前）
（関口正己撮影）

ショイコ（三原）
（井田安雄撮影）

左、朝鮮チギ　右、ショイコ
（大前）　（関口正己撮影）

一輪車　終戦直後、水田作りに使用
（大前）　（関口正己撮影）

馬のクラ（大前）
（金子緯一郎撮影）

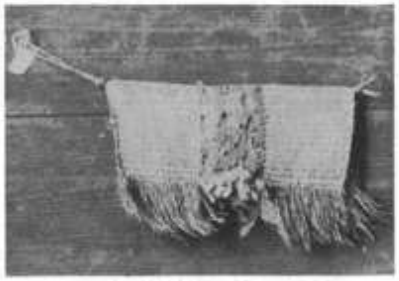
朝鮮チギ（ショイコ）
（大前）（金子緯一郎撮影）

ミノ　ワラとスゲで作る（大前・蟹恋西小）
（関口正己撮影）

サシモノ（門貝）
（青木則子撮影）

サシコ（門貝）
（青木則子撮影）

わらぐつ（大正時代まではいた）（鎌原）
（阪本英一撮影）



ハバキ（大笹、蟹恋西小）
（関口正己撮影）

サシモノ（門貝）（青木則子撮影）

トーフのヒキウス（径33㎝高さ上13㎝、下11㎝）（鎌原）
（阪本英一撮影）

ビニールで編んだワラジ（鎌原）
（阪本英一撮影）

雪靴とわらじ（大前、西小郷土室）
（金子緯一郎撮影）

とうふを作った箱（上袋倉）（阿部　孝撮影）

豆腐箱（門貝）（青木則子撮影）

石臼は台所のすみにおかれ、とうふつくりに使用されるものであり、しょうぎは洗いものの容器として欠かすことのできない必需品である。特にしょうぎの縁の竹が円形になって前方にめぐらされていることに注意したい。

みそこしは柄をつけて使いよくしてあり、うどんなどをあたためるにも利用できそうである。（上袋倉）

とうじカゴ　うどんをあたためるのに使う。材質　カゴの部分は竹、柄は木製、カゴは六つ目編、縁は巻口仕上げ。

全長三十四・五cm、口縁の幅九・三cm、長さ十一cm、深さ七cm、柄の長さ二十三・五cm。（門貝）

一斗ナベ　家の建築や田植え、祝儀不祝儀などのヒトヨセのときに汁をつくるために使うナベ。日常は使わない。

ナベシキ　ナベを置く輪の台で、縄でつくるが、型が崩れないように十文字につくってある。（鎌原）

こね鉢　同郡内の六合村入山の人たちがつくって売りに来たものを買って使ったが、ソバをつくるにも、うどんをつくるにも、粉類の調理には欠かせない道具。（鎌原）

トコトン　箱ぶるいのこと。昔は、麦は用水のほとりにつくられた水車でひいた後トコトンでふるう。トコトンは、大工に頼んでつくった箱形のもので、中に柄のついたフルイが入っており、柄をつかんで前後に動かすので、トコトン、トコトンと音がするのでその名がある。

トコトンには二種類あって、フルイの粗いのはオツケダンゴ用、こまかいのがウドン用である。夕方になると、これを使って粉をふるい、夕飯の用意をするのが女の仕事で、あちこちでにぎやかにひびきわたったもの。人それぞれにトコトンの音のひびきがちがい、あれはだれのものと聞き分けられたという。公団で製粉をするようになってからは、わざわざトコトンを使わなくもよかったので不要になった。（鎌原）

膳椀　祝儀のときに利用する膳椀には、猫足の膳の高いのとやや低いものを使い、低いものはスイモノ膳という。ホンバンには猫足膳にツボ、スイモノ、ヒラとメシワン、シルワンが使われる。（鎌原）

(三)　住に関するもの

切り火　現在でも正月三が日は火打金できよめるが、切り火には、ガマの穂と桐の炭を酢でねって固め、乾燥したものがよい。石の方にこれをつけてもっていて、火打金でカチカチとやれば火がうつって燃えてくる。これをタバコの火としたり、ツケ木があれば燃しつけることができる。（鎌原）

ヒデアカシ　形はいろいろだが、浅間の軽石を加工してつくった。松の節をそのままくべて燃して、このあかりで稲こきなどもしたが、燃すのは子どもの役めだった。径二十七cm、高さ三十八cm。（鎌原）

チョウチン　最近まで使用されたもの。手をかけるところにある細い棒はローソク立てを上下するもので、火をつけたり、ローソクをとりかえたりするときに上下する棒。（鎌原）

カギサマ　いろりのカギ竹は、古くはサンマタになっている木を利用した。「カホウクルミ」といってクルミがよかったが、桑や、ホウの木も使った。（鎌原）

ホウキ　竹のない土地なので山のかん木を利用してつくる。白はぎがべんりで、他には庭に自生しているホウキ草をほしてつくる草ぼうきがある。台所などには草ぼうきを使う。（鎌原）

雑穀入れ　柳の木のウロ（空洞）になったものを利用し、底板をつけて大豆や小豆などを入れるものとして利用したもの。（鎌原）

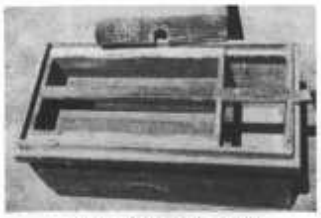
臼と杵　昭和十年ころ、当主（官崎金平氏）がつくった。材料はミネバリというシラカバの一種で、一〇〇〇mほどの高い山でないとない木で、固い木で、マサキリで割るにも苦しむくらいだから割れない。

杵は、シナの木にナラの柄をつけたものとヤマッカ（ヤマクワ）にハギの柄（マユミのときもある）をつけてつくった。（鎌原）

うどんのとうじかご（上袋倉）
（阿部　孝撮影）

みそこし（上袋倉）
（阿部　孝撮影）

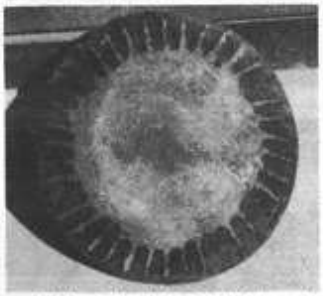
石臼としょうぎ（上袋倉）
（阿部　孝撮影）



ハコブルイ（三原）
（井田安雄撮影）

うどんとじ（門貝）
（中村和三郎撮影）

箱ぶるい　昭和21年まで使用
（石津）　（阿部　孝撮影）

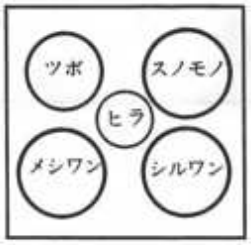


こね鉢　昭和初年2円で買ったもの（鎌原）　（阪本英一撮影）

1斗ナベ　径53㎝（鎌原）
（阪本英一撮影）

ナベシキ（3升用—径33㎝）（鎌原）
（阪本英一撮影）

本膳（鎌原）（阪本英一撮影）



トコトンの使用法　ふたをして使う（鎌原）
（阪本英一撮影）

ヒデアカシ　浅間の軽石でつくったもの（鎌原）
（阪本英一撮影）

火打石と火打金（鎌原）
（阪本英一撮影）

川端におく漬物だる（上袋倉）（阿部　孝撮影）

手　桶（鎌原）
（阪本英一撮影）

カギサマ　サカナは明治38年　ササ板を割っていたときにつくったもの（鎌原）
（阪本英一撮影）

はぎほうき　白はぎでつくる（西窪）
（青木則子撮影）

ホウキ　山のかん木を利用する。（大前）
（関口正己撮影）

チョウチン（鎌原）
（阪本英一撮影）

かめ　明治期には種蚕用の桑を入れたもの（鎌原）（阪本英一撮影）

草ぼうきづくり（鎌原）（阪本英一撮影）

臼と杵　臼材はミネバリ　杵＝左、ヤマッカにハギの柄をつけたもの　右、シナの木にナラの柄をつけたもの（鎌原）　（阪本英一撮影）

雑穀入れ（鎌原）（阪本英一撮影）

サシマワシ　村中の各家の名と巾着がありこの中に祭典の寄附金を入れてまわす。（鎌原）　（阪本英一撮影）

水車の石臼（上袋倉）
（阿部　孝撮影）

イズミ（今井）
（丑木幸男撮影）

念仏のじゅず（石津）
（阿部　孝撮影）

百万遍の大ジュズ　観音堂に保管（大前）　（関口正己撮影）

四、その他

水車　かっては部落の各所で、用水にそって水車が設けられ、製米、製粉が行なわれ、石臼が利用されていたが、現在では庭石の一つとして庭の一隅におかれる程度である。（上袋倉）

サシマワシ　村中の祭でなく、小さな祭りのときに（コマツリ）寄附を集める回状に使ったもの。村中の家の名が記され、その上に火ばしであけた穴があり、それぞれの家でぬったキンチャクがつるしてある。寄附の金額は、昭和五・六年（最後のころ）で、二十銭がテン（最高）で十銭も少なく、五銭がふつうの額だった。（鎌原）

百万遍の大数珠　嬬恋全地区に念仏講がさかんに行なわれており（信仰の項参照）、各地の観音堂に百万遍の大数珠が保管されている。大前のもののように大きな珠でつくられたものや、石津のように小さく、薄手のものでつくられたものがあって、当時のさかんな様をしのばせている。

イズミ　歩きはじめるころまでの乳幼児を入れて子守りをするイズミ（ツグラともいう）は、村内でつくるものはワラ製のもの、竹製のもの、多くは村外から移入したものである。

（資料）

いもの原由記

（表紙）明治廿九年六月十一日
旧五月一日当ル
いもの原由記
楽山居松本相秀
山の湯ニテ認（む）

（表紙裏）
芋ならて何たのしミもあらし吹
深山かくれのすまひなる身ハ
六月五日山の湯まかり来てより今日十一日、七日間時鳥一切聞（き）さり八日よめる。
浴して家待（ち）わひるこの宿に

いもの原由記（都丸十九一撮影）

初音をしむな山ほととぎす

（本文）

じやから芋の由来

抑〻当村芋の原由を尋（ぬる）に、天明度越後ノ国家根や職之者、土産として外（桝か）屋江持来ルを作り始（め）候とかや。夫より年〻村方我も〳〵と種ヲ貰へもとめ、予か内（家か）抔ハ我母、親元ゟ五ツ持来ルヲ作り始（め）、誰も彼も半塚斗リ作り来り候処、天保七申年古今まれなる大不作ニ而畑物少シも実法らす、かり取（り）背負（ひ）来て草同様馬屋江直ニ入（れ）、其外大豆小豆ニ至ルも取入（れ）なく候処、芋はかり平年より猶よろしく、取入方相増（まさ）り候故、是我里の地味相応ニテ寒気もいとハさる作物と心得、夫より年〻二塚三塚位（か）江作り候処、天保十亥年九月当村舞台新築ニテ鎮守社江若者地形石荷ニテ人足大勢居会（わせ）候場に松本源吉当時名主芋粉少〻紙ニつゝみ持来ルを予始（め）テ見たり。此芋粉製法右源吉大笹村九郎助と申（す）者ゟ聞（き）とり候という説あり。是を源吉自宅ニテひそかに製し見たる処、誠ニ奇妙ニ出来候より、村方ニテ二俵三俵人〻取入（れ）あるを買集メ製造いたし、片栗と名付（け）、信州小諸薬店柳田其外所〻売捌（く）。尤直段二百目壱斤として銀四匁位ニテ大ひニ利益ヲ得たり。芋直段ハ壱斗百文今の壱貫位おろしちん一升十文今の壱厘手おろしニテ一ツ宛おろし候。是より村方芋作り念入、年〻相増、天保十二丑年、予内（家）ニテ芋七塚作り二十六俵取（り）、天保十五辰年芋五十俵、年〻相増り、夫より明治二巳年不作ニ而粟、稗、蕎麦実法らさるに、芋大当り当村□□□し右□□より芋しほりかす一切捨（て）す喰（う）事□□□又は売候事ニ相成（り）、今日少シも捨ル者な

く食用ル□事と相成候。依而田代の人民たる者芋直段高下ニかゝわらず末世末代当地ニ住居（する）者、作物の第一等と心得べき者也。

歌ニ

味噌になり餅にも成るやあつきにも芋ぞ田代のたのミなりける

（解説）

右「いもの原由記」は大字田代の松本兼次氏所蔵。筆者楽山居松本明秀は兼次氏の祖父に当るという。その略暦等はよく調べてないので詳かでない。山の湯は今の鹿沢温泉。相秀が鹿沢温泉入湯のつれづれに認めた馬鈴薯由来記である。これによって飢饉の度ごとに芋の評価が高まり、徐々に重要な作物となり片栗粉または葛粉として製造、販売された事実が具体的に記されていて貴重である。現在農林省の馬鈴薯の原々種採種圃がこの地区にあるのも「地味相応」によるのであろう。

なお文中「半塚」「一塚、二塚」などでて来る「塚」は面積の単位で、一塚は約二畝である。（以上　都丸十九一）

信州加沢郷薬湯縁起

抑當地熱湯の由来ハその□
神武天皇より三十七代□□
孝徳天皇と申奉る大化元年
乙巳に御即位有て難波の京に
都をうつし御政いみしくまし
ませし故国家安全におさ□□
人民鼓腹者たのしみをな□□
同しき六年庚戌の春二月九州
穴戸の里より白雉を献し奉る
帝あやしみ思しめして群臣
にその可否をとハせ玉ふに諸卿
議していはく古今和漢におゐては
聖王の世をしろしめす時ハ必鳥獣に
至るまてその祥瑞あり當朝に
白雉の霊鳥あらハるる事是併
御政道のいみしき瑞相なるよし
奏し奉る帝叡感ましく〳〵て即
年号を白雉と改元あります〳〵
世者御治た、しく国郡を□
て所々に長をすへ民の困苦を
たすけさせ給へり比御時に當りて
信州加沢といふ処に一夜に煙気
立のほる事はなはたし里人あ
やしみ煙にしたかひその処を見る□
熱湯地より涌出せりそれのみな
らす又かたへの峯より夜毎に
光明さして彼湯をてらすいよ〳〵
奇異の思ひをなし神祠に託し

旧鹿沢の温泉薬師様（田代）（都丸十九一撮影）

湯の花をあけ神託を聴聞す
神巫託していはくわれハ是東方
薬師如来なりされハ一切衆生□
生老病死の四苦あり其くるし
みにせまりて現世にわ身心をな
やまし當来には必悪趣に随せん
是をあわれミ思ふか故にわれ無
かしより誓願を起して衆生の
病苦をたすけ寿命長穩の□
薬をあたへ現世の身心をやす□
らしめ當来の困苦をすくゐ
処に至らしめんために薬師の号
を得たり故にわか方便をもって
レ、現する処の熱湯ハ諸病を治
する名湯たり此湯にて浴せ□
ものわ必一切の病苦をのがれ
身心安穩ならんわれまた此山に
住してなかく衆生をまもるへし
必うたかふ事なかれと霊託有て
神さります里人霊驗にまかせて
彼峯にのほり見れははたして
如来の像あらはれ給へり即其処
に一宇の御堂を建諸人敬拝
し奉る是によりて遠国近況よ
り此処に来たりて入湯するもの其
病苦をのかれすといふ事なし其後
人王五十六代清和天皇の御時
皇子あまたまします中に才四□
御名をかつらの親王と申奉る琵
琶琴に長しさせ玉ひてそのほ
まれ多くゐなくわたらせ玉ふ或時
清涼殿にて御琵琶を弾し御
遊有しに其曲にかんして燕鳥飛
きたり御殿の門に舞あそふ□
御遊の興となりしを親王御覧
有しに燕たちまち糞穢を落し
て親王の御目をけかし奉る去に
よりて御目の痛はなはたしくし
きりに御悩しくなりぬ典薬医術
をつくし貴僧高僧陰陽博士に至る
まて祈祭ありといへ共其験なし
是によって日本六拾餘州に宣旨
下て御目によろしいからん事あらは
奏聞有へきよし勅使あり時に信州
深井の何かし同国加沢の名湯の□□
特を奏し奉るさるによって四の宮
信州に御下り深井の亭にうつ
らせ玉ひ昼夜御入湯ありしに
御目のいたミたちまち散し御
悩すなハち平癒ありしかれ共□
目蝕と成し故都へかへらせ給ハず
信州上州両国を御領知となされ
真田の郷に御殿をいとなみ爰に
住せ玉ひし時深井の何かしの娘を御
みやつかひにまいらせしに程なく□□
御誕生あり是すなハち真田の家□
惣領滋野氏の先祖たりレ、に至て
真田の家に怪異ある時わ燕来て
巣をくふといへり則真田の家の宝
物わ彼親王の御琵琶御琴御太刀
ハ三条小鍛治宗近と銘あり此□
より諸国の難病重病の輩此処に
尋来たり加沢真田深井に至るまて
所せく群集して入湯のものたゆる
事なく其繁昌なる事都にひとし
されは温湯の奇特もいよ〳〵あらハれ
薬師の霊驗もますますさかん成しに
中頃乱世に及て処もすなハち亡地と
なり往還の道たえて入湯のものも
なけれは名湯もむなしくあれはて
信心の人あらされは如来の霊験も
あらハるへき便なく茫々蕩々たる事
年久しけるに當将軍の御治世に
いたって世しつかに国おさまり
往来道ひろくして名湯むかしに
かハらず諸人きたりて入湯するに
万病たちまち治す則此処は領
主源氏の後胤松平忠勝と申ハ
内にハ三宝をたっとミ禅家の和尚に
参して不傳の妙心を了解あり
外にわ徳行をつとめて仁義の守
おこたる事なし故にたえて久しき
薬師如来の御堂を造営有て諸人
に信をおこさしめ里人の居亭を

旅宿に遊るして諸国病疾の者を
やとハしめ入湯を心のま、にやすから
しむしかるにレ此縁起を記する
事ワ終ニ重病あり苦悩する
事多年なり近き頃此湯の開
発を聞むかしのためしを思ひ
出しひそかに入湯してこゝろミ
侍りしに三七日をへて重病
次第に平癒し身心すなわち安泰
なりきまことに名湯のきとく
是しかしなから如来擁護は方便
にあらすやさるによりて宝前に
参して礼拝をとけ下向の時しも
一人の翁にあへりいつくの人と問
侍りしに此国のものなりといへり
われもまた同国たりしからハ此湯の
由来をしり玉へりやといふに翁こた
えてむかしハ此処都にひとしくさか
え有しと承るしかれ共如来の出
現温湯の涌出ハいつれの代いつれ
の時にか有なんかってしらすといへり
何かし翁につけていはく薬師の
示現温湯の来由家の先祖是を
しれり則家書となして所持すと
いひしに彼翁愕然としてさてワ
如来の引導によりて此来歴を
承るねかはくハ其事を記して如来
乃宝物となし玉へといへりわれ又
翁に　　諸国
の名湯に入といへ共終ニ其しるし
なかりしに此たひ此湯にいりて
久病たちまち本復す所願成就
の奇特にまかせて此処の縁起を記
し奉納せしめんと誓ひてわかれ
ぬ窓に天下泰平国家安全の時
なり如来の方便いよいよさかんに
温湯の利益なか〳〵たえず万人
病苦のうれひをはなれ現世安穏
後生善処と二世の誓願を起して
比一巻を縁起となし薬師如来
は宝殿に奉納せしめおかん

元禄丑年壬申
五月八日　願主宜伝道周居士

右縁起の願主宜伝道周ハ
藤氏の末葉一場の子孫諱
は正管其身武門に有て
軍要武備に孫呉重り
殊更忠義を守りて勤仕に
いとまなしといへ共常に法要に
こゝろさし老和尚に参得
して見性証悟の安心に
かない宜伝道周居士と号ス
しかるに信州加沢の温湯
薬師如来の出現其家に
傳へりて縁起となし
子に請て筆せしむ誠に
徴善の功徳さへつむと□□
余慶あり況やたえたるを
おこしすたれたるをあけ末世
に残し現當二世の悲願と
なしぬ其徳何そおろかならんや
予その信心を感してし
はらく爰に筆記する事しかり

関山下禅子
笑華堂霊伝誌焉

恋愛結婚 ……163,164

ロ

労働着 ……7
六三除け……89,90,91
六地蔵 ……180
ロクデナシ ……241
六間取 ……312
六文銭 ……175

ワ

若い衆 ……112
ワカイモンリクツ ……111
分されの茶屋……81
若水 ……190,191
ワカモチ ……195
若者宿 ……111
ワカレ ……122
脇本陣 ……312,323
ワクセイ……68
和讃…… 5,36,140,141,142 143,144,145,146,210
早生……42
綿帽子……11
ワニル ……241
藁……75
わら細工……74
わら仕事……75
ワラジ(わらじ)…… 12,13,74 75,102
ワリジヌギ ……104,118,148
ワラスベ(わらスベ) ……154
わらぞうり……12
わらたたき……77
ワラチャワン ……208
わらでっぽう(藁鉄砲)… 221,252
藁人形 ……186
ワラハタキ……75
ワラハタキ杵……75
わらび……20
ワラビ粉……21
わらべ唄 ……244,252,266
悪口 ……242
悪口唄 ……261,277,303,304

厄落とし……186,202,203
役だんす……116
厄年……163,203,204
厄年の棄て子……161
ヤクナシ……241
厄日……215
厄病神……188
厄病よけ……91
厄除け……163,211
ヤゴ……240
屋号……103,113
やごめ雀……92
屋敷……26
屋敷構え……26
屋敷神……123,196
屋敷どり……6
ヤシマレル……242
ヤショウマ……208,211
休み団子……69
ヤスミ宿……167
ヤセツボ……190
屋台……126,244,246
屋台ぼこ……5,246
ヤチ……56,99
やち草のムシロ……76
ヤチッタ……56
ヤックラ……240
宿屋……313
宿屋制度……104
やな……49
ヤナギモチ……23
屋根替え……33
屋根ふき……33
屋根屋……33
ヤブイリ……112,205,219
ヤマ……24,56
山争い……4
山犬……5,73,180,181,186,236
山犬追い……56
山入り……63,193
山おし……208
ヤマカカシ……19,99
山小屋……51,59,63
山師……61,139
山仕事……41,57,60,63,64
ヤマトユイ……31
山ヌケ……241
山の神……139
山の口……53,54,104,219
山の背比べ……231
山のみおき……100
山はじめ……63
やまばん……114
山ビラキ……55,211
ヤマブキ……24
山へ入っては悪い日……95
山弁当……15
ヤマホウシ……63
ヤママキ……46
やまめ……19,257
やわら……20
ヤンメ……87,88

ユ

由井正雪……94
結納……165,166
結納金……166,173
結納品……165
ユウハン……15
ゆうびんやさんの……306
湯灌……174,175
雪消し……48
雪の中のあそび……257
雪輪……13
湯くぼ……227
ユナガシ……91
指遊び唄……302,303,304
ユビハメ……240
弓……256
夢……91
百合子さん花子さん……289

ヨ

夜遊び……112
よいこと……101
宵祭り……127
熔岩樹型……107
陽気占い……37
ヨーキ祭り(陽気祭り)…126,214
ようごの唄……252,262
養蚕…36,40,41,66,196,248,323
用水……48
用水の水温……48
ヨカヨカ飴屋……85
夜鳥……101,242
ヨギ……73
ヨコザ……29,72
ヨゴレ年……189
ヨシ……175,189
ヨシグシ……28
ヨシダル……150
ヨシの鳥居……176
よそいぎ……7
四ツジロ……70
ヨッツォ……76
ヨッツォヨリ……76
四つづけ……49
四ツ身……15
夜泣き……90
夜泣きの呪文……90
世直し……234
ヨナベ仕事……75
よばい……85,112
ヨベエゾーリ……74
嫁……165,166,167,168,169,170,171,172,173,222
嫁入り……167
嫁入りの道中……167
嫁選び……164
嫁が里帰りに持って行くもの……121
嫁が実家に帰る日……172
嫁騒動……235
嫁の里がえり……213
嫁の生活……172
嫁のつとめ……172
嫁の年始……121
嫁のみおき……100
嫁のみやげ……168
嫁みせ……169
ヨモギ……211,212
弱い子……161

ラ

来客……101
ライ病……94
らっかさん……279
ラントウバ……186,187
ランプ……34

リ

離婚……172,173
理髪職人……85
リョウボエ……240
両墓制……152
りんどうの栽培……45
リンバ……57
隣保班……103

レ

レイシュ……168
令眠……68
恋愛……164

ミゴダンゴ……23
ミコト牛乳……73
ミゴボウキ……223
ミズコ……156
水苗代……42,47
水の神さん……100
ミズハカリ……97
水見……48
ミセ……314
ミソ(みそ)……21,195
みそかそば……225
ミソカダンゴ……206,207,225
ミソカマユダマ(ミソカマユ玉)……188,206
味曽倉……28
ミソハギ……217
ミソマンジュウ……219
ミタテ……167
道しるべ……81
ミツカメ……171
三ツ身……15
三峰講……149
三峯神社……138
ミツメ……170,171
水口……48
ミナクチ田……48
源頼朝……2,5,126,226,227,228
ミネ……241
ミノ……10,74
三原荘……2
耳いた……89
みみず……100
みみずが三匹……294
耳だれ観音……89
耳ふさげ……186
ミミンダレ……88
ミョウガ(茗荷)……93,101
ミョウバンヤ……313
ミヨハチ……71
民家……307,309
民具……322
民謡……244,245

ム

六日爪……194
ムイカドシ(六日年)……193,194
無縁仏……186,217,218
迎え……167
迎え火……217,218
むかしの結婚……164
むかしの結婚式……166
昔の仕事……41
昔話……100
ムギ……16
麦刈り……98
麦作……42
ムギゾッキ……16
麦の収量……51
ムギの種まき……94
麦まき……222
麦やきもち……18
ムコ(婿、聟)……165,166,167 168,169,170 171,173,175
ムコ入れ……166
婿のひざくずし……167
ムシ……242
虫切鎌……90
ムシッコ……90
ムシツベ……242
むじな……236
虫歯……89
虫封じ……91
ムシヨケ(ムシ除け)……90,204
ムシロ……75
ムシロバタシ……76
棟札……312,318
村入り……118
ムラオサ……116
村柄……118
村組……109
ムラデンマ(村伝馬)……104,119
村に来た職人……85
むらの役員……116
村八分……118
村持ち地……103,117
村役……103
村寄合……118
ムロ……31

メ

メ……62
明治四十三年の暴風雨……108
命名……157
メエカイ(メーカイ)……68,84
メカゴ……87,88
メカゴククリ……88
メクラトンボ……240
メッパジキ……5,186
目のごみ……88
メンパ……15,25,98

モ

モイシャクリ……30
モウゾウ……241
モガリ……5,152,181
木炭……58,59,82
木炭検査員……59
モコナカセ……20
モズ……66,242
モチ……23
餅つき……224,225
餅をつく日……23
木工細工……76
モトゴエ……50
モトジメ(元締)……57,58,62,63 139,195
モトリン……57,
モノゾクリ……195
モノツクリ(ものつくり)……188,195
モノビ……25,150
モノモライ……87
もの忘れ……101
喪服……7
モミスリ……50
木綿……7,70
モモヒキ……7
モモワレ……12
モライ乳……160
貰いっ子……161
モロ……21
モロコシ……17
モンジ……239
紋つき……6
モンペ……7,10
門牌……184

ヤ

ヤウツリ……34
八百屋……85
ヤカガシ……207
焼き子……60,61,83,139
焼き米……37,52,55,204
焼き判……113
ヤキブ……59,62,83
八木節……219
ヤキマキ……37
やきもち……15,18
ヤキヤマ……46
野球……256
役員会……116

ヘヤ …308,309,310,311,312,313
便所……31
便所の神様 ……153
弁天様 ……136
弁天渕 ……137
弁当のおかず……15

ホ

法印 ……209
棒が一本あったとき ……291
ホウキ(ほうき)……35,332
箒の神様 ……153
ホウケル ……242
奉公人 ……112
奉公人の出替り ……209
坊さんの年始 ……193
坊主かつぎ……99
坊主めくり ……257
ぼうち……51
ボウチンボウ ……323,324
ホウトウ……17
保温折ちゅう苗代……47
母蛾検査……68
ボク ……196
牧場……72
牧野協同組合 ……117
牧野組合 ……104
牧野附帯地組合 ……117
干俣 ……105,227
干俣と川 ……226
干し物……92
ホズイレ……32
墓制 ……182
ボタモチ(ぼた餅) ……218,219,222,223
ホタル ……240
螢狩り ……256
ほたる来い ……262
ホダレ ……196
ホダレナタ ……196
ボチ ……182,183,185
墓地 ……179,181,182
ボッチ……50
ホド ……30,64
ホドイモ……20
仏さんの弁当 ……218
仏の日 ……205
仏のめし ……183
ほととぎす ……231,232
ホマチ ……123,124
ボヤ(ぼや) ……35,98
ボヤ切り ……57,98
ホレトリ ……164
ボロ刺し……75
盆 ……189
盆踊り ……219
盆カンジョウ……83
盆ござ ……217
ボンサントンボ ……240
本膳 ……176
本裁ち……15
盆棚 ……189,216,217,219
盆中の草刈り ……216
盆月 ……216
ボンノクド ……160
盆の食事 ……219
盆花 ……217
ホンビキ ……102
ホンマイカイ……84
盆参り ……218
ホンマユ……84
盆迎え ……217
ホンヤづくり……27

マ

マイダマ木 ……193
マイビキ ……326,328
詣り墓 ……182
前かけ……10
前兜造 ……320
摩崖碑 ……137
マキ(まき、薪)……35,83,98
マキ切り台 ……328,329
まきつけ……39
マグサ小屋……54
マグサ場……54
マクラ団子 ……173
まくらめし ……173
マクリ ……160
マケ …105,122,124,130,174,179
マゲエモチ ……329,330
マケの伝承 ……124
馬子 ……251
馬子唄 ……244,251,252
マセエカジリ……71
町家 ……314
松飾り ……224
マツフジ……21
祭囃子 ……246
マドキ……95
間取り……29
マブシ……69
マムシ(まむし) ……19,66,88,99
マムシ酒(まむし酒)……87,88,99
マムシヨケ(まむしよけ) ……12,102,241
マメイリ(豆いり)……18,124
豆木 ……191
マメダマ ……129
豆茶 ……207
豆突棒……40
豆棒……51
豆まき ……188,207,208
豆まきのシュン……39
マユ(まゆ、繭)……67,82,83
繭市 ……69,70
繭売り……69
繭買い……69
マユカキ ……205
まゆかご ……329,330
眉毛 ……101
マユダマ(マユ玉、まゆだま、繭玉、マイダマ、マイ玉、まいだま) …25,63,188,195,196,197,199,201,203,205,206,208
マユ玉飾り ……188
まゆ玉つくり ……195
繭の販売……83
魔除け ……173,212
まり ……254
まりつき ……254
まりつき唄 252,253,260,269,273
毬の宮 ……126
丸一団 ……245
マルガンナ ……76,77
マルシテン ……130
丸ちゃん ……292,293,294
丸まげ ……11,12
まるまる ……305
丸山講 ……149
真綿……70
マワタカケ……70
まわり念仏(回り念仏) …140,210
マンガ……47,323
マンガ洗イ ……212
マンカラ ……241
万歳 ……85,86
万座温泉を開いた人 ……105
満州の ……266

ミ

見合い ……164
見合い結婚 ……164
三河万才 ……192

ヒエ……3,16,17
ヒエゾッキ……16
ヒエつくどり……40
ヒエのまきつけ……40
ヒエモチ……23
ヒエヤキモチ……18
ヒカキタ……240
ヒカゲモン……159
光り玉……235
彼岸……111,210
彼岸のオコモリ……210
ひがんみそ……21
引臼……76
引き継ぎ……116
引出物……170
ヒキワリ……16,17
ヒキ割り買い……26
ヒクサ(干草)……53,54,55
干草置場……54
ヒクサバ……55
ひぐつ……53
ヒケシオ……93
飛行機……235
ビションマイ……84
ひたし豆……19
左膳……92,93
ヒチソウ……71
ヒッキリジバン……7
火ツケの先祖……123
ヒッチキジュバン……12
ビッチュウ……323,324,325
備中鍬……47
ヒッチョイ……10
ヒッツミックラ……256
ヒデ……34
ヒデアカシ……332
ひとあし……99
ひとかけふたかけ……298
ヒトカラ……57
ヒトケ……56
一ロガラス(一ロ烏)……101,173
人だま……235
一ツカ(一つか)……56,99
ヒトツナ……72
一ツ身……14,15
人手……52
一七日……184
ヒドロ……56
ヒドロッタ……56
ヒナ飾り……209
ヒナ様……209
ヒナタヘビ……66
ヒナの節供……189
ヒナワ……99
ヒネ米……16
ヒノエ午(丙午)……208,223
日の神さん……138
火の玉……173
ヒバ(干葉)……21
火早い……208
ヒバリ……242
ヒャッカンニチ……185
百姓の道具……196
百姓のハナ……188
百反着物……161
百度まいり……91
百人一首……257
百人針……101
百はぎ着もん……160
百万遍念仏……140
百万遍の大数珠……335
百結び……101
ヒヤケル……240
ヒヤセギ……48
日やとい……52
ヒヤメシゾウリ……12,13
ヒヤメシヤロウ……121
評議員……115,116,117
ヒラ……241
ヒラギヌ……14,70
ヒラヅケ……68
ヒラハ……57
ヒラ畑……240
肥料……49,50
ヒリョトリ……52
ヒロハノオノ……326,328
貧乏ゆすり……95

フ

夫婦サカズキ(夫婦さかずき、夫婦盃)……166,168,169
夫婦の年令差……163
フキゴモリ……23,34
吹出もの……90
蕗のとうの童唄……255
副食……18
福俵……86
フクチ箱……35
腹痛……87
富士山……231
フジマキトンボ……240
普請……120
普請帳……321
舞台……248
舞台掛け……248
舞台屋敷(ぶてい屋敷)……127,249
二間取型……309,315
フタミソ……22
ふだん着……7
ブチ(麦ぶち台)……51,323
ブチ台……44,51
ブツケ……256
ブッコミ……17
仏壇……122
ブッツン……256
不動様……131
フナノリ……147
フナ休み……68
不妊者……163
フネノリ……148
冬カンジョウ……83
冬の仕事……41,57
ブラ……241
古いひなさま……209
フレ(ふれ)……118,213
フレ伍長……116
風呂……30
フロー……240
フローデ……240
風呂場……31
分家……105,123
文書庫……116
ふんどし……12
ふんどしぬか……94
ぶんどや……260

ヘ

ベースボール……256
米価……26
ヘイガヤ……50
米寿の祝……163
ベエ……51,226,242
ベエタ……60
ヘソクリ……123,124
ヘソの緒……155
経台……74
ヘッツイ……30
別荘地……40,54
ヘビ(蛇)……19,66,99
ヘビ酒……66,88,101
へびとめめず……232
ヘビノテンナンソウ……101
蛇除け……91

年忌……185
念木……255
年始……121
年始回り……191,192
ネンネコ……15
ねんねんころげて……284
念仏……51,138,139,140,141,144,184,189,210
念仏和讃……2
ネンヤトイ……112

ノ

納棺……174,175
農業……40
農業の年取り……195
農具休み……205
農事暦……39
農地貸し……53
農休み……212,213
のし餅……225
のぞっこみ……112
ノチ産(のちざん)……155,156
ノッツケオカミ……172
のの字まわり……166,168,169
ノビバン(野火番)……119
ノブロ……31
ノベ送り……177
ノボーツチ……241
ノボリ……126
飲み水……26
ノメシ……241
野や山の遊び……256
のり豆……19
のんのさん幾つ……275

ハ

バイ……51,226,242
歯いた……89
はいつき……106
ハイヤキ……50
端唄……251,259
ばかかば……277,304
墓そうじ……215
墓なおし……181
馬鹿の三杯汁……25
墓参り……210,219
ハギ刈り……73
掃立……68
はぎぼうき……35
ばくち……102
バクメシ……16
伯楽(馬喰)……71,72
ハゲン(半夏)……39,48,53,94,189,213
ハゲン様……213
ハゲン正月……213
半夏の日……95
ハゲンブロウ……39
箱膳……25
箱ブチ……56
箱ぶるい……332
箸……25
ハシカ(はしか)……88,89,90
ハジキ……186
機織り……74
裸……235
はだか餅……225
畑……45
畑うない……98
畑仕事……41
はたけのさく……49
畑ブチ……56
旗竿じまい……212
畑作……36,48
ハタッペリ……71
ハチさされ……88
八十八夜……211
鉢つくり……76
蜂の巣とり……257
八幡講……149
ハチリン……241
初午……208
初絵売り……192
二十日ゴウセン(二十日ゴーセン)……188,206
二十日正月……205
はっか草……87
初雷……96,207,208
葉付き塔婆……185
八朔……215
初節供……121,160,209,211,212
バッタン……74
初誕生……160
初乳……160
バッチン……256
初天神……138
初荷……192
初詣り……191
馬頭観世音……148
馬頭観音……70,72,136,149,205,229
馬頭観音講……148,149
馬頭観音堂……135,136
馬頭観音のご縁日……206
馬頭様……208,257
馬頭尊……136
鳩と豆……234
ハナ(はな、花)……126,195,247,248,249
花いんげん……44
ハナクソダンゴ……212
ハナドリ……47,196
ハナブクチ……35
花祭り……212
ハナムスビ(花むすび)……12,102
花むすびぞうり(花むすびゾーリ、鼻結びぞうり、はなぶすみぞうり)……12,13,74,102,241
ハナレ……312,319
はねつく唄……283
ハバキ……10,13,322
ハバリ……71
ハビショ……123
ハミ……73
ハヨウフジ……47
腹帯……153
バラギ(バラ着)……3,14
ハラミオンナ(ハラミ女)……95,152
ハラミバシ(はらみばし)……195,196,204,205
針供養……208
春祈禱……209
春駒……85
春名講……149
春祭り……126,127,211
馬鈴薯……57
馬鈴薯づくり……45
馬鈴薯の澱粉……326
はれ着……6
ハレの日の食べもの……22
バンダイモチ(バンダイ餅)……64,139,195
班長……109
半出来……227
ハンテン……9
半端人足……98
バンバノソネ……73
ハンメシ……16

ヒ

ヒアミ……241
火打ち石……35
火打かね……35

トハナ……236
戸ブッツケ……256
トボウ……316,317
とまり木……95
トマリゴメ(とまり米)…175,183
富岡製糸工場……235
富蔵山講……148
トムライアゲ(弔い上げ、ともらいあげ)…185,186
とむらい念仏(トモライ念仏) 144,184
トメイシ……60,61
トメギ……60
ドモロ……68
富山の薬売り……84
土用の丑の日……214
土用干し……21
トヨ棒……60
寅除け……91
トランプ……257
トリアゲバアサン(トリアゲバーサン)……154,155 156,157
とり上げばば……154
鳥追い……203,205
鳥追い行事……188,201
トリカブト……101
トリザカナ……169
鳥の鳴き声……242
鳥呑爺……233
トリムスビ(とりむすび) 166,169
ドロゾメ……14
ドンドンの縄……227
トントンぶき……28
ドンドンヤキ(ドンドン焼キ、ドンドン焼き、ドンドン焼)……63,188,195 197,198,199 200,201,202 203,204,205 208,218
ドンドン焼きの始まり……203
とんび……261,263
とんびの唄……254
トンビノハネ(トンビのハネ)……171,172
トンボ……240,257
トンボツリ……256,257
呑龍さんの七つ坊主……159

ナ

ナーロ……241
ナイラ……71,73
苗代……47
苗代の種まき……55
苗つくり……44
苗取り……98
なかじ……237
中山道……78,81
ナカヤド……167
流れ灌頂……186
長わずらい……101
ナギ……236
ナゲトーバ……186
ナゲモチ……32
仲人……164,165,166,167,168 169,170,171,172,173
仲人とのつきあい……172
仲人七ウソ……164
仲人の報告……170
仲人礼……171,172
ナス……45
謎……239
夏蚕……66,67
夏祭り……126,214
七草……194,204
七草がゆ……194
ナナツボウズ……160
ナブリ……120
ナベ……157,158
ナベシキ……332
ナベッカリ……215
ナベッコスリモチ……213
ナベ餅……218
ナマ団子……235
ナママユ……83
ナミワケ……71
ナラ……58
成り木責め……205
ナリスモコ……197
鳴尾のカラス……236
鳴尾の由来……105
縄……74,75
なわとび唄……266,268,273 297,300,306
縄ない……75,98
ナンド……313

ニ

新潟の玄米……83
新潟米……42
にいちゃん……295
二十三夜……139
二十三夜様……230
二十三夜待ち……138,230
荷印……113
ニシン……24
ニッカン……174,175
ニックイ……71
荷なわ……75
二百三高地……12
二百十日……215
二百二十日……215
二毛作……56
ニモチ……223
入家……168
入家式……151
乳牛……72
乳歯……162
庭コロガシ……189,222
鶏……101
ニワ休み……68,69
人形……186
人形芝居……86
妊娠……152,153
妊婦……152

ヌ

ぬか袋……31
ヌカ焼き……323
抜け参り……250
ヌスットナシ……20
ヌルミ……241
ぬるめ……42

ネ

ネーマツクリ……47
ネエバ……242
ネエラ……71
根枯れ病……69
寝棺……176
ネギ畑……213
ネギリ……77
ネギリマサカリ……326,328
根桑……69
ネコ……75,324
猫足のお膳……255
猫石……131
ネコッバタキ……189
ネコノシッポ……121
ネサ……242
ネズミ……69
ネズミアシ……89
ネズミッバ……238
ネズミ除け……69,131
ネド倉……14
根雪……49

漬けもの……19
ツジュウダンゴ……188
土かけ……179
筒ガユ(筒がゆ、筒粥、ツツゲー)……131,132,133,134,135,204
筒粥神事……131,132,133,134,135
筒粥の神事……4
角かくし……11
つばめ……93
ツブラクサン……101
妻側兜造り……321
繻恋キャベツ……44
ツマンバレ……95
ツレ……167
ツワリ……153

テ

テーゲ……240
デーサ 308,309,310,311,312,313
デードコ……308,309,310,311,312,313,314,316
手遊び唄……282,286
デイサ……29
ておい……9
出かせぎ……41
デカワリ……112
デキモン……88
手甲……9
テッコハッコ……71
手拭い……11
手ぬぐいのかぶり方……10
手ばたき……256
デホーラク……241
テマトリ……33,34
テムスビ(手ムスビ、手結び)……151,164,165,169
寺……137
寺世話人……117
寺の年始……193
寺への通知……173
テラ屋敷……227
テン……182
テンガイ(天蓋)……176,177
天気占い……196
電気・電話……235
天気予報……97
天狗倒し……229
天狗の遊び場……101
テンコロ……152,182
天井あげ祝い……58
天神講……111,137,209
天神様……224
天神さん……138,156,209
電灯……34
テント様……130
テンナン草……101
天王様……214
テンピン棒……76
デンピン……71
テンプ……204,257
てんぷら……219
テンマ……119,122
伝馬制度……104
天満天神宮……137

ト

砥石……58,326
十日夜……37,189,220,221,252,262,264
十日夜のうた……221
ドウギ……9,10
東京の……286
峠講……150
峠さま……150
ドウザカ……73
トウシ……44
冬至……223
童詞……240
導師引導……179
とうじかご……332
冬至かぼちゃ……224
道場じまい……245
道場はじめ……245
道場ばらい(ドージョーバライ)……126,245
ドウシン……241
ドウズリヤロウ……241
同姓同名の区別……238
同族意識……105
道祖神……134,150,197,199,201
道祖神小屋……199
道祖神さま……202
道祖神像……5,63
道祖神の木……193
道祖神祭り……5,188
トウツケ……184
トウナカ……184
トウネ……41,47,70,72,157
トウネ一升……72,210
トウネッコ……162
トウネ取り……72
トウネ渡し……73
トウバ……70
トウバッサク……70
とうふつくり……332
トーフのヒキウス……329
豆ふ鉢……76,77
ドウ掘り……60
トウミ(トオミ、唐箕)44,51,324
棟梁……32
トウリョウ送り……32
灯籠……194
ドウロクジン(ドウロク神、道ロク神、道陸神、ドーロクジン)……91,110,134,193,195,196,197,201,202,203,204,209
道ロク神小屋(道陸神小屋)……197,198
道陸神さま……193
ドウロク神さん……195
道陸神像……188,200,202
道陸神のボンテン……198
ドーロクジンバ……203
ドウロクジン焼き(道陸神焼き)……196,201,202
土方……62,98
土ガマ(土がま)……58,60,62
毒消し売り……84
戸倉さん……131
トコ……312
トコトン……322,332
トコネリ……4,36,45
トコロ……168
トコワカ……240
トコワキ……312
年男……190,191,193
年神……189,225
年神様……190,191
年神棚……188,190
年神迎え……225
年徳神……197,201
年取り……189,225
年とりの豆……91
土葬……180
土蔵づくり(土蔵造り)……3,6,27,33,66,67,68
トタン屋根……28
トチマンブク……255
土着伝承……105
トヅカリ……58,326
トッコ……257
トットコトー……240
トトクイ(トトックイ)……159,160
唱え言(七草の)……194

大神宮様……129
大日さん……150
大日如来……135
堆肥……50,53,83
ダイビキ……326,328
堆肥小屋……31
太陽暦……95,96
田植(田植え)……47,48,94 204,212,213
田植組(田植え組)……48,52
田植時期……48
田植えジバン……9
田植えぞうり……12
田植えなわ……48
田植えの食事……24
田植えの夕飯……24
田植を忌む日……94
田おこし……47
タカアシ……14,70
高木……69
高島田……12
タカハタ……56,70
タキギ……3
竹……76
竹渕稲荷……124,130
竹渕マケ……124
竹ぼうき……100
たこあげ……255
ダシカゼ……97
田代田のない米の中……42
堕胎……156
たたり……102
タチウス(立臼)…76,95,183,189
タチクチ……64
タチブルマイ(立チブルマイ)……147,148
駄賃かせぎ(駄賃稼ぎ)……4,37,41,82
ダチンツケ(駄賃つけ、駄賃づけ)…41,79,82,83
駄賃とり(駄賃取り)……41,62
タテ……84
タテ棺(たて棺)……175,176,180
タテコミ……60
タテジ……23,32,34
タテジイワイ……32
立野……106
タテマキ……59
タテマタ……60,61,62
タナ飼い(棚飼い)……66,67
棚差し……66
棚ザライ……193
七夕……213,214,215
七夕飾り……189,213
種馬……71
種馬所……71
種紙……68
種まき……55
種もみの量……47
タネ屋(種屋)……66,68
田の草取り……48
煙草屋……84
旅芸人……85
タビバソン……13
田ホリ……55
玉子買い……85
魂……185
多間取型……309,312 313,318,319
タママユ(タママイ、玉繭)……68,70,84
魂呼ばい……173
タルイ……241
樽入れ……151,165
樽立て……151,164
ダルマ売り……192
タレ播き……49
タロッペ……20
タワラ……195
俵占い……208
タワラギ……63,196
タワラッペーシ……177
俵づめ……60
俵ンバシ……176
ダンゴ(団子)……25,218
ダンゴ汁……17
だんごをつくる日……23
男爵いも……45
タンポ……56
タンポポ……239
短命の名……237

チ

地価……42
力石……98
カダメシ(力だめし)……98,112
力の強い人……101
稚蚕……68
稚蚕飼育……68
乳ばれ……90
乳バレモン……88
チチン……95,233
血の池念仏……141
ちゃちゃつぼ……304
茶ツケ……15
チャノマ……309,310,311 317,318,319
チャンチャン……9,10
チャンバラ……256
チャンボコ……239
チューマユ(チューマイ)68,70,84,123
チューメーヤ……84
チューメエカイ……68
中気……89
中日……210
仲馬……210
仲馬稼……79
チュウヤ……131
中宿……168
チョーズバ神様……150
チョーチンヤ……85
チョイチョイ着……7
チョウズバ……31
朝鮮くじ……102
朝鮮チギ……330
朝鮮の……300
チョウチョウ……256
チョウチン(提灯)……34,332
手斧(チュウナ)……76,77,307
チョウナタテ……32
チョウベシ……241
チョウヤ……132,215
チョチョウ……240
チョッカン……241
チョッペシ……221
ちょんまげ……12
チョンマゲ頭……73
チョンマゲジイサン……12
チンコロゲサ……239,255
賃びき……70

ツ

つかえ……89
塚ガタメ……180
月念仏……140
月見……220
月見の行事……216
ツキメ……88
ツグラ……162,322
ツクロイ……72
告げ……174
つけ木……35
告げ人……174

ス

水車……24,25,56,57,75,335
水車小屋……24,56,83
水車のワッコ……56
ずいずいずっころばし…282,303
水田……3,4,36,41,45
スイトン……17
スイモノ膳……332
末子の名……237
すえ風呂むこ……172
スエル……241
犂……56
ずきん……102
すぐじ……178
スグズ道……56
スゲ……53
スゲエ(スゲー)……53,99
菅笠……10
スケッコ……120
双六……257
スジ……242
スジナメラ……19,66
スジマキ……242
ススドシ(ススヤ)……189,223
すすはき……223
スズミ……328
ズダ袋……175
頭痛……87
ズッタシ……240
捨て子……160
砂はらいコンニャク……224
スバイ(スベー)……59,60,63
スベブトン……154
炭……62,82
炭かき道具……61
スミカケ……32
炭がま……58,60
スミギ……60
炭出し……60
炭俵……63,74,75
炭俵編み……98
炭の一駄……62
炭の販売……83
スミミ……60,63,328,329
炭焼き……36,41,57,58,59,60,61,62,98,130
炭焼き小屋……61
スミヤマ……58
スヤ……27
スルス……323,324

諏訪様……127
諏訪様の御神体……126
諏訪神社……4,126,127,129,130,189,204
諏訪大明神……129
諏訪の御柱の年(諏訪のおん柱の年)……93,95

セ

青年会……111
精米所……24
セイレン……60
セエノカミ……110
セガキ……218
せきかぜ……88
関所……78
赤飯を炊く日……22
節供働き……213
セッコガイイ……241
殺生……186
セッチン参り……158
節分……207
節分の豆……91,207
セリ市……72,73
セリ取り……194
専業農家……53
善光寺さん……95
善光寺さんの血脈……175
善光寺道……78,230
染色……14
喘息……88
洗濯……14
仙ノ入……227
ゼンの綱……178
センバ……50
千羽鳥……150
千歯こき……322,323,324
千俵……85
センフリ……87
ゼンマイ……20,88
ゼンマイのワタ……15
膳椀……170,332

ソ

雑(ぞう)……58
霜害……69
葬儀……184
葬儀に必要な諸道具……176
葬儀費用……184
葬式…174,176,178,183,184,185

葬式場……180
ソウシキシンルイ……184
葬式のときのつくりもの……175
葬式の日……174
葬式の日の料理……23
双生児……163
ソウモン……71
ゾウリ(ぞうり、ゾーリ)…12,13,74,75
ぞうりきんじょ……297
ゾウリとり……257
ソウリョウ……121
葬列……177
葬列の服装……177
葬列の本道……178
ソコカキ……76,77
底抜け柄杓……89
ゾザエアゲル……242
ソデカブリ(そでかぶり、袖かぶり)……11,152,177,178,183
供え物……190
供え物の数……101
ソバ……17,23,44,46
ソバウチベエ……226
ソバセンベイ……18
ソバつくりの名人……25
ソマ(柚、ソーマ)…31,32,36,57,195
ソラッコト……241
ソリガマ……326
ゾレ……240
祖霊……189
村会議員……115,116
村内婚……172
ソンマオトンバ……240

タ

大家族の食事……25
大黒……206
大黒様……222
大黒柱……29,197,313,320
大根のとしとり……221
大根葉……21
代参講……148
代参者……147,148,149
大師粥(太子ガユ)…188,189,224
太子講……224
大師様……224
ダイシサマノ箸……207
ダイシサンのあとがくし……224

ジゴクデンマ（地獄デンマ、地獄伝馬）……103,104,119,120,121,152,179
地獄のかまのふた（地獄の釜のふた）……205,214
地獄の声……180
仕事着……8
仕事始め……192
死産……163
獅子の練習……245
地芝居……127,248,249
ジジマ……14
獅子舞……5,126,208,211,244,245,247
獅子舞唄……246,247
死者に持たせるもの……175
死者の着物……175,186
四十九日の餅……185
四十九りん……185
四十八の生みどめ……94
自然災害……36
自然暦……96
シタカリ鎌……327
下着……12
シタザ……29
下谷将監……105
七・五・三……163,222
七本とうば……185
シッキリジバン……7
しつけ……99
シト……73,157,329
シトダナ……29,73
シト屋……73
シナ……76
シナダマ……241
シナダマツキ……254
信濃街道……78
シナの皮……13
しなの木の皮……76
死に鳥……173
死の予兆……173
シバキリ権兵衛（芝切権兵衛）……105,125
シバグシ……28
シバショ……71
ジバタ……14,70
シバドメ……28
しびれ……89
しまい正月……206
シマダ……12
シマヘビ……19,66
シミ大根……21
シミドーフ……21
ジムグリ……19
シメダル……164
シメ縄……190
下肥……83
ジャージー……72,73
シャイナシ……241
ジャオージ……226
じゃがいも……44,45
ジャガイモのでんぷん……57
シヤク（しやく、使役）……88,119
シャクイ……241
シャクナゲ……240
シャックリ……89
社日……210
ジャホージ（ジャホーシ）226,239
しゃんぎり……247
ジャンケンの唄……285
シャンコージ……239
ジュウイチ（慈悲心鳥）……232
祝儀の食物……170
祝言……168
十五日ガユ……204
十五夜……215,216,220,221,229
十三仏……144
十三夜……124,216,219,220,221
シュウト（姑）……170,171,172
十二講……63,64,139,195
十二様……63,64,131,139,195,222
十二様の腰かけ……95
十二様の休み場……64
十二様祭り……221
十二ヤサンノモチ……32
十六念仏……141
十六まいだま（十六メーダマ）……195,197
宿場……81
主食の混合割合……16
出棺……176
出張耕作……44
十返舎一九……313
狩猟……64
ショイコ（しょいこ）……9,330
ショイビク……325
正月さま……202
正月棚……190,191
ショウガミ様……153
焼香……179
条桑育……67
定使い……118
浄土……179,180
浄土場……179
ショウブ……211,212
ショウブ酒……212
ショブの節供……189
丈夫の名……237
ショウブ湯（菖蒲湯）……211,212
ショウベ石……29,75
小便所……31
浄瑠璃……249
食事のみやす……98
食事の量……25
食制……15
食用植物……19
食用動物……19
初産……158
除草……48
ショッカラ……99
初七日……185
除夜の鐘……191
ションベエゲーロ……240
シラオ……62
しらせ……235
汁……25
汁かけ飯……92
白いアザ……93
白い馬……231
白い鶏……231
シロカキ（しろかき、代かき）……41,47,56
白けし……60
白炭……58,62
白豆黒豆……284
白無垢……6,7
シンキャク……169
シンゴ……256
ジンジャマイリ……147
信州街道……78
信州ことば……242
信州の影響……188
信州薬師縁起……337
身上わたし……122
人体各部の名称……240
身体表現唄……278,279,280,287
シンタク（新宅）……122,123
神道修成派……131
シンドリ……47,196
陣とり……256
親類サカズキ……167,168
シンルイザシキ……170
親類まわり……171
新暦……95

ゴチモチ投げ……32
伍長……109,115,116,117,118
伍長ヨリイ……118
コックリサン……257
コッパカゴ……328,329
コト……208
コト納め……208
コトク……241
ゴトク……10,11
今年のぼたん……288
コト始め……208
子どもと子どもで……302
子どもの組……110
子供のノベ送り……177
諺……238
こなしっこと……51
コナシの皮……14
コナッチョウ……241
小荷駄……62
コヌカのおひねり……175
コネバチ(こね鉢)…76,77,84,332
木の葉かき……64
木の葉まるき……64
コバソダテ……241
コバモチ……32
コビキ(こびき、木びき、木挽き)……42,57,60,63,82,112,139,195
木挽唄(木挽歌)……244,250,251
木挽き職人……250
コビル……15
コブレ(こふれ)……110,115
ゴボー(御奉)……167
ゴマ……4,94,105,231
胡麻がら……231
コマまわし……255
小麦……43
小麦の脱穀……51
ゴムグツ……13
コメー……29
コメーカキ(コメエカキ)……29,32
コメゾッキ……15
コメナシ日……26
米の収量……50
米俵……98
米の飯……15
コメボウ……32
子守り……112,113,161,162,256
子守りうた(子守り唄)…161,254
子守りっ子……151
子安地蔵……153
コヤづくり……27
御用ダンス……116
五輪さん……227
五輪平……227
五輪塔……137,228
五郎大明神……129
婚姻圏……151,163
コンゴー杖(金剛杖)……177,180
コンタ……241
ゴンダク……241
ゴンボーウマ……167

サ

災害記念碑……36
サイギョウ……57
サイギョウブチ……57
西窪神社……127
採草組合……54
祭壇……174
歳徳神様……190
裁縫箱……156
材木の石数……58
祭文……86,192
サイロ……53
境木……46
サカサガラス(さかさ鳥)……55,150
さかさ水(逆さ水)……174,191
魚とり……257
さかなを食べる機会……24
サカムカエ……148
先山……63
サクイレ……56
さく切り……98
サクノハナ(サクノ花)……188,195,196,205
笹板……34
ささ板ぶき……28
ササムジナ……236
坐産……154
差鴨居……311
サシコ……2,9,60,153
(さしこ、サシッコ)
サシマワシ……136,150,322,335
サシモノ……9,322
雑穀……17
雑穀入れ……332
雑草……47
サトイモ(里いも)……4,94,231
里帰り……172
里子……162
さなぶり……42
サナレ……240
ザマカゴ……329,330
サマダンゴ……188
サユミ……74
サル……95
サルノコシカケ……240
猿廻し……86
猿駕入……232
サワガニ……19
サワギガラス(さわぎ鳥)…97,242
三角四角で……289
三角先生……292
三月法事……184
三が日(三元日)……190,191,192
三元日の食事……193
蚕業講習所……69
三ゲ川……236
産後……158
三合ずり……99
山菜……3,19
蚕種……68
三十五日……185
三十三年忌……186
サンショウ……20
産褥で死んだ女……163
三途の川……175
産泰様……151,153
さんちゃんが……292
三堂川……135
三年びね……16
産婦……158
三夫婦……122
産婦の食事……158
産部屋……154
三本バシゴ……325,326
三間取型……309,311,315,316
山林……42
三隣亡……93
さんりんぼうの日……63

シ

シイ……16
鹿のロウ……236
地神講……139
地神さま……219
地神さん……211
地神待……210
シグツ(しぐつ)……14,71,73,74,256,326,327
地ぐも……96

クチ……58,59
クチコミ……60
口無し女房……189
区長……103,109,110,114,115,116,117,118,213
区長会……115
くつ……75
クツカキ……77
くつかくし唄……297
沓掛海道……81
クツ切り鎌……75
クツゴ……73,74
ぐっつき……255
くっつき合い……164
くね……325,326
区の組織……110
区費……115,117
クボ……241
クマ(熊)……64,65,66,236
熊射ち……64
熊おとし……65
熊の肝……65
熊野さん……131
熊野神社……127,128,131,137,150,153,228
熊野神社の烏ゴエ(熊野神社の烏午王)……37,55
熊の肉……65
クモ……101
倉開き……194
クラヤマ……73
クララ……14,76
車酔い……90
くるみとぬるで……234
クルミの皮……14
くるみ笛……255
クルリ棒……323
クレギリ……56
クロ……56
黒けし……60
黒炭……58,62
クロドシ……223
桑……69
クワ……179
クワアライ……56,222
鍬ガラ……180
鍬立て……194
クワヅル……76
桑の木の種類……69
桑の病気……69
桑畑……66
群蚕……68
クンチモチ……185,224,225

ケ

ゲーロッパ……239
ケイアン……69,162
経済圏……83,151
ケイバ……71
警報……118
警防団……117
ケイヤク(契約)……111,112,194
ケガ……90
ゲコウイワイ(下向イワイ)……147,148
ケゴ休み……68
けさ……237
ケサガケッ子……158
夏至……213
ケシコ……62
ケシボウズ……159,160
下駄……13
ゲタ材……76
月っくり火っくり……268,296
結婚式の日……166
結婚式の料理……23
結婚年令……163
結婚の条件……163
月蝕……101
ケバ……70
煙だし……60
ケラ……96
ケラオイ……47
下痢……87
現金収入……41
げんこつ山のたぬきさん……287
ケンツ……256
ケンデー……74,322,329
げんのしょうこ……87

コ

コーチ……56
コーデ……89
コアゲ……69
コイ……48
コイダシ(こいだし)……49,50
コイダシモッコ……329,330
鯉のぼり……212
コイミ……329
コイヤ……50
コイヤト……50
コウカケ……13,14
コウガケつくり……75
甲賀三郎(甲賀の三郎)……127,228
郷蔵……117
高原キャベツ……6,43,309
黄繭種……68
高原野菜……1,2,36,37,43,44,78
コウジカビ……22
江州屋……84
荒神さん……131
庚申待ち……139
講中……138
香典……183
コウネ……49
弘法様……229
弘法さんの出生日……140
弘法大師……94,178,229
弘法のさかさ杉……229
コウマヤ……311,313
糊屋……14,70
氷とり……121
コエゴシラエ……50
五右衛門風呂……30
ゴオロウ……241
コガキ……60,61
五月節供……211,255
コガマ(小鎌)……60,326
告別式……179
ゴクトウノ辻……71
コクル……241
ゴクロウフルマイ……170
こごみ……20
コゴミナタ……326
小作……52
コザシキ……29
コザハバキ……13
護寺会……117
腰から下の病気……90
コジハン……18
腰巻……12
コジモチ……242
御祝儀の着物……6
五十五のごうさらし……94
コジュハン(こじゅはん)……15,24,205
小正月……195,196
小正月の飾りかえ……195
コジョハン(こじょはん)……15,196
ゴゼ(巫女)……85,192
ゴゼノボー……85
ゴゼン……25
コタツ……30
ゴチモチ……23,34

カユカキ棒(かゆかき棒、粥かき棒、ケイカキ棒、ケーカキ棒)…55,195,196 204,205
からす(烏)……101,261
からすからす……263,286
烏ゴエ……90
カラスゴオウ(烏午王)……55,204
烏鳴き(烏泣き)……101,242
からすの唄……254
カラスの鳴きわかれ……236
カラスヘビ……19
刈り上げ……222
苅り敷き……4
苅敷苅干苅取約定書……118
狩りの笛……65
刈り干し……54
カリボシアゲ……54
刈りぼし刈り……53,58
カリボシゴヤ(カリボシ小屋)……54,55
カリボシツケ……54
刈り干しの刈り場……54
カリワケ(刈り分け)……4,37,52
刈分小作……37
家例……192
カワッパ……71
川ナガレモチ(川流れ餅)……188,222,223
川ナガレの朝……223
川流れの行事……41
カワラチチン……65
棺……177
簡易水道……26
棺桶……176
棺かつぎ……177
カンガラ……180
乾繭……84
官行造林……104
カンジキワタル……55
元日……189,190,191
カンジン様……188
カンジンボウ(カンジンボー、カンジン棒)……5,188,196 197,199,200 202,203,204
元旦……190
カンの虫……90
カンの虫切鑁……89
観音講……230
観音様……135
観音堂……135,210
観音参り……206
鎌原ゴウジ……243
鎌原氏……105
鎌原神社……129,130,138
鎌原の水……101
鎌原用水……26,27,47,48
ガンブタ……152,176,182
ガンボージ……226,239

キ

忌明け……185
祇園……214
キキン……21
木小屋……29
きこり……63
キサマ……241
汽車……235
キジリ……29,30
着初め……92
キダシ……31
北枕……174
義太夫……249
キチアケ……183
忌中払い……183
狐……236
狐つき……102
狐とむじな……99
キツネに化された話……236
キツネの嫁通り……236
キツネ火……236
キドリ……31
絹笠明神……150
キネ……186
キノエ午……208
キノエネ講(甲子講)……139,222
キノコ……21
木の石数……64
木の実……20
キビモチ……23
キミ……17
キミフミ……51
義務人足……120
着物を裁つ日……92
キャクザ……29
客仏……218
キャハン……13
キャベツ……71,151
キャベツ作り……43
キャベツの収量……44
キャベツ畑……71
キューデ(キューデイ)……123
キューデ仕事……123
牛馬の年とり……194
キュウリのはつもの……214
旧暦……95,96
キョウカタビラ(経カタビラ)……175,183
凶作……109
凶作の年……21
行商人……84
兄弟……121
兄弟サカズキ(兄弟かずき、兄弟盃)……166,167 168,169
共同飼育所……68
共有地……117
共有林……118
木寄せ……31
キヨメ……183
切替畑……46
切り傷……88
キリコミ……17
キリッコ……256
切り火……332
きりぶ(切り賃)……58
切りぼし……21
キワダ……14
キワラ(生ワラ)……102,175
木を切ってはならない日……95
禁忌作物……4
金肥……50
キンマ……60
キンマミチ……60

ク

クイゾメ……159
喰違四間取型……309,311,312 316,317,318
くうちゃんしいちゃん……295
クギウチ……255
くぐり……29
草刈り……53,54,98
草刈カゴ……328,329
草軽鉄道……106
草軽電鉄……2
草津軽便鉄道……82
草津電気鉄道……81
クサノオオ……240
グシ……28,34,34
クジナ……239
九十九夜……211
くすぐらせ唄……286
クズヤ……27,28
グズル……241
クゾ粉……21

親子サカズキ（親子さかずき、166,167,168,169 親子盃）
オヤづくり……27
オヤブン……118
オヨウカ……222
オリボヤ……60
織りマブシ……69
織物……14
お礼銭……171
お礼参り……160
温床苗代……42
温泉……234
おんとり……274
女衆の御年始……193
女の子の遊び……254
女の名前……237
オンバコ……254
オンベヤ……203
オンボヤ……197,198,201 202,203,208
オンボヤ作り……198
オンボヤのご飯……203
オンボヤ焼き……196,197

カ

蚊……99,240
カアツオ（カアッソ、カワッツォ、カワッソ、カワッチョ）……13,14 74,75 256
回忌……186
カイコ神（蚕神、カイコ神、カイコの神様、蚕神様）……130,131,192 197,208
カイコジカレ……67
蚕手伝い……69
蚕の毒……69
蚕の病気……69
蚕ビリョウ……41
開墾……37,45,46
買い芝居……249
外出着……7
回転マブシ……69
カイバ……73
戒名……184
改良マブシ……69
カエル……19
蛙と雨……232
カカア天下……172
カカシアゲ……5,188,189,221
カカシ神……189
かかし様の立振舞……5
かかしさん……220
かかしさんのごくろうまつり 221
カカシサンの餅……221
カカシの年取り……5,220
カカシ餅……5,189,221
かがつくから……303
鏡……93,95
ガキ……217
かきロ……58
カギサマ……207,332
カギダケ……29
カキダシ……60,62
ガキの首……219
ガキの座敷……217
架橋……120
隠しことば……242
かぐら（神楽）……5,86,245
神楽獅子……215,244,245
カケ衣裳……15
カケオキ（チ）……164
かけごと……257
かごめかごめ……287,301
カサ（笠）……20,74,75
風穴……58,59,228
カサカケ……13
重なった不幸……186
飾り物……190
カジカ……19
カジカボシ……19
かじずみ……58
カシャ……173,233,234
鍛冶屋……58
柏餅……212
風切り鎌……35
風の神……201
かぜ除け（風除け、風邪除け）……91,207
数え唄……300
家族間呼称……121
家族の私財……105,123
肩上げ……15
肩こり……88
カタツキ……69
カタビラ……6
カタミ分け……185
片目の小さい理由……231
家畜……41
カチニ……56
カチンナワ……14
カッチキ……4,50
カッテ……313
かってうれしい……274
カッパ……237
カテメシ……17
門付……85,192
カド火（門火）……189,219
カド松（門松）……190,224
カドモチ……32
かなぐつ屋……77
カネコウバイ……28
カネコモチ……192
カノエ講……139
歌舞伎……111
兜造り……312
カブメシ……16
カブヤキ……18
かぶり布……11
カベ……45
カベツケオテンマ……33
カベトリ場……32
壁ぬり……32,33
カベ掘り場……27
加部安左衛門……107
カボチャのとしとり……224
ガボッチ……51
鎌……55
カマアゲ（鎌アゲ）……56,189
カマ神……193,203
鎌倉権五郎……129
カマダキ……35
カマ出し……60
カマド……30
カマニワ……60,62,193
鎌の柄……55
カマノロアケ……214
カミソリヌグイ……175
神なし月……220
雷除け……91,207,208
髪の毛……161
カヤ刈り（かや刈り、萱刈り）……33,58,98
萱刈り場……33
カヤゴシラエ……33
カヤスグリ……33
カヤ俵……43
萱の根……232
カヤノハシ……215
萱の豆……255
カヤバシ……93
かやぶき屋根……34
カヤマブシ……323
カヤ屋根……27
粥占い……204

大前……226
大マサッキリ……327
大晦日……225
大ムギのたねまき……40
大麦ヤキ……51
大めし食い……25
オカ……56
お蚕の神……70
お顔かくし……173
おかがま……58
オカサク……56
オカザリ……190,199
オカダ……56
オカボ……75
オカマノクチ……214
オガラ……14,35,241
オガラの灰……14
おかりや……147,148
オガンショバタシ……89,90,178
置薬……84
オキナグサ……255
オクウマヤ……310,311
オクツキ……152
オクノデイ……29
オグフウ……203
送り火……218,219
送り盆……217,218,219
オクマンサマ……89,90,91,129,130,153,173
お悔……183
オクリイチゲン……168
オクリンデー……312,313
オクンチ……124,216
オコサン……69
オコシッコ……256
お高祖頭布……11
オコブリ……15
オコモリ……189
オコワ……24
筬……74
オサキ……71,93
オサメ……186
お産……153,154,155,158
お産で亡くなった人……186
お産と夫……162
お産のときに食べてはいけないもの……93
御師……150
オシイ……23
オシイ飯……3
おしかけ嫁……172
オシガマ……326,327
オシカリ……241
おしこみ……234
お七夜……157
オシバ……99,241
オシボコ……34
おしめ……157
オシメ様……153
オジヤ……17,204
お釈迦様……211
オシャリ……69
おじょうさん……273
和尚のざしき……183
オショウバン……170
オショバレ……164
オシラサマノマイダマ……197
オシラサン……150,197,208
お諏訪様……228
お歳暮……121
お施餓鬼……217,218
オゼンバナ……240,255
オセンベエ……15
おそうぜん様……223,224
お供え……225
オタナ……206
お棚板……190
お棚さがし……190,191,193
オタネ……14,241
オタフク……30
オチツキ……166,168
落葉集め……64
おちゃづけ……15
お茶よび……170
オチョウメチョウ（男蝶女蝶）……166,168,169
オッカアザ……29
オッカサンザ……30
オツケダンゴ……17
おっちゃんどこだい……260
オツミ……17
お通夜……175
オテショ……25
お手玉唄……253,263
オテノクボ……25
お寺のおしょうさん……285
お寺参り……183
お天狗清水……101
オテントウ様……159
オテンマ……3,31,32,33,34,104,119,120,131,133,152,178,193,197
オテンマ帳……120
オトコヅクリ……163
男の子の遊び……255
男の節供……211
音無し川……136,228
オトリモチ……169
鬼……211,212
鬼きめ唄……284,287,288
オニッコ……162
鬼とり唄……301
鬼の目玉……188,206,225
オネ……241
オネットウ……17
オネンブリ流シ……214
オノアナ……58,60
オハカ……182,183,185
お墓参り……183
お歯黒……12,171
オバタケ……74
オバタテ……242
オヒトツ……254
オヒナガユ……189
オヒナ様……138
オヒナ祭り……209
オヒナメシ……209
お日待ち……138,147,149
お百度参り……173
オヒル……15
オブアケ……159
お布施……183
お札くばり……224
オブヤキ……159
オボガミサマ……162
オボキ……156
オボスナ様……105
オボタテノメシ……156,157
オボヤ……158,159
オボヤケ……159
オボユ……156
お盆……216
オマイダマ……193,202
オ松引キ……197
お守り……102
オマンマ……25
オミゴク……127,199
オミタマ様……205
オミヤマイリ……154
おミヤメグリ……148
思い川……228
オヤ……51
オヤカタ……194
親木……63

一年なべ……332
一の枝……63,95
一宮講……149
イチマケ……124
一毛作……56
一匁の一助さんは……271
イチヤカザリ……224
一ちゃんちの二ちゃんが……290
イチョウガエシ……12
イチリットライライ……269
イッケ……124
一茶……313
一反の長さ……14
イヅナサン(飯縄さん)……130,150
飯綱大権現……191
一ぱい飯……93
井戸……27
糸まりつき唄……264
稲作……42
稲作の限界線……42
稲作の初め……42
稲荷様……102,123,130
稲荷まつり……208,223
イヌコロ……240
イヌッパジキ……5,152,181,182,185
イヌヨケ……182
稲刈り……50
イネの種類……42
位牌……122,177,184
位牌分け……184
いぼ……89
いま稲荷……101
今井の小字名……227
忌み……187
忌詞……95
いもいも……269
イモオロシ……326,327
芋がら……231
いもの原由記……336
いもの粉……18
入会地……117
入り口(彼岸の)……210
イレカゼ……97
イロリ……29,30,176
イロリブチ……3,30
岩魚……19
隠居……105,122,123
インキョシュ……122
インキョメン……122
インドウ渡し……179

ウ

ウコン……14,15
うさぎ追い……257
牛……72,73
氏神様……191
氏子総代……117
牛ゴヤ……313
ウジコロシ……101
ウシッピキ……257
ウシノキンタマ……240
牛のクツ……74
丑湯……214
臼……176
臼と杵……332
うずらとひばり……232
失せ物……91
ウソ……173
ウソの鳴き合わせ……101
うちのコンペトさんは……280
うちみ……87
うどん……16,17,22,23
ウドンゲの花……101
卯の日卯の刻……189,190
嬢捨山……234
ウブギ……156
産湯……156,158
馬……4,41,53,70,71,82,83,99,128,188,193,194,206
馬洗い井戸……226
馬市……4,72,73,102
ウマイレ……56
馬方……42,82,149
馬方渡世……41
馬方節……82
ウマゲーロ……240
馬小屋……227
馬捨て場……73
馬づくり……72
馬の餌……53
馬の神様……148,223
馬のくせ……71
馬のクツ……74,75
馬のクラ……330
馬の祟り……231
馬の種つけ……71
馬の特徴……70
馬の年取り……188,193
ウマノハ……238
馬の病気……71
馬のまきめ……71
馬の水……71
ウマヤ……308,309,310,311,313,314,319
馬屋肥……53
生れかわり……235
埋め墓……182
ウルイ……19
ウルシ……20,88
うるしかき……77
ウワザ……30
ウワヤ……60

エ

エエ(エー)……33,52,241
エエッコ……48,51
絵書唄……289,290,291,292,293,294,295,305
エズミ……162
エゾミ……162
エダ塔婆……186
エドリ……62
エドリッケブ……60
えな……156
えびす講……205,206,222,223
えびす様……205,206,222
エビスモリ……25,206
エラ……76
エンガ……49,56,195,325,326
エンガの使い方……49
エンサ……311,312,313
円通院……229
円通殿……135
エンバク……16,17
延命寺……135

オ

オーメ……7,14,70
オイザク……48
おいばねこばね……283
追分節……251
オオイレ……32
オオガキ……60,61
オオガシラ……208
大ガマ……326,327
オオカミ……181
大笹温泉……106,107
大笹宿……81
大笹神社……129
大笹の関所……79,234
大ド、小ド……29,73,203
大波小波……275,306

索　　引

ア

アオガヤの箸 ……129
アオケブ……62
青大将……19
アオバシの食いぞめ ……214
青山 ……297
アカ……93
赤いアザ……93
赤いも……45
アカソ……76
吾妻線……81
吾妻山神社 ……129
赤松のしん ……101
アカミ ……157,159
アガリチチ ……160
赤んぼうの髪 ……160
アキ ……207
秋蚕……67
アキジ……56
アキの方 ……190,208,224
秋の仕事……51
秋の彼岸 ……219
秋葉さん ……131,138
秋祭り……126,129,215,216,220,223
悪魔除け ……211
アゲ石……98
明け口(彼岸の) ……210
あけび ……255
あげひばり ……230
麻 ……14,74
麻糸……74
朝えびす ……205
朝草刈り……53
アサハン……15
アサヒキブネ ……325,326
朝参り ……191
浅間押し……26,27,36,99,107,108,117,129
浅間山……4,97,101,103,231
浅間山大爆発 ……2
浅間山と赤城山のケンカ……94
浅間山爆発 ……309,312
浅間山噴火和讃 ……143
浅間の煙 ……96,97
浅間の灰……69
浅間の噴火 ……108
浅間焼け ……5,106,107,135
麻物 ……7
朝湯 ……191
朝嫁 ……167
足入れ ……172
芦生田……41,105,243
あしかき……71
アシゲタ ……227
アシコンコン ……256
アジトリ ……254
アシバカケ……33
小豆ガユ ……204
アズキゴシゴシ ……237
アゼ……56
アゼシメ ……323,324
アゼノリ……56
あだ名 ……100,238
アタマスキ……69
新しいぞうりを使用するとき…92
アチヤ ……242
あつけ……88
アトクキ ……169
アトザシキ ……168
アトタズネ ……170
アトツギ ……121
穴っぶさげ ……222
穴掘り ……178,179,180
穴掘り伝馬 ……104,119,120,179
油……22
油いため……18
油餅 ……222
アホダラキョウ……86
雨ごい ……150
甘酒 ……127
甘酒祭り ……211
飴屋……86
アヤ ……254
あや玉 ……253
あやめがめ出した ……284
アラガミ様 ……131
一アルキ……82
アラク ……37,45,46,56
アラクオコシ……4,46
アラクホリ……46
アラケル ……240
アラタ……37
アラ田つくり……45
新盆 ……185,216,218
新盆貝舞 ……218
アローズ ……241
アワ……3,16,17,47
アワゾッキ……16
アワボ・ヒエボ(アワボ・ヒーボ) ……195,196
アワモチ……23
安産 ……101
安産祈願 ……153
あんたがたどこさ ……273,302

イ

いい嫁……172
硫黄……41
硫黄鉱山……1,2,26
硫黄玉……41
息つき竹 ……152
いくさみそ……18
イグサヨゴシ……19
イケニゴシ ……136
イザリバタ……70
石臼……56,332
石置屋根……28,313
石がま ……60,62
石津 ……227
石ナンゴ ……241
イシホタル ……240
石屋根……28
イズミ ……160,162,322,335
出雲の神様 ……221
伊勢講 ……147
伊勢まいり ……147,148,250
伊勢参唄 ……249,250
板 ……82,83
依託飼育……68
イタチグサ……87,239
板ひき……57
イタヤ……28
板屋の屋根ふき……34
イタワリ ……34,76
板割りナタ……28
1かけ2かけて ……278
一客 ……120
イチゲン ……165,167,170
イチゲンザシキ ……168,170
1、2の3 ……286
一人前の仕事……97
1年いちいち怒られて ……300

群馬県民俗調査報告書第十五集

嬬恋村の民俗

昭和四十八年三月二十八日印刷
昭和四十八年三月三十日発行　（非売品）

編集者　群馬県教育委員会

発行所　高崎市高関町九五　上野勇方
上毛民俗学会

印刷所　前橋市元総社町六七
朝日印刷工業株式会社
電話㊸四三六七